

「核不拡散体制の成立と安全保障政策の再定義」プロジェクト

宮本 雄二
オーラル・ヒストリー

(元駐中国大使、元国連局軍縮課長)



はしがき

本オーラル・ヒストリーは、政策研究大学院大学（GRIPS）において、科学研究費基盤研究（A）「核不拡散体制の成立と安全保障政策の再定義」プロジェクト（二〇一七～二〇二二年度）の一環として行われたものである。本シリーズとしては、『数原孝憲オーラル・ヒストリー』（二〇二一年）と『沼田貞昭オーラル・ヒストリー』（二〇二二年）に続くものとなる。一九六八年のNP T加盟、並びに一九七五年のその批准を経た後、日本外交はこのグローバルな体制の中で、アメリカや西側諸国と協調しつつ、独自に国際の平和と安定に貢献する道を探ることになる。宮本雄二氏が外交官として活躍された時代は、まさにそのような時代と重なる。

本オーラルは、宮本氏の長い外交官人生の中で、特に軍備管理・軍縮問題に焦点を当てて聞き取りを行った。宮本氏は日本の外交官切っ掛けの中国通として著名であるが、ご自身も軍備管理・軍縮問題を、対中国関係と並んで、自身のキャリアの約半分の時間を充てた第二の柱と語っておられる（本プロジェクト第一三回公開研究会「体験的核戦略論（INF条約からネオコンの登場まで）——東アジアに軍備管理・軍縮を！」二〇二〇年九月一九日<<http://www.npresearch.org/2020919.html>>）。本オーラルにおいて、この問題における宮本氏の知見に改めて光をあてることができ

たのではないだろうか。研究者の立場から最も興味深い時期は、国連局軍縮課長時代（一九八五～一九八七年）、及びそれに続く外務大臣秘書官時代（一九八七～一九八九年）時代である。この時代、宮本氏はいわゆるINF（中距離核戦力全廃条約）交渉をはじめとする軍縮外交の最前線におられた。当時の官邸や外務省に関する、数々の貴重な証言を得ることができた。その他にも、もはやお話を聞くことが適わない、丹波實氏をはじめ外務省の諸先輩方に関する貴重な証言も得られたと思う。

本オーラル・ヒストリーにおいては、『沼田貞昭オーラル・ヒストリー』同様に、外務省外交史料館で公開されている文書を参照しながら聞き取りをするという手法をとった。インタビューに際して使った一次史料は、すべてGRIPSレポジトリにて公開予定であり、併せて利用していただきたい。外交史料の公開は進んでいるものの、外務省外交史料館の利用は、利便性の点ではまだ向上の余地があり、デジタル史料を利用可能にすることで、さらなる日本外交史研究の進展を期待したい。

同時代の史料を前にしてのインタビューを行うことで、より正確で密度の濃い歴史証言になっていると考えている。文書史料からは読み取りにくい、文書の背景や関係者の認識、外務省内や主管課内での役割分担、首相官邸や他省庁との関係なども明らかになっている。本オーラル・ヒストリーでは、文書史料と口述史料の相互作用

も感じてもらえるのではなからうか。本オーラル・ヒストリーが公
式の外交史料を補い、日本外交への理解を深め、今後の外交議論に
つながれば、関係者一同の喜びである。

岩間陽子（政策研究大学院大学）

「核不拡散体制の成立と安全保障体制の再定義」プロジェクト

宮本雄二 オーラル・ヒストリー

〈目次〉

《宮本雄二 略歴》

《第一回》ソ連課首席事務官着任まで

生い立ち——大学入学まで	9
外交官を志す	10
京都大学での学び	13
外務省入省	15
留学——台湾と米国	18
中国課時代	21
開発協力課時代	24
国連代表部時代	27
在中国大使館時代	29

《第二回》ソ連課首席事務官時代

ソ連課首席事務官着任	39
丹波ソ連課長	41
ソ連課の雰囲気と大韓航空機撃墜事件	44
国際情勢認識	47
ソ連認識	50
INF交渉とSS-20極東配備	53
対ソ抗議	56
米国のINF配備の問題	58
INF交渉に対する日本の立場	60
ウィリアムズバーグ・サミット	62
START、SDI、INF交渉決裂	66
余話——秘書官の役割	69

《第三回》軍縮課長時代①

軍縮課長着任・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
 米国の軍備管理関係者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82
 N S T交渉の開始と軍縮課長としての所信・・・・・・・・・・・・・ 85
 I N F交渉とジュネーブ首脳会談・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
 S D I・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
 中曽根首相と安倍外相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
 一九八六年二月のレーガン・中曽根書簡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
 軍縮課長の欧州出張と米国の軍備管理関係者の訪日・・・・・・・・・・・・・ 104
 戦略核戦力の諸問題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 110

レイキャビク会談と中曽根首相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136
 軍縮課長の問題提起・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 138
 レイキャビク会談後の欧州出張・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 141
 レイキャビク後のI N F交渉に関する外務省の検討・・・・・・・・・・・・・ 143
 官邸へのブリーフィングと中曽根訪米・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 147
 「グローバル・ダブル・ゼロ」と検証問題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 149
 軍縮課長離任と日本の安全保障に関する所感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 151

《第四回》軍縮課長時代②

レーガンとゴルバチョフ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 121
 レイキャビク会談前夜のI N F交渉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 123
 レイキャビク会談・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 128
 I N Fに関する米ソ暫定合意・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130
 I N F交渉と東アジア諸国・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 133
 弾道ミサイル全廃の米ソ暫定合意・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135

略 歴

1946 (昭和 21) 年	7 月	福岡県に生まれる
1965 (昭和 40) 年	4 月	京都大学法学部入学
1968 (昭和 43) 年	9 月	外務公務員採用上級試験
1969 (昭和 44) 年	3 月	京都大学法学部卒業
	4 月	外務省入省、研修所
	7 月	アジア局中国課
1970 (昭和 45) 年	7 月	台湾 (中華民国) にて在外研修
1972 (昭和 47) 年	6 月	米国研修 (ジョージタウン大学、ハーバード大学)
1973 (昭和 48) 年	6 月	ハーバード大学歴史学修士
	7 月	アジア局中国課
1975 (昭和 50) 年	7 月	経済協力局開発協力課
1976 (昭和 51) 年	7 月	経済協力局開発協力課 首席事務官
1978 (昭和 53) 年	4 月	在国際連合日本政府代表部 一等書記官
1981 (昭和 56) 年	1 月	在中華人民共和国日本国大使館 一等書記官
1983 (昭和 58) 年	1 月	欧亜局ソヴィエト連邦課 首席事務官
1985 (昭和 60) 年	8 月	国際連合局 軍縮課長
1987 (昭和 62) 年	11 月	大臣官房 外務大臣秘書官
1989 (平成元) 年	6 月	情報調査局 企画課長
1990 (平成 2) 年	1 月	アジア局 中国課長
1991 (平成 3) 年	8 月	英国国際戦略問題研究所 (IISS) 研究員
1992 (平成 4) 年	10 月	外務省研修所 副所長等
1994 (平成 6) 年	11 月	在アトランタ日本国総領事館 総領事
1997 (平成 9) 年	6 月	在中華人民共和国日本国大使館 特命全権公使等
2001 (平成 13) 年	1 月	軍備管理・科学審議官 (大使)
2002 (平成 14) 年	8 月	在ミャンマー連邦日本国大使館 特命全権大使
2004 (平成 16) 年	12 月	特命全権大使 (沖縄担当)
2006 (平成 18) 年	3 月	在中華人民共和国日本国大使館 特命全権大使
2010 (平成 22) 年	8 月	退官

2010（平成 22）年	10 月	日中関係学会 会長（～現在）
	12 月	外務省顧問（～2011（平成 23）年 3 月）
2011（平成 23）年	7 月	宮本アジア研究所 代表（～現在）
2012（平成 24）年	5 月	日中友好会館 副会長（～現在）
2018（平成 30）年	7 月	日中友好会館 会長代行兼副会長（～現在）
2019（令和元）年	10 月	日本アジア共同体文化協力機構 理事長（～現在）

宮本雄二

オーラル・ヒストリー

第1回

開催日：2021年2月8日

開催場所：オンライン

〔出席者〕 (肩書きはインタビューの時点)

宮本 雄二 (元駐中国大使、宮本アジア研究所代表)

岩間 陽子 (政策研究大学院大学教授)

合六 強 (二松学舎大学国際政治経済学部専任講師)

武田 悠 (広島市立大学国際学部講師)

吉田 真吾 (近畿大学法学部准教授)

質問票

1. 大使は 1946 年に福岡でお生まれになり、69 年に京都大学法学部をご卒業されました。大使がお育ちになった環境、学生生活、外交官を志したきっかけなど、外務省入省に至るまでのことをお話してください。
2. 69 年、大使は外務省に入省されます。入省当時の省内の雰囲気など、入省直後のことについてご印象に残っておられることをお話してください。また、国内研修ののち、70 年に台湾に留学され、その後 73 年にはハーバード大学大学院を修了されます。台湾と米国での留学生活を含め、入省初期の時代のことについてもお聞かせください。
3. 73 年から中国課で、75 年からは開発協力一課で勤務されます。本省でのご勤務中には、緊張緩和の進展と停滞、ベトナム戦争の終結、第四次中東戦争・石油危機の生起など、国際環境に大きな変化がありました。こうした動きをめぐる外務省内の状況や雰囲気はどのようなものだったのでしょうか。ご印象に残っていることをお話してください。

■参考：当時のアジア局・中国課と経済局・開発協力課の陣容

アジア局長	1972 年 1 月～1973 年 8 月	吉田健三
	1973 年 8 月～1975 年 9 月	高島益郎
次長・参事官	中江要介、大森誠一	
中国課長	1973 年 3 月～1974 年 8 月	國廣道彦
	1974 年 8 月～1976 年 12 月	藤田公郎
中国課	犬丸忠雄、伊藤利雄、有信宗、大島和子、三島泰正、小倉和夫、 小森利貞、柳瀬友彦、斎藤正樹、前原スミ子、阿南惟茂、 赤倉亮、喜田修、岡崎清、上荒地修二	
経済協力局長	菊池清明	
参事官	石井亨、梁井新一 → 大鷹正、三宅和助	
開発協力課長	1975 年 4 月～1977 年 7 月	松浦晃一郎
	1977 年 7 月～1979 年 4 月	久保田譲
開発協力課	内田勝久、浦部和好、栗野哲子、夏目達夫、田村正樹、清水訓夫	

4. 78年には国際連合日本政府代表部の、81年には駐中大使館の一等書記官にご着任されます。米国と中国での在外勤務に関して、ご印象に残っていることをお話してください。この時代は、米ソ関係が悪化する一方で、米中関係と日中関係が一層緊密化していく時期でしたが、そうした動きが業務に影響することはございましたでしょうか。

■参考：当時の国連代表部と駐中大使館の陣容

国連代表部大使	安倍勲、西田誠哉	→	西堀正弘、西田誠哉、宮川渉
国連代表部公使	緒方貞子、明石康	→	赤松良子、藤田公郎、谷口誠
参事官	加藤淳平、恩田宗、大鷹市郎、堀内伸介、瀬崎克己、原島秀毅、林司宣		
一等書記官	寺田輝介、鎌谷勇吉、福田実、渡辺伸、河村武和、富川明憲、久山純弘、松井啓、桑原実、若杉慎、榎泰邦、坂路昭、藤原恒夫		
二等書記官	松尾沢丈敬、関根佐平、青柳興政、藤井直治、水谷周		
駐中大使	吉田健三	→	鹿取泰衛
駐中公使	加藤吉弥	→	渡辺幸治
参事官	瀬木基博、土山道之、菅野道雄、浅井基文、川上寿一、林司宣、佐田庸利、五十嵐貞一、隅元保雄		
一等書記官	駒元春、望月敏夫、松沢純一、荒田孚、蓮見義博、吉沢清、菅野啓、大森寿明、長房明、鍋倉真一、大林宏、吉原丈司、加藤泰、樽井澄夫、高尾佳巳、友次京子、中村守雄、池田裕、中島明、加藤幸夫、小宮山猛		
二等書記官	松尾啓、細川寿珍、根岸和時、入野睦利、齋江知、佐渡島志郎、水野豊、淡路均、桂樹正隆、新井忠雄、沼田幹雄		

5. 最後に、83年1月のソ連課首席事務官ご着任当時の欧亜局やソ連課についてお聞かせください。

- (1) ご着任の経緯についてお聞かせください。また、前任者は高野紀元大使（軍縮課長に異動）でしたが、引き継ぎ事項はございましたでしょうか。
- (2) ご着任当時のソ連課長は丹波實大使でしたが、丹波課長の外交哲学や仕事ぶり、人柄など、ご印象に残っていることを伺えれば幸いです。また、丹波課長から野村一成課長への交代は、ソ連課にどのような影響を与えましたか。
- (3) 当時の欧亜局やソ連課内での役割分担についてご教示ください（下記「欧亜局・ソ連課・駐ソ大使館の陣容」をご参照ください）。
- (4) 大使が主管された日ソ関係・対ソ外交の案件について、ご印象に残っていることをお聞かせください。

■参考：ソ連課時代の主な出来事

1981年11月	レーガン提案（INF「ゼロ・オプション」）とINF交渉開始
1982年6月	START交渉開始
1983年1月	中曽根首相の訪米（「不沈空母」「四海峡封鎖」発言）
1983年1月	アンドロポフ発言・グルムイコ発言（SS-20の極東移転案）
1983年3月	レーガン大統領によるSDI発表
1983年4月	第3回日ソ事務レベル協議（東京）
1983年5月	ウィリアムズバーグ・サミット
1983年9月	大韓航空機撃墜事件
1983年11月	「エイブルアーチャー」
1983年11月	INF交渉の中断
1983年12月	START交渉の中断
1984年3月	第4回日ソ事務レベル協議（モスクワ）
1984年6月	第8回日ソ専門家会議（モスクワ）
1985年3月	ゴルバチョフ書記長就任
1985年3月	NST開始

■参考：当時の欧亜局・ソ連課・駐ソ大使館の陣容

欧亜局長	1981年12月～1984年1月	加藤吉弥
	1984年1月～1987年1月	西山建彦
審議官	都甲岳洋	
ソ連課長	1981年8月～1984年1月	丹波実
	1984年1月～1986年6月	野村一成
ソ連課	地域調整官：今志洋 → 岡崎慶興	
	専門官：菊池富男	

事務官：玉木功一、伊藤哲雄、高松明、篠田研次、森泉達士、
綾部高志、野口秀明、桂誠、蒲原正義、長内敬

駐ソ大使

高島益郎 → 鹿取泰衛

駐ソ公使

小和田亘 → 空席

参事官

久米邦貞、国安正昭、丹波實、米倉富郎、野上武久など

■ 生い立ち——大学入学まで

吉田 それでは、第一回の宮本大使オーラル・ヒストリーを始めてさせていただきます。本日は、我々の主たる関心事である八〇年代の軍備管理・軍縮問題に大使が関わる前の時代についてお伺いさせていただきます。質問票の1では、外交官になるまでのことをお話いただき、2以降で外交官になった後のお話をいただければと思っております。その1ですが、大使は一九四六年に福岡県でお生まれになり、一九六九年に京都大学法学部をご卒業されます。まずは大使がお生まれになった環境、大学に入学するまでのことをお伺いできればと思います。

宮本 私の生まれは福岡県太宰府市です。ご案内のとおり、奈良の時代から西の都として大宰府政庁が置かれ、その後菅原道真の太宰府天満宮が建立された。もちろん戦国時代などかなり乱れた時代もありましたが、江戸時代になって黒田藩の庇護を受け、「宰府参り」という言葉に表されるように、門前町として栄えた長い伝統を持っています。私の家は、実は太宰府天満宮と深い関係があります。私は、この歴史に彩られた町に生まれたことに強い影響を受けていると思います。私の歴史好きの原点だと思います。

子供のときの記憶では、人口は一人ぐらゐの小さな町でした。明治維新の前に三条実美を筆頭に「七卿都落ち」というのがあり、維新派の公家たちが京都を逃れ下関経由で太宰府天満宮に

たどり着き、約三年滞在しました。この間、西郷隆盛や坂本龍馬も含めて維新で活躍した人たちが訪ねてきているのですね。その後、多くはありませんが地元若者で、「七卿都落ち」に刺激され、明治政府で活躍した人も出ました。その代表格が小野隆助という県知事まで務めた人物です。修猷館高校入生の外交官、山座円次郎が大学に行くために金銭的支援を頼んだ福岡出身の成功者が、この人です。このことは、私が外務省に入った後、山座円次郎の伝記を読んで知ったことなので、私の少年時代にはあまり影響は与えていません。むしろ小野隆助の実家は定遠館と呼ばれ、日清戦争で捕獲した清朝の戦艦「定遠」の鋼板を使った門扉があったのをよく覚えています。明治の哲学者、井上哲次郎も太宰府の出身ですが、子供の頃、その名前を耳にしたことはありません。太宰府は基本的には非常に保守的で、まともは良いのですが、あまり外に出ていくような町ではないし、出て行った人はあまり覚えていない。そういう意味では、私の人生はめぐり合わせだなという感じがします。

高校は修猷館高校です。太宰府を抜け出し修猷館高校に行つたので、京都大学につながりました。あの当時、福岡の一番良い学校と言われている、太宰府の中学校から行つた私の成績は終わってから数えた方が早く、大変なショックで精神的にはかなりきつい三年間でした。後で聞くと多くの級友がそういう経験をしていたようで、今からすると大したことはないのですが、あの当時はやはり大変でした。

岩間 その頃、一学年は何人ぐらいいらしたのでしょうか。

宮本 団塊の世代が始まる前の年ですが、それでも一二クラスで六〇〇人以上でした。

岩間 地元の中学校はどれくらいでしたか。

宮本 三クラスで一五〇〜一六〇人くらいでしょう。修猷館では「これでは埋没してしまう」ということで勉強を始めました。修猷館の校風というか伝統はきちつと守られていて、良い学校に行かせてもらったと思います。とにかく自由で、学校の制約は全く感じませんでした。入学したときに校長に「今日から君たちは大人として扱われる。何をやってもいい。自分で判断し、自分で責任をとりなさい」と言われました。修猷館には校則はなく、校則がないから規則違反もないわけです。おかげさまで本当に自由な高校時代を満喫したのですが、なかなか学校の成績は上がりません。姉が九州大学に行っていて、姉に負けるつもりはありませんでしたから、京大か東大しか残っていないので、それを目指しました。兄が「出世するなら東大、勉強をするのなら京大」と言うものですから、京大に焦点を当てました。高校二年の三学期と三年の一学期は、人生の中で最もよく勉強をしました。

岩間 ご兄弟は何人いらっしゃいますか。

宮本 五人いて、私が末っ子です。岩間さんも経験したと思いますが、京大の入試は特徴があつてね。

岩間 私は帰国子女なので経験していません。

宮本 修猷館は一〇〇%九州大学向けの授業をするわけで、京大

の模試をやってくれるという通信添削があつたので、それで勉強しました。

■ 外交官を志す

宮本 中学校時代の同級生と話をすると、その頃から私は「外交官になる」と言っていたというのですね。向こうの記憶が間違っているのではないかという気もしますが。理由はよく分かりませんが、外に対する関心は子供のときから強かつたと思います。朝鮮戦争が始まった一九五〇年、私は四歳ですが、新聞に載る朝鮮半島のせめぎ合いの勢力地図が毎日変わるのを覚えています。また板付、今の福岡空港に米軍基地がありました。米軍の存在は日常的でしたし、一時期私の町にも米軍将校の庭つきの宿舎が造られたりして、そういうものに接する機会があつたというのは大きいと思います。それから、「李承晩ライン」という韓国が勝手に引いた線があつて、それを越えた日本の漁民がたくさん捕まり、『西日本新聞』で見た家族の泣き叫ぶ写真を今でも鮮明に覚えています。あの小さな町で育った割には外に対する関心が非常に強かつたというのはあつたと思います。

京都大学に入って一年目の秋に父親を亡くしました。私は母親っ子で父親の存在はあまり感じずに育つたのですが、父親が亡くなると自分の心に大きな空洞が生まれ、京都に帰って、本当に茫然自失で何も手につかなくなつてしまいました。これでは自分は

駄目になると思い、自分で人生を切り拓くしかないと思い定めました。

岩間 お父様はお幾つだったのでしょうか。

宮本 父親は六三で亡くなりました。

岩間 早かったですね。

宮本 それで真剣にいろいろ考えましたけれども、結論として外交になろうと決めました。新聞記者も学者も良いなと思っていたのですが、新聞記者はどうしてなるのかよく分からなかったし、吉田茂から水をかけられたりしましたから、脇に置きました。学者は、研究室に顔を出すとべらぼうな数の本が置いてあり、これを読むのは大変だと思ひ諦めました。後で「読んでない本も多いよ」と言われましたが、あの頃は本の数に圧倒されました。国家公務員も考えました。しかし、祖父が大失敗していたこともあって「宮本家の人間はお金のことは下手くそだ」という固定観念があり、お金とかあるいは経済に関係する大蔵省とか通産省は関心がありませんでした。サラリーマンはもともと自分は向かないと思ひ込んでいました。国家公務員で自分の生きがいを感じられるのは、一つは外務省でもう一つは文部省だと思ひました。教育というのは国家百年の計で大事だと思ひていましたから。結局、自分の人生をかけるに値するだろうということで、大学二年の初めに外務省に入ることを決め、外交官試験の準備を始めたのです。

岩間 随分早いですね。

宮本 私自身生活は楽しやなかったのですが、父親が亡くなり、

学校の先生をしていた兄が私を助けてくれたので、勉強を生活の中心に据えました。

岩間 当時は、専門の勉強はいつから始まっていたのですか。

宮本 三年からですよ。

岩間 三年ですよね。二年といたらまだ教養にいて、皆はのほほんとしている段階ですね。

宮本 今はいろいろな便利なハンドブックがあるのですが、その頃は何もありませんでした。ただ、確か司法試験の『受験新報』とかいう本があつて、その中にときどき外交官試験の経験談が出ていたのです。それを古本屋に行つて探して、一〇冊ぐらいになりましたか、先輩がどういうことをしたかということを読んで、何をやったら良いかを考えて自分で勉強を始めました。

吉田 大学時代は、勉強会に入られていたのでしょうか。

宮本 三年の後半から四年の受験のときまで、外交官受験志望の六、七人で経済学の勉強会はやりました。京大の経済学はマルクス系で国家試験に向きませんので、都留重人先生による翻訳が出たばかりだったサムエルソン (Paul A. Samuelson) の『経済学』を教科書にしました。

大学では共産主義、社会主義の洗礼を受けました。休憩時間に連中が入ってきて政治宣伝をするわけですが、連中の言っている言葉が全く分からぬものだから、「これは勉強しなければいけません」ということで、必死に勉強しました。今でも中国共産党の連中と議論ができるのは、そのときのおかげです。

というのは、私の生き様、思考回路としては、これをクリアしないと役人になれないのです。共産主義、社会主義が正しいとなれば、日本政府は打倒の対象であり、政府では働けません。生真面目すぎますが、私にとっては著しく深刻な問題だったわけです。苦悶しているときに古本屋で猪木正道先生の本を見つけて、救われました。おそらく『独裁の政治思想』だったと思います。すなわち、社会主義は完璧なものでないということが分かったわけですね。猪木先生が言及しておられたローザ・ルクセンブルク (Rosa Luxemburg) という女性の哲学者の全集を読みました。最も鋭いレーニン批判をしたのは、彼女なのです。それを読んで、レーニンの共産主義には大きな欠陥があるということが理解できた。

それでも決断がつかない中で私の背中を決定的に押したのは、次の一つの単純な疑問でした。共産主義が正しいと仮定し、資本主義を打倒するとすると、資本家を打倒しなければならぬわけです。それで、「日本で資本家は誰だ」と考えたわけです。すぐ思いつくのは松下幸之助さんです。「松下幸之助さんを打倒する？これはおかしい！」と思いました。小学校しか出ていなくて、ここまで頑張り、そして今も社会貢献活動も一生懸命やっているとしゃる。こういう人を打倒せよという思想は間違っていると思いません。理論を現実には当てはめるときに成り立たないと確信しました。理論的に万全じゃないというのは、猪木先生のおかげで分かったわけですが、それを現実に置き換えたときにその理論は

破綻することが分かったので、私は自信を持って社会主義におさらばできました。それで外務省の試験勉強をしっかりとやれたわけです。

大学受験の時もそうでしたが、勉強の仕方も含めて、私は全部自分で考えます。三年の夏に外交官試験があり、定員の倍の数の人が一次試験に受かります。一次試験に受かり二次試験の口頭試問に臨むと、その中に面接があります。試験官に「試験の成績はどう思うか」と聞かれて、「あまりよくないと思います」と答えると「どうしてだ」と再質問され、「十分に準備したという意識がないから」と答えました。「もし三年で受かったらどうする」と聞かれたので、「今回は辞退します」と答えると「どうしてだ」と追及され、「今年受かっても成績は良くないはずだし、それにまだ大学で勉強しなければならぬことが山ほど残っている」と答えたと記憶しています。翌年の面接で同じ試験官が「今年の成績はどうだ」と質問するので、「勉強しましたから昨年よりは良いはずです」と答えたはず。相当生意気な受験生だと思われると思いますけど、それでも採ってもらいました。

外務省というところは私にとって、もともと敷居が高かった。それで当時、外交官試験の試験官をしておられた国際法の田畑茂二郎先生をお訪ねして相談すると、田畑先生が「自分も外交官になりましたが、実家が傾き、難しいと思いつめた。後悔している。今の外務省の敷居は決して高くはない。誰でも行ける。ぜひ受けなさい」と励まされました。

■ 京都大学での学び

吉田 大学時代は、田畑先生のゼミにご所属だったのですか。

宮本 ゼミは田畑ゼミです。

岩間 同級生は何人ぐらいいるのですか。

宮本 田畑ゼミは一六人ぐらいでした。テーマを決めて順番に発表し、質疑応答があり、田畑先生の総括コメントがあるというものでした。私は真面目に毎回出席しました。田畑先生がいらしたということは、私にとって大きな意味を持っていました。

岩間 その頃は、猪木先生はまだ教えていらっしやいましたか。

宮本 猪木先生は「日本政治史」のご担当でした。既に述べた経緯もありますので、私はもうむさぼるように聴きました。それから、勝田吉太郎先生がソ連共産党を徹底批判する講義をしておられて、勝田先生の言うことは乾いた砂に水がしみ込むように全部頭の中に入りましたね。

岩間 勝田先生、まだお若かったでしょうね。

宮本 四〇歳前後で、教授になられて間もなくでした。全部覚えていたわけですから、勝田先生の期末試験の結果は当然百点満点のAだと思ったわけです。そうしたらBなのです。先生に訳を聞きに行くと、「自分と同じことを言うやつは独自性がないからBだ」とおっしゃる。

吉田 より批判的な学生のほうが良い点数をもらいやすいということですか。

宮本 自分で考えていないということですか。

岩間 勝田先生の講義名は「政治思想」でしたか。

宮本 「政治思想史」だったと思います。

猪木先生は、「日本政治史」の講義で二回、四時間にわたってキリスト教とマルクス主義の類似性を、心を込めて説かれました。特に印象に残っています。

岩間 「日本政治史」というのはどのような感じの講義でしたか。

宮本 近代政治史でした。

岩間 明治から？

宮本 明治からの近代政治史です。他方、高坂正堯先生の講義は受けたことはありませんが、一九六八年、大学紛争でがたがたしていた時期、九月から有志が高坂先生にお願いをして実質的なゼミをやっていたいただきました。あの当時、助教ですからゼミはなので、私的なゼミをお願いし、やっていたいただきました。

岩間 講義はもうされていたのですか。

宮本 六七年に「国際政治学」の講座が新設され、講義はされていた。

岩間 田岡良一さんはもういらっしやいませんか。

宮本 田岡先生は既に退職されました。

岩間 残念でしたね。当時は、国際法は田畑さんだけですか。太壽堂（鼎）さんもいらっしやいましたか。

宮本 田畑先生が「国際法Ⅰ」を、太壽堂先生が「国際法Ⅱ」を、香西茂先生が「国際機関論」をご担当でした。

岩間 高坂先生はタスマニアから帰ってこられたところですよ。タスマニアの話は覚えていらつしやいますか。

宮本 タスマニアの話は、僕はむしろ本（『世界地図の中で考える』（新潮選書、一九六八年））で読んで知りました。

岩間 タスマニアには、何しに行かれたのでしょね。

宮本 本を読むと、高坂先生がタスマニアに関心を持ったのは、子供の頃に知った、タスマニア島原住民の滅亡の理由への知的好奇心がきっかけだったようですね。

九月から高坂先生のプライベートなゼミが始まって、それが私の京都大学での最大の収穫でした。ゼミ形式で、そこで高坂先生といろいろな議論をして大変な知的刺激を受けました。テイラーのヨーロッパ近代国際政治史の原書を使ってやりました。

岩間 A・J・P・テイラー（A. J. P. Taylor）ですか。

宮本 そうだと記憶しています。それをチャプターごとに担当を決めて報告するのですが、あの当時の日本では珍しいリーダーディング・アサインメントがありました。一週間に二〜三冊でしたが。

岩間 アサインメントは英語の本ですか。

宮本 英語の本ではなく、翻訳ものでした。私がよく例に出すモーパーッサン（Guy de Maupassant）の『女の一生』を読まされたのもそのときですね。皆で「何でこれを読んだ」という顔していたら、高坂先生が「国際政治がその当時の社会と離れて存在している」と君たちは思っているのか。その当時の社会を理解しなければ国際政治は理解できない。その当時の社会を理解する一番

良い方法は良い小説を読むことだ」とおっしゃった。この本は、そういうことで読まされました。それからモンテスキュー

（Charles-Louis de Montesquieu）の『法の精神』も、三権分立とかそんなことじゃなくて政治哲学書として読まされました。相当レベルの高い講義で、皆一生懸命になってやっただし、先生といろいろな議論をすることで強い刺激を得て知的に啓発されました。

その後、高坂先生だったらどう判断し、どういう回答を与えるだろう、というのが今日まで続く私の思考パターンになります。基本的には高坂先生の真似です。もし私にスタイルがあるとしたら、それは不可能と知りつつ、限りなく高坂先生の真似をしながら少しでも近づく、というものでした。「高坂先生に似ているね」というのが、私にとって最高の褒め言葉です。

岩間 高坂先生は、当時マスコミにデビューしたばかりと言いますか、吉田茂論などで注目されていたところだと思えますけど、お忙しそうでしたか。

宮本 いや、それを私たちに全く感じさせない人でした。今考えてみれば最も著作された時期ですし、積極的に発信し、しかも当時の政治指導者との関係もちゃんと大事にしておられる。八面六臂の活躍をしておられた時期なのに、僕らのこのゼミについては正面から取り組んでいただき、おぎなりの点は全く感じませんでしたね。私にとっては、物の考え方とかそういうことについて根本的な刺激を受けたのは、高坂さんです。

吉田 非公式の高坂ゼミのメンバーはどういう方々ですか。

宮本 いろいろいるのですが、外務省の官房長までやった小町（恭士）氏も仲間でした。

岩間 ロシア語の方ですね。

宮本 そうです。

岩間 五百旗頭（眞）先生にもお会いになられたのですか。

宮本 五百旗頭先生とじっくりお話をしたのは、外務省に入った後、アトランタ総領事をしていた頃で、京都では直接お目にかかったことはありません。

岩間 非公式ゼミには何人ぐらい参加していたのですか。

宮本 二五人ぐらいいましたね。

岩間 そんなに。

宮本 高坂さんと勉強したいということで、学部を越えて人が集まるのです。

■ 外務省入省

吉田 次に、外務省入省後の話を伺えればと思います。一九六九年の大学卒業と同時に外務省に入省されていますが、当時の省内の雰囲気など、入省直後のことについてご印象に残っていることをお伺いできれば幸いです。

宮本 外務省に入るときに研修語学に関する希望を出します。第三希望まで書く欄があり、私は第一希望を英語、第二希望をフランス語、第三希望の欄に中国語もしくはロシア語と書きました。

私と全く同じように書いたのが小町氏でした。他の入省者の語学はつぎつぎに決まっていくのに、我々二人だけはやかなか決まりません。後で分かるのですが、第三希望も含めてロシア語と中国語と書いたのはこの二人しかいなかったのですね。中国語とロシア語というのは、それぐらいポピュラリティーのない言葉だったのです。

私が「あなたの尊敬する人物は誰か」という質問票に毛沢東も入れていたので、そのこともどちらを中国語にするかに影響したかもしれませんね。結局私が中国語になるわけですが、当時保守色の強い佐藤栄作内閣ですから、今みたいに付度の世界だったら、「毛沢東を好きなやつは何だ」ということで、私なんかはねられたかもしれません。私は、共産主義は嫌いでしたから、愛国者としての毛沢東に感動していただけですけどね。

吉田 共産主義者としてではなく。

宮本 共産主義者というか思想家としてではなくて、愛国主義者としての毛沢東です。祖国を救うためにたどり着いたのが共産主義ですから。彼にとって共産主義は手段にすぎなかったわけです。

岩間 当時、毛沢東人気は絶頂期ですよね。

宮本 おそらく「宮本は中国を外したほうがいい」という議論があった可能性はある気はします。その後、このことを意識させられる出来事には一度も出会いませんでしたが。言葉の才能は小町さんのほうが上ですから、語学として難しいロシア語は小町さん

で良かったなと本当に思います。

岩間 大学時代、第二外国語は何だったのですか。

宮本 ドイツ語。

岩間 そうですか。

宮本 第二外国語を選択しなければならず、姉に相談したら「法学部はドイツ語」と言われて、そうしました。あの時代は、医学部もドイツ語です。

岩間 お医者さんはそうですね。

宮本 しかし、外務省では「中国語をやれ」と言われてね。外務省に入省して、三か月研修所に通いました。語学研修が中心で、あわせて外交官としての心構えも教わりました。外務省研修所は、吉田茂が戦後つくったもので、その伝統は残っていました。研修生時代、当時の皇太子殿下との懇談の機会を与えられましたし、吉田茂邸を訪ねるのが慣行らしかったのですが、私どもの時代には吉田総理は亡くなっておられたので、松平康東元国連大使のお宅を訪問しました。そういう風に外務省的な雰囲気を少し刷り込まれ始めたかなという感じがします。

大笑いしたのは、外務省の研修所にいろんな人の講話集が置いてあるのですが、その中に入った、外国人女性と結婚するのがいかに大変でやめておいた方が良いかというのを山ほど綴った冊子を読んだときです。岩間さんを前に申し訳ないのですが、あの当時、女性外交官はめったに入ってこないのです、男性を前提で話されたことですが、研修中に外国人女性と結婚するケースが急増

し、それを止めさせたいという思惑が見え見えでした。おそらく当時の外務省幹部からすれば容認できない社会クラスの女性と結婚する例が増えたからこういうことを言っているな、と反発を覚えながら直感しました。

研修所の三か月が終わりかけると、本省での配属が気になります。当時、ここには配属されたくないという課が二つありました。一つが北米一課で、千葉一夫課長。後から分かることですが、千葉課長はこの頃、まさに一九七二年に実現する沖縄返還交渉に携わっておられ、大変な成果を上げられるわけですが、何せ仕事が緻密で部下にも厳しい。もう一つが橋本恕課長の中国課でした。橋本課長も同じく七二年に日中国交正常化を成し遂げるわけですが、大変な課長で部下はビリビリしている。しかしその年、中国語は私一人だったので、中国課に行くことはもう決まっているわけです。米国研修組の中で誰が北米一課に行くのかというので大騒ぎしていたのを思い出します。

私は、七月一日、辞令を持って中国課に行くわけです。すると橋本課長が机の上に靴のまま足を乗つけて新聞を読んでいる。そこで「今度配属になりました研修生の宮本雄二です。よろしく願います」と頭を下げると、新聞をちよつと下げて私の顔をじつと見て、また読み始める。それで終わりです。

吉田 何も言わないのですか。

宮本 何も言わない。こういう形で私の外務省中国課における実務研修の一年が始まりました。先輩たちには恵まれました。当時

の首席事務官は渡邊幸治という人で、その後外務省の主流を歩き、外務審議官からロシア大使までやった有能な方です。総務班長は加藤紘一さんで、その後自民党の幹事長までおやりになって、総理になってもおかしくないと言われた方です。その人が総務班長として研修生である私の指導官でした。総務班には畠中篤さんと齋藤正樹さんもいました。私より三年、四年上の人が、在外研修とか勤務を終わって中国課で働いていました。特に畠中さんには弟のように面倒を見てもらい、かわいがってもらいました。

その当時は日中国交正常化の前で、台湾の中華民国と国交がありました。通常の外交業務は中国課の仕事の三分の一以下でした。残りは中国大陸の情報収集であり情勢分析でした。分析課という情報分析を専門にする課があったのですが、中国課には大量に中国の専門家がいました。戦前の大東亜省の中国関係者を引き継いだせいで、中国課はその当時から外務省の中で一番大きな課で専門家も多かったからです。

だから、私の中国課での研修は、外交実務というよりは情報分析のほうの訓練でした。記憶にあるのは、研修生の担当だった中国国連代表権問題をやったことです。世界中から来る情報を整理して、それらを踏まえて今年の見直しを書くというのが研修生の仕事でした。もちろん加藤紘一さんがまず手直しをし、それを渡邊幸治さんが手を入れ、課長に上がるときには立派なものになっているのですが、原案は研修生が書きました。

もう一つ印象に残っているのは、日本経済新聞の鮫島敬治記者

の話聞き、記録係を務めたことです。あの当時の中国は、まさに文化大革命の真最中だったわけですが、鮫島記者は北京駐在中の六八年六月に逮捕され、六九年一二月に釈放されます。鮫島さんは、その後中国で抑留されたときのことは口を閉ざして一切語っておられないのですが、七〇年に外務省に来ていただき、外には出さないということでお話を聞きました。あの当時、中国は大混乱で、どうなっているかについて喧々諤々の議論があり、鮫島さんの話はとても役に立ちました。

それからもう一つ付け加えておくと、中国課には中国をやってきた古い人たちがたくさんいました。戦前の中国で語学研修をしたり仕事をしたりしていた人がいて、良い経験をさせてもらったなどと思います。本当に大陸的な人たちが何人もいて、その後中国人と会ってもあまり驚かないのは、そのおかげだと思いますね。

岩間 当時、大使館は台湾にあつたわけですけど、大陸中国とはどういう関係だったのですか。

宮本 日中貿易は、一九六二年の「日中長期総合貿易に関する覚書」（通称LT協定）に基づき始まります。覚書に署名した中国側廖承志と日本側高碕達之助の頭文字をとってLTとなるわけです。一九六四年に連絡事務所を設置の取極めが出来ます。覚書事務所に外務省の人が入るのは七〇年、七一年ぐらいでしょうから、それまでは通産省出身者や経済界の方が行っていたと思います。外務省では、主として香港総領事館が中国大陸との窓口になっていましたね。もちろん中国大陸を承認している英仏といった国の

大使館とかも使えるのですが、しかし一番大きなチャンネルは、香港には中国大陸から新華社とかいろいろな形でたくさん人が来ていましたから、その日本総領事館だったかと思います。

岩間 当時国交がない状態で、日本人記者はどのような形で入っていたのですか。

宮本 一九六四年に新聞記者交換に関する取極めも出来ています。覚書事務所がいれば大使館の代理をするわけです。

■ 留学——台湾と米国

吉田 その中国課での研修の後に、台湾に留学されるということですね。

宮本 台湾で中国語を二年間勉強しました。大学では英語も普通にはかやっていますでしたが、中国語はやったことがない。三か月の外務省研修所での研修と、その後の週数回の実務研修中の中国語研修だけで、中国語が全く身につかないまま台湾に行きました。辞書片手に生活をしていないといけないという状況でしたが、台湾の二年間でかなり徹底して中国語の勉強をして相当良い水準までいきました。それで三年目はアメリカに行くのですが、中国語の力は当然落ちます。それが終わった後中国課の勤務になる訳です。

吉田 七年ですね。

宮本 それで、通訳をやらされたのです。当時の國廣道彦中国課

長が米語研修生で中国語をおできにならないものですから、その通訳から始まって、担当の空中航空協定関係の通訳をし、だんだんうまくなった。だから、中国課の二年間と台湾の二年間は同じぐらい重要でしたね。通訳をやらされると一生懸命に勉強しますから。当時は中国とやるときには全部発言要領がありますから、その発言要領を中国語に訳して、分からないときには戦前に大活躍した先輩の通訳の方に電話をして教えてもらいました。それを丸暗記しました。時々次官の通訳をするのですが、次官が決裁書と少し違うことを言ったときは、決裁書どおりに訳しました。決裁書は大臣の裁可を得ており、次官にはそれを要する権限はありませんから。

吉田 当時の次官はどなただったのでしょうか。

宮本 法眼（晋作）次官です。

吉田 台湾では、どこかの大学に入られたのですか。

宮本 私の語学力では大学に入るのは不適當だと判断しました。先輩たちは、二年目は台湾大学に入っていたのですが、私は二年目も語学学校（師範大学国語教学中心）に行きました。二年目は、白兵衛という元国民党の従軍記者をしていた方に付いて、作文の勉強もしました。上手な言葉は限りなく書き言葉に近づくと気づいて、書く力をつけるためにそうしました。日本語でも子供の言葉と大人ではどこが違うかといえば、大人の言葉は限りなく書き言葉に近づいていく。良い文章を書けないと良い言葉はしゃべれない。だから二年目は語学学校に行く時間を半分くらいにしたの

ですが、作文の授業の準備はべらぼうに長い時間がかかります。それでも最後は、『朝日新聞』の社説や天声人語まで訳しました。それ以外の時間はほとんどを中国の友人と過ごしました。語学学校の毛長善先生にはしょっちゅう自宅に呼んでもらい、公私ともに大変お世話になりました。私の中国語は生活から生まれた中国語で、英語は本から生まれた英語ですから全然違います。

岩間 台北にいらしたのですね。

宮本 台北にいて中国の友人たちともよく議論しました。

岩間 ちょうど米中和解に至る大激動期で、すごい時代に台湾にいらっしやいましたね。

宮本 そうなんです。

岩間 台湾の方々はどうな様子でしたか。

宮本 それはショックだったと思いますが、国民党は今の中国共産党と同様、場合によってはそれ以上に言論統制をしていましたので、一般の人たちは多くを知りませんでした。七一年七月にキッシンジャー (Henry A. Kissinger) が中国を訪問するんですが、それを一面トップで大きく伝える『朝日新聞』——日本人は『朝日新聞』を購読できました——の関係記事は全部真っ黒に塗られていました。

岩間 ええっ!!

宮本 そういう検閲を蒋介石時代の中国国民党はやっていたので。だから、我々は外で何が起こっているかというのはよく分かりませんでした。七二年二月のニクソン大統領訪中の時も台湾に

いましたし、七二年九月に田中角栄総理が訪中し日中国交正常化が実現したときはアメリカにいました。地元の『ボストン・グロープ』紙は経済欄の数行で田中訪中を伝えただけでした。自分は大きな出来事から見放される宿命かと悲観的になったものです。七三年に中国課に帰ってからは日中関係の正面に押し出されて、逃げようと思っても逃げられなくなりましたが。

台湾での一番大きな収穫は、台湾社会というものを理解できたということですね。それから、日本と台湾の関係についても考えましたし、中台関係についても考えたり、台湾というものをかなり理解できたことは、それからの中国を考える上で大変大きな助けになりました。

吉田 台湾時代のご友人というのはどういう方々だったのですか。

宮本 形式的には学生の身分でしたから、草の根の有識者との付き合いです。本省人(台湾人)、外省人を問わず、国民党政権に批判的な人が多かったですね。本省人の人たちは、日本統治時代も知っている人たちでしたが、政治の話をするのを本当に怖がっていました。国民党の悪口を立ち聞きされると翌日、言った人が消えてしまう。家族が警察に行つて「探してください」と言つても警察は探さない。彼らが捕まえたのですから。蒋介石と一緒に来た外省人の人たちは、父親や親戚が良いポストについている人が多いので、あまり心配せず蒋介石批判をしていました。

吉田 今の台湾と比べると大分違いますね。

宮本 全然違いますね。そういう時代も台湾にあったのです。

武田 当時、必ずしも親政府的ではない方と接触されても、特に問題はなかったのでしょうか。

宮本 問題はないです。ただ、政治、特に台湾独立運動には絡むなどということは、出発する前に橋本課長からきつく言われました。そこは注意しました。

岩間 当時、大陸中国からの人の行き来というのはあったのですか。

宮本 ないです。台湾にいと大陸のことが全く分かりません。だから、勉強も兼ねて香港に二〜三週間行ったことはあります。そのときには外交パスポートだったので、帰りに中国大陆のお酒を持って、それを帰ってからふるまうと、特に外省人は感激していましたね。やっぱり当時、外省人たちの心はまだ大陸にあったのですね。今は世代交代とともに台湾生まれの人が多くなり、変わりましたが。

岩間 ハーバードではどこで勉強されたのですか。

宮本 ハーバードでは、チャイナ・スクールの加藤絃一さんが学位をとることを始めたせいで、後輩は迷惑しました。学位をとらなかつたら勉強していなかったことになってしまいます。大学院の授業に遅れずに単位をとろうと思ったら本を読むばかりになってしまう。私の話す英語は進歩しません。私は福岡生まれで大学は京都。新婚の奥さんは東京生まれの神奈川育ち。結局、私の日本語が上達しただけで、肝腎要の英語は進歩しませんでした。やはり台湾と同じように語学学校が最適だったのかもしれない。

ハーバード時代の、あのリーディング・アサインメントは本当にきつかったですね。

いずれにしても、最終的にはMAをヒストリー・デパートメントからもらいました。当時、ハーバードの証書は全部ラテン語で書いてあり、正式には何の学位をとったのか分かっていませんでした。アトランタの総領事をしているときに私の秘書のご主人がハーバード卒で、見てもらってやっと分かったわけです。

吉田 当時は知らなかったのですね。

宮本 知りませんでした。イエンチン・インスティテュートに属し、そこでリージョナル・スタディーズをやっていたつもりでしたから。外務省の研修のレールの上に乗っていったので、こういう珍談も起こりえたのでしょう。ハーバードではリージョナル・スタディーズをやるときには、その地域の言語を二つ以上学ぶ義務があります。外務省研修生の場合は、中国語を既に学んできますし、日本語もできますから、形式的にここを免除され、普通の学生の二年目に入れるようにしてくれたわけです。

よく覚えている先生たちは、フェアバンク（John K. Fairbank）、ライシャワー（Edwin O. Reischauer）を筆頭に、中国経済史を教えるパーキンス（Dwight H. Perkins）それにシユウォルツ（Benjamin I. Schwartz）という大変な碩学の人がいって、“Intellectual History of China”を教えていました。先生が *Chinese Communism and the Rise of Mao* という古典的な名著を書いておられ、中国共産党研究の第一人者だと思っていたので、

先生に「中国政治のご専門だと思っていました」と直接疑問をぶつけると、「本当にやりたかったのは中国思想だったのに、冷戦時代だから、スカラシップや研究費をもらうには共産主義をやるしかなかった」とおっしゃっていました。先生の中国思想史の講義は本当に苦勞しました。我々は中国思想のボキヤブラリーは漢字で見れば大体分かるのですが、それに、シュウオルツ先生を含めた碩学が微妙な意味を表わすために考え抜いて探し出した英語のボキヤブラリーを当てるわけです。ですから、普通の辞書には載っていないかったりする。これを講義で聞いて分かりますか。

吉田 普段全く使わないような英単語が並ぶ。

宮本 そうです。それから中国政治のホフハインツ (Roy Hoffsinz, Jr.) 先生と、最近亡くなった、当時中国の社会について教えていたボーゲル (Ezra F. Vogel) 先生の共同ゼミをとりました。ゼミの卒業ペーパーは、英語の本ばかり読んでいたのでは絶対にアメリカ人に負けると思い、幸いイエンチン・ライブラリーには満鉄調査団の農村調査報告書があり、ゼミの内容とも一致するので、これを使うことにしました。ゼミで皆が「あの問題が分からない、この問題ができない」と言っていたものの解答を満鉄報告書から見つけ出してペーパーにしました。ホフハインツ教授から「Aをつける。しかし僕が線を引いた部分に満鉄調査報告書の脚注をつけてくれたらAプラスにする」と言われて、早速そうしてAプラスをもらいました。実力ではなく発想の勝利ですね。時間的にギリギリで書いた英語もひどかったでしょうから、全く

自信はありませんでした。

吉田 でも結果はAプラスだったのですよね。

宮本 それはペーパーの話で、他は苦勞しました。シュウオルツ先生のところには泣きついて、最後はボキヤブラリーは漢字で書いても良いということで、ギリギリ合格でした。

吉田 このアメリカ時代は、台湾時代のように外で交流するというのはなかったのですか。

宮本 交流する余裕は限られていました。イエンチン・ライブラリーには院生用の机があるでしょう。講義に出ているか、ライブラリーで本読んでいるか、自宅に帰ってきてまた本読んでいるか。いや本当に、私にとっては大変な時間でしたね。

吉田 プライベートのことで恐縮ですが、ご結婚はこの間の七〇年ですか。

宮本 私は、実は台湾に行く前に婚約をしまして、台湾からアメリカに行く途中、七二年に日本で結婚をしました。家内は一か月ぐらい遅れてアメリカに来て、サマースクールはジョージタウン大学だったので、そこで一緒になりボストンに移りました。

■ 中国課時代

吉田 では、三番に入らせていただきます。台湾とアメリカでの留学から本省勤務に戻られるのが、七三年ということになりますね。中国課で七三年から勤務されて、七五年からは開発協力課で

勤務されることとなります。この時代は、米中和解の後に、ベトナム戦争が終結したり、第四次中東戦争や石油危機が起こったりと、国際政治の大変動期でした。この時代のことについてお伺いできればと思います。よろしく願います。

宮本 中国課では、私は本当に最末席の事務官で、その日暮らしというか、与えられた任務をちゃんとやるだけで精いっぱい、大きく世界のことを眺める精神的余裕は全くありませんでした。先ほど説明しましたように、外務省に入って一年目の中国課実務研修、しかも基本的には分析中心で、実際の実務を学ぶことなしに在外研修に出て、それが終わってすぐに先輩の仕事を引き継ぐわけです。それが日中航空協定でした。

日中共同声明では四つの実務協定を締結することが決めてあり、その中で一番中国と政治的にもめたのが日中航空協定。たまたま私の前任が三期上の斎藤正樹さんで、その人の担当を引き継いでしまった。どういう布陣だったかという点、國廣道彦中国課長、この方は外務審議官からその後中国大使をおやりになった。そして首席事務官が小倉和夫さん、この方も外務審議官から最後は駐仏大使をおやりになりました。そして総務班長が二期上の阿南惟茂さん、その下に一期上の榎田邦彦さんがいて末席に私が座ったわけです。

吉田 総務班だったのですね。

宮本 ええ。私はといえば、何の経験もないのに当時の中国課で一番重大な問題の担当官となり、國廣道彦、小倉和夫という外務

省でも抜きん出て優秀で仕事に厳しい人——自分が優秀だから下に対して要求が高いのですけれども——の下でやらされたわけです。ですから、この中国課の二年間というのは、外務省勤めの中でも一番厳しい時期でした。その後、大臣秘書官とかいろいろやりましたが、一番しんどかったのは中国課のこの二年間でした。私にとっては自分の実力以上の仕事があつと押し寄せ、それに対処するというのに明け暮れる。それ以外の世界には全く目が向かない、世界で何が起きているか考える暇もない、というぐらいい厳しい日々でした。

しかし、最後は自分なりにやれたという気持ちは持っていましたので、二年経って開発協力課に行くときには、「ここで生き残れたのだから、どこに行っても大丈夫だ」という自信を持ちましたね。しかし本当に疲れました。それでも、今の外務省の現役に比べるとまだよくて、最悪でも終電で帰っていましたよ。日中航空協定の問題は、その背景として日中国交正常化をめぐる自民党内のあつれきがあり、それがずっと尾を引いて内政も絡んで自民党を二分する大問題だったわけです。おかげで新聞の一面トップを何度も飾る外務省の最重要問題の一つでもありました。当然、仕事は山ほどある。そんな案件を担当していても、ときどき終電で帰る程度で済んだ。ほぼ全員の残業が続く霞が関の現状を見て、今は何が起きているのか、どこかが間違っている、特に国会対応に大きな問題があると強く思います。

吉田 当時の局長は高島……。

宮本 高島益郎という方です。腹の据わった大物でした。こういう大物の役人を当時の大平正芳外務大臣はしっかりとコントロールしておられた。高島さんに比べるとはるかに小物の私たちが局長をつとめる頃、「霞が関が政治を決めているのはけしからぬ」という批判が起るわけですが、役人を使いこなせない政治への批判がほとんどない。これはおかしいと思いましたね。政治の矮小化のほうが役人の矮小化より大きかったということです。

脇道にそれてしまいましたが、高島さんは学徒出陣で戦争に行き、数年のシベリア抑留を経て帰国。この時代の人たちは、一度は捨てた命であり、生き残った者の責任を強く感じておられた。だから正しくないと思ったことに対しては、「私は反対です。嫌なら、どうぞ私のクビをとってください」と開き直れる。この人たちは腹が据わっていましたよ、動揺しない。

そういう高島さんが仙台に帰省しておられたときに、報告はきちつとしておくべきだと思ってお電話すると、「こんな小さなことを一々報告するな」と逆に叱られました。うれしかったのは、高島さんや法眼さんというまさに外務省の中樞にいた方たちの、入省後四〜五年しかたっていない若い事務官である私への対応です。担当案件の決裁書を持って局長や次官のところに行くわけです。決裁はすぐに終わって帰ろうとすると、「まあ座れよ。今中国どうなっている？」と聞かれるのです。そのときに、「外務省のチャイナ・サービス、中国語を専攻した人間は、中国をちゃんと理解していることを外務省から期待されているのだ」と強く感

じました。

法眼事務次官については別のエピソードもあります。私は自分の抱える案件については法眼次官の通訳もやっていました。法眼次官は中国の駐日大使と都内某所で秘密交渉を何回もやり、外務省に戻るときは私も次官の車に同乗させてもらっていました。そのときに、「戦前のチャイナ・サービスの問題は、中国側の感情を害さないように手加減して通訳していた点だ。通訳の使命は正確に訳すことであり、政治的配慮は不要だよ。君はそういうふうになっちゃいけない」と教育していただけるわけです。これは私にとっては大きな意味を持つ指導でした。

吉田 当時は航空協定の担当官だったということですが、これは七四年に結ばれますね。

宮本 そうです。その後、間もなく日中平和友好条約交渉を中国側が言いだしてきて、私が中国課を離れるまで、最初の数回の交渉は私の担当でした。

吉田 立て続けに大きな案件を任されたのですか。

宮本 それで次官は東郷（文彦）さんに代わっていましたけれども、最初の二回ぐらい、次官の中国大使との会談の通訳は私がやりました。いずれにしても、波乱万丈の中国課の二年が終わって今日に至るといふか、外務省に四一年いましたけれども、一番大変だった外務省の二年が終わり、開発協力課に向かうわけです。

吉田 差し支えなければご教示いただきたいのですが、法眼次官の秘密交渉というのはどういう内容のものだったのでしょうか。

うか。

宮本 日中航空協定は、航空協定そのものではなくて台湾の扱いでもめました。日中共同声明で台湾を国として扱えなくなっただけです。あの当時はフラッグ・キャリアーという考え方があって、国を代表する航空会社がありました。日本は日本航空で、中国は中国国際航空でした。台湾は中華航空で、尾翼に「青天白日旗」をつけているわけです。台湾の表記の問題とも絡んでくるのですが、我々は中国を正統政府と認めている中で、具体的ケースにおいて台湾をどう位置づけるかという問題でした。中国側は形式を担保することを求めるわけです。中華航空が日本に乗り入れていく。これはまさに経済的な現実ですから、我々はこれを阻止するつもりはなかった。中国側は、それを阻止しようとしたり、少なくとも中国は主、台湾は従とはつきりとした差別をつけようとしたりして、いろいろ画策するわけです。

吉田 かなり根本的な問題だったのですね。

宮本 だから政治折衝になる。航空協定の条文の問題ではない。条文はあつという間に合意ができました。しかしその前に台湾をどう扱うかという根本的な問題を中国が突きつけて、我々が可能な限り台湾との関係を守ろうとして抵抗し、長引いたのです。

「台湾を犠牲にするのか」ということで自民党は自民党で大騒ぎをする。そういう渦中にあつたということですね（宮本注…日中航空協定など、この時代の日中関係に関心がある方は、國廣道彦『回想 「経済大国」時代の日本外交』（吉田書店、二〇一六年）

第三章を閲読して下さい）。

■ 開発協力課時代

吉田 では、引き続き開発協力課のお話を伺えればと思います。

宮本 中国課は、私が離れる半年ほど前に國廣課長から藤田公郎課長に替わっていました。藤田さんは、戦後のチャイナ・サービスの第一号で中国語もお得意になる。通訳をしていると、「上手な人が同席していると困る」とか「中国語は誰も分かる人がなくて良い」などと言う人もいますが、そう言う人は責任感がないと思います。重大な通訳をしているときに、通訳の間違いをニュアンスも含めて指摘してもらえることほどありがたいことはない。そうすることによって国と国との交渉が順調に行く。交渉の自身の重要性に鑑みれば「通訳のメンツ」なんて何だ、ということですね。これまでは國廣さんは中国語ができないから、中国語ができるのは現場で私一人です。そうすると、この交渉の中で言葉の解釈とか通訳の問題で問題が生じたときには、全て私の責任になるわけです。この責任は重いですよ。藤田さんがいてくれたから、私の責任は軽くなりました。通訳しているときに自信がなくて藤田さんの顔を見ると、「えーっ」という顔をして首をかしげている。「これはいかん」ということで、もう一度前から訳し直すのです。そうすると藤田さんが首を縦に振る。これはありがたかったですよ。だから、藤田課長にはその後も大変お世話になり感謝

していることはいろいろありますけれども、その一つは中国語の責任を課長に分担していただいたということです。

その藤田さんから、中国課で二年経って私も相当疲れてきたときでもありますが、経済協力局の開発協力課に行かせるかと伝えられました。そのときに「君を開発協力課にやるというのではなく、自分の趣旨は課長の松浦晃一郎の下で働かせるということだ」と言われたのを覚えています。松浦晃一郎課長は、その後外務省の要職を重ね、駐仏大使、そして最後はユネスコの事務局長にまでなる、桁外れに有能な方でした。そこで私は開発協力課での仕事を始めたわけですが、それまで中国課で本当にこき使われたので、六〇七割で流そうと、自分としては手抜き工事でやっていたつもりでした。そうしたら藤田さんに会ったときに、「松浦課長が宮本君はよくやってくれると喜んでいたよ」と言われてびっくりしました。「何だ、中国課が異常だったんだ」としみじみ思いました。

経済協力局に来て一番大きな収穫は、初めて、自分たちの仕事と実際の世界が結びつく経験をしたことです。外交というのは大事なことだというのは頭では分かっていますが、実際の人々の生活となかなか結びつかない。もちろん航空協定が出来ることによつて日中間に航空路が開設されるわけですから、それはそれで大きな意味を持つ。しかし開発協力課は、あらゆる経済協力プロジェクトのスタートであるフイージビリティ・スタディーをやる、それからプロジェクトが始まる、という位置づけでした。日

本のその後の経済協力案件のかなりの部分が、私の時代に行ったフイージビリティ・スタディーと関係しているわけです。我々の努力が、橋や発電所、学校や港といった具体的な成果に結びつき、多くの人が喜んでくれる。そういう現実的な喜び、現実世界と自分の仕事を結びつけてくれたのが経済協力局でした。非常に楽しかったですね。

また全く別の意味で楽しい意義のある外務省生活を知りました。中国課と違って国会質問もないし国会待機もゼロ。おかげで仲間と飲みに行くという機会が増えたとし、家に戻る時間も中国課よりずっと早い。開発協力課でそういう人間らしい生活に戻りました。何よりも松浦晃一郎という、ずば抜けて優れた人と一緒に仕事できて、とても良い経験になりました。私は本当に上司運に恵まれていて、ほぼ例外なく私が尊敬できる、そしてその後外務省でも重要な役割を果たされることになる先輩たちの下で働けた。これは私の運だなと思います。

武田 「開発協力課に行くというよりは松浦晃一郎の下に行かせるんだ」というのは、中国課を去られるときに課長からそう聞かされたということでしょうか。

宮本 直接聞きました。

武田 藤田課長から。そういうこともあるのですね。お役所ですと、人事は基本的に人手が足りないとか、空いたところに人をどんどん送っていくというイメージがありました。

宮本 あの当時の人事は親切で、直属の課長が次の人事にかなり

の発言権を持っていました。今考えてみれば、私がお仕えしていた課長に影響力があつたのでそういう結果になったのかもしれない。おかげで、課長が部下の人事の面倒は見るのが常識だと考えて、自分でもやってきました。

吉田 開発協力課時代には、出張に行かれて援助先を直接見るようなことはあつたのでしょうか。

宮本 このときのおかげで私の海外出張先が格段に増えましたし、援助プロジェクトも沢山見ました。我々の協力で現地の人たちが喜んでる姿も、このとき知ったわけです。印象に残っているのは、ブラリ川総合開発計画という大規模な水力発電と、その電力を使うアルミ工場を建てるというプロジェクトについて協議をするために、パプアニューギニアを経験したことです。パプアニューギニアは一九七五年にオーストラリアによる国連信託統治から独立しましたが、その直後でもあり、日本が入ってくるのをオーストラリアは内心歓迎していないようでした。しかし、あの頃の日本は日の出の勢いですから、日本の資金は欲しいということでは表面上は歓迎でした。結局は豪州も入れた日・豪・パプアニューギニアの合同会議となり、日本代表として行ったわけです。パプアニューギニアは、日本が太平洋戦争を戦ったところでもあり、ラバウル、ブーゲンビル、それに首都のポートモレスビーなどはよく戦史に出てきます。戦時中に、「ジャワの極楽、ビルマの地獄、死んでも帰れぬニューギニア」という言葉があつたと聞きますが、ポートモレスビーでもそういう場所を訪ね、思いを新たに

したことを覚えています。

もう一つは一九七八年、当時の通産省がやっていた資源開発ミッションで、南部アフリカのボツワナ、ザンビア、アンゴラ、タンザニアを訪問したことです。当初は、一九七五年にアンゴラとともにポルトガルから独立したモザンビークにも行くつもりだったのですが、兼轄していた日本の駐タンザニア大使から政情不安で勧めないとの意見をもらい、諦めました。アンゴラは兼轄していた駐ザンビア大使からOKをもらい、リストに残りました。アンゴラ独立後初めての日本政府ミッションとなるわけです。当然外務省からも行くべきだと思つて関係者に働きかけましたが、地域課も経済協力局も「金がない」と言うので同行が難しくなつてしまいました。

松永（和夫）さん——その後経産事務次官になりました——が私のカウンターパートで、「行けないよ」と伝えると、「やはり外務省の人に来てもらう必要がある。宮本さん、通産省で負担したら来てくれますか」と言われ、私は当然同行するべきだと思つていましたので、省内の了解をとって同行することになりました。外務省の中で通産省のお金で海外出張したのは私が唯一かもしれません。おかげで三週間近く、南部アフリカのカ四か国を回つた。もう珍道中。これを話したら、一時間では収まらないぐらいハプニングの連続でした。この南部アフリカの経験が、その後、国連代表部でアフリカを担当したときにとっても役に立ちました。

ブラジリア近郊のセラードという地域を豊饒な農耕地にする

いうセラード開発計画の最初の段階にも関わりました。今や大成功を収め、ブラジルは大豆の一大輸出国になりました。農水省の方で、米国からの輸入に頼っているだけではいけない、代替国をつくるべきだという壮大な構想を持っておられる人がいて、この計画は実現したと思います。おかげでブラジルには二回ぐらい出張できました。

■ 国連代表部時代

吉田 では、七八年からの国連代表部時代についてお伺いさせていただきます。よろしくお願いいたします。

宮本 七八年春に国連代表部に赴任しました。政務班に所属し、班長は恩田崇参事官、副班長は瀬崎克己参事官でした。最若輩だったこともあり、ここでも可愛がってもらいました。質問票には私の肩書は書いてありませんが、最初、二等書記官で行きました。公使、参事官、特に参事官は沢山いて「石を投げれば参事官に当たる」と冗談を言われるくらいでした。雑巾がけをする二等書記官なんか貴重な存在だったので。その後一等書記官になるのですが、担当は第四委員会、デイクロナイゼーション・コミッティー（非植民地化委員会）と呼ばれ、植民地を独立させるための委員会です。まだ植民地として残っている地域はアフリカに多かったし、アフリカ諸国が最も関心を持つ委員会でしたので、代表部の地域担当としてもアフリカを割り振られました。

英語が前面に出る仕事はこれが初めてで、国連代表部では英語で苦労しました。開発協力課時代も英語は使ったのですが、主として国内調整が仕事でしたし、ハーバード時代にも触れましたが、ヒヤリングとスピーキングは米国で研修したとはいえないくらいお粗末なものでした。今西（正次郎）さんという私より五年先輩で英語の上手な方が私の前任でした。外務省ではめったにやらないのですが、大きな会議があるというので、今西さんの帰国を遅らせダブル配置になりました。今西さんの見習いという形で一か月間ぐらいやらせてもらいました。ある日、アフリカの解放同盟の重要な指導者による演説の報告電を書くことを指示されたのですが、英語力に加えサブスタンスの勉強も不十分でしたから、しゃべっていることについてほとんどメモをとれない。それで、短い報告電になってしまい、今西さんに見てもらおうと「これはないだろう」と驚かれ、「これしか聞きとれなかったんです」と口答えすると「あれぐらいの英語が分からなくてどうする！」と叱られました。「テイク (take)」というプレス・サービスがあつて、「プレスのために要点を記録にしたものを国連がリリースしているから、それを使え」と教えられ、生き延びました。国連代表部の最初の頃は本当に言葉で苦労しましたね。

有名というか、外務省では悪名高い、安保理非常任理事国選挙でバングラデシュに敗北するという経験もしました。着任から間もない七八年秋のことで、外務省の中では二度と同じ間違いを起こしてはいけないと語り続けられている出来事が起こりました。

しかも、着任早々の私は五〇票以上の大票田を持つアフリカ担当で、その半分はフランス語圏で、私はフランス語ができないとくる。これでは選挙運動はできないというので、途中からフランス語圏はフランス語の方（河村武和参事官）にお願いし、アフリカ北部のアラブ圏はアラビスト（渡辺伸参事官）に割り振ってもらって、私は英語圏だけを担当することになりました。しかし安保理選挙で負けると、「アフリカが逃げた」という話になった。

「そうではない。むしろ先進国の票を固め切れなかった可能性が高い」と言っておられた先輩もいましたが、結局アフリカが悪者にされました。我々の詰めも甘かったし、票読みもやはり甘かったと思います。そして何よりも、日本が非常任理事国選挙に頻繁に出ることに対するアジア諸国の反発もありました。今の中国にも似たところがありますが、やはり日の出の勢いの日本に傲慢さが生じ、それが開発途上国の反発を生んでいた面もあると思います。

着任から二年ぐらい経った一九八〇年頃、既に総括公使として着任しておられた藤田公郎さんから「西堀正弘新大使は安保理非常任理事国選挙に立候補する決意だ。今度はもう絶対に負けられない。何が何でも勝たなきゃいけないので、手慣れた陣容で戦いたい。もうしばらく残ってくれ」と言われました。私としては、ニューヨークという世界の先端を行く、何でもある文化的な街に残ることに何の異存もないのですが、まだ北京に一回も勤務したことがなく、これでタイミングを逃すことが心配でした。藤田さ

んの「北京は俺がどうにかする」の一言で安心して残りました。幸いなことに、一九八〇年の二回目の安保理選挙は競争相手がイランでした。七九年二月にイラン革命が起こり、一月に米国大使館が占拠され、安保理は一二月に大使館員の釈放を求める決議を出します。釈放が実現したのは八一年一月であり、我々が選挙運動を始めた頃は安保理決議違反状態にありました。イランが自滅して、その結果、日本はアジア・グループからの唯一の代表ということ、無事当選しました。

一九八一年一月に北京に飛びますが、幸いなことにその年の最初の安保理の議案がアフリカ問題でした。安保理の議席は代表の後ろに二人しか座れません。もちろん代表席には大使がお座りになりました。私はアフリカ担当官だということの後ろの席の一つに座れました。晴れがましい気持ちでした。そして任務は達成したという高揚感とともに北京に向かうことができました。

吉田 貴重な体験ですね。

宮本 マルチラテラル、多国間の外交交渉というものを勉強する機会でもありました。いわゆるバイ、すなわち二国間に比べて、マルチの交渉はプレーヤーが多い分難しい。英仏などの古だぬきは、そういう中であくどく振る舞っている。小国でも外交官が優秀だと大きな存在感を発揮する。外交のすごさというかあくどさというか、そういうものも含めて国連では勉強になりました。若い人たちの訓練のためには国連などの国際機関は絶対に良いと思います。小さな委員会だと日本を代表して発言できるわけです。

訓令なしの場合もあります。そこで自分の判断でやるわけです。小さな委員会ですから責任も小さい。ですから、若い人の訓練のためには非常に良いなというふうに思いました。

■ 在中国大使館時代

吉田 北京にいらつしやったのは丸二年間ということですね。

宮本 そうです。一九八一年の中国は、七八年一二月に、後に改革開放政策と呼ばれる新しい政策に舵を切つてからまだ間がなく、文革中の色合いというか雰囲気強く残したままでした。少しずつ変わり始めた中国を経験できたのは、非常によかったと思います。

配属は政治部でした。浅井基文参事官が部長で、私はその補佐として全てに目を通し、マネジメントの責任もありました。他の部員に手伝ってもらいながら、主として中国の内政をやりました。このときの経験が、オーソドックスな中国の内政分析の力を磨くという意味で貴重なものでした。基本は公開情報を丹念にフォローすることです。中国の新聞であるとか雑誌であるとか、書かれたものを果てしなく読むということ。話してくれそうな中国人の専門家——なかなか外国人に会ってくれる時代じゃなかったですが——を見つけて、話を聞き議論をする。私の中国分析のフレームワークのかなりの部分は、そのときの経験が基礎になっていると思います。

幸いに、浅井基文さんは学者タイプの方で本当によく勉強する人でした。なおかつ中国の中の人脈もすばらしい。中国の分析に関して、当時の外務省ではもう断トツに優秀な人でした。おかげさまで浅井さんの分析を通じ、中国共産党のことがよく分かりました。中国の実情というものをこのときに勉強できたというのは、大変ありがたかった。

政治部が担当した問題としては、一九八二年六月の第一次教科書問題がありました。中国課にいたときに台湾問題でしょつちゅう中国側とぶつかっていましたが、歴史問題が表に出てきたのはこれが初めてです。このときは鈴木善幸内閣で、園田直外相、宮沢喜一官房長官の布陣でした。鈴木内閣は、その解決のためにいろいろ苦労するのですが、私が外務省に入ったときの中国課長である橋本恕さんがそのとき情報文化局長をしておられ、八月に入り、教科書問題の中国担当ということで中国にお越しになった。韓国とも同じようにもめましたので、木内（昭胤）アジア局長が韓国を担当しました。橋本さんは、日中国交正常化の立役者であるだけではなく、実は日中航空協定の台湾問題を北京の日本大使館の参事官として実際に中国側と交渉した人でもあります。日中でもめるとすぐに白羽の矢が立つのですね。中国との間で妥協点を見いだし落着させるのが任務だったわけですが、そのプロセスを目の前で眺めながら勉強させてもらったということです。橋本さんは、やはり大物でした。橋本さんは全部自分で考えて、自分で演出して、自分で取りまとめていました。「局長、それでいい

のですか!」とこちらが慌てると、「官邸から一任されている。要するに俺にまとめてこいということだ。心配するな」と落ち着いている。

吉田 部下への相談もなかったのでしょうか。

宮本 全くありません。交渉の途中に、何かしわくちやになった紙をポケットから引つ張り出して、厳かに「これは総理から自分に直接言われたものだ」と言いながら、おもむろに読み上げる。

「これが中国の立場も考慮した日本政府の最終的考えであり、本件を解決したいという日本政府の決意の現れである。ぜひこれでもとめたい」と言いながら、厳しい目でぎよろりと相手を見て話を終える。後で聞いたら、「あれか、あれは俺が飛行機の中で書いたんだ」とのたまう。

吉田 そういう方法でまとめる。

宮本 まとめるのです。まとめた上で、今度は大臣とか総理の了解を取りつける。やはり日中国交正常化以来の橋本さんの力量に対する政治サイドの信頼は高かったですね。すごいですね、やっぱり。これが外交の現場での物事の解決であり、痛み分けしかない。結局、八月二六日の歴史教科書についての宮沢官房長官談話だけでは幕引きできず、九月上旬まで引きずるのですが、膠着状態を打破したのは橋本さんの働きです。

吉田 大使が北京にいらしたときは、この教科書問題以外で大きな問題はありませんでしたか。

宮本 特にありませんでしたが、教科書問題が終わるか終わらな

いかの九月二六日、鈴木善幸総理が訪中されて短時間の準備で大変でした。

吉田 八二年ですね。

宮本 訪中を無事終えて日本の空港に着いたら辞任を発表されて、中国側も「あそこまで一生懸命もてなしをしたのに」とがっかりしていたのを覚えています。

本当にあの時代、中国は何もない貧しい国でした。それでも今考えてみると良い時代だったなと思います。それは、中国の人たちが——普通の人たちですよ——貧しいけれども中国人であることに誇りを持っていた。すがすがしい中国人でしたよ。北京飯店でも、ものが盗まれることはありませんでしたし、外国人を大事にしなければいけない、恥ずかしいことはできない、といった国民の意識は非常に強くてね。今はもう金持ちになったし国は強くなったけれども、すがすがしくない。今の中国の人、社会を見ると、八〇年代初めの中国はよかったなと思います。

吉田 今日はいもう既に二時間半を超えるお話を伺っていますが、ソ連課首席事務官時代の話は次回にお伺いできればと思います。今日も非常に興味深い話をたくさんいただきまして、ありがとうございます。ございました。

宮本 本当に良い同僚、先輩に恵まれてとても感謝しています。ありがたいことで、運がよかったですとつくづく思います。

吉田 今日伺った上司の方々でその後も接点があった方は、どういった方ですか。次回伺うソ連課首席事務官時代には、高島大使

はソ連大使ですね。

宮本 高島さんとは、モスクワの大使公邸でお酒を飲みながら、戦争とかシベリア抑留時代のお話をやると聞くことができました。高島大使が、「最も心が痛んだ、経験したくなかったことは、抑留時代に同胞を売る日本人を目にしたことだ」と言っておられたのが心に残っています。それから、國廣さんは一九八九年、天安門事件後のアルシュ・サミットのときの外務審議官でシエルパ、すなわち総理の特別代表をおやりになって、政治宣言を出すときに私は担当の企画課長。サミット担当の経済局審議官が小倉和夫さんで、奇しくも中国課時代と同じ顔ぶれで仕事をしました。

岩間 同期のキャリアで中国語は一人だったということですが、それは当時普通だったのでしょうか。

宮本 我々の前後は二五人入省しているのに、私たちのときだけ二〇人でした。私の前後の期は中国語研修は二人ずつですが、私のときだけ一人で、ロシア語もそうでした。

はつきり申し上げて「中国語をやれ」と言われたときには「中国語を学んでも、いつになったら北京で使えるのだろう」と思っていました。あの当時、日中国交正常化がこんなに早く実現するとは思っていませんでした。本当に世の中は分かりません。中国がこれほど大きな存在となり、中国との関係がこれほど重要になるとは、あの頃は想像することさえできませんでした。皆、英語とかフランス語とかを学ぶことがベストだと思っていました。中国語は誰も希望せず、私と小町さんが第三希望で書いて、私が

中国語になったただけの話です。何十年後どうなっているかは本当に分かりませんね。

岩間 分かりました。他の方もよろしいでしょうか。

宮本 それじゃまた次回で。

合六 次回は一六日火曜日、お願いいたします。

宮本雄二

オーラル・ヒストリー

第2回

開催日： 2021年2月16日

開催場所： オンライン

〔出席者〕 (肩書きはインタビューの時点)

宮本 雄二 (元駐中国大使、宮本アジア研究所代表)

岩間 陽子 (政策研究大学院大学教授)

合六 強 (二松学舎大学国際政治経済学部専任講師)

高橋 和宏 (法政大学法学部教授)

武田 悠 (広島市立大学国際学部講師)

吉田 真吾 (近畿大学法学部准教授)

質 問 票

1. 本日は、1983年1月から85年8月の欧亜局ソ連課首席事務官の時代について、米ソ軍備管理・軍縮交渉に関する事項を中心にお聞きします。まずは、当時のソ連や国際環境について質問をさせていただきます。
 - (1) 83年は新冷戦の最盛期ともいえる時期でしたが、大使ご自身あるいはソ連課は、米ソ関係やソ連の対外行動の行方をどのように見ておられましたでしょうか。同年には、大韓航空機撃墜事件や「エイブルアーチャー」演習の影響で東西の緊張が急激に高まりますが、外務省内で米ソ戦争の可能性が論じられることなどはございましたでしょうか。
 - (2) 大使のソ連課時代には、アンドロポフ（82年11月～84年2月）、チェルネンコ（84年2月～85年3月）、ゴルバチョフ（85年3月～91年12月）と指導者の交代が相次ぎました。大使は彼らにいかなる印象をお持ちでしたでしょうか。また、指導者の交代が米ソ関係や日ソ関係に如何なる影響を与えると考えていらっしゃいましたでしょうか。
 - (3) 85年7月には、28年にわたって外相の座にあったグロムイコからシュヴァルナツゼへの交代が起きています。大使は、両外相にいかなる印象を抱き、この交代をどのように見ていらっしゃいましたでしょうか。
 - (4) 日米間ではソ連に関する非公式協議が行われており、83年には第11回会合が開催されました。ソ連に関する米国との協議に関し、ご記憶に残っていることがあればお聞かせください。

2. 次に、INFに関する米ソ交渉についてお伺いいたします（ソ連課のファイルに収められている下記の参考資料も適宜ご参照いただければ幸いです）。
 - (1) 当時外務省では、極東部に配備されたSS-20の目的や標的は何だったと考えられていたのでしょうか。また、ご玉稿【参考資料①】の中で、極東配備は「アジア・太平洋諸国にとり脅威の大幅な増大を意味」（67頁）していた一方、「アジア・太平洋諸国の反応は概して鈍かった」（73頁）と記されていますが、その理由についても詳しくお聞かせください。
 - (2) 83年に入ると、ソ連は欧州部でのSS-20基地の建設を行わない一方、極東部でのSS-20を欧州部のそれと匹敵するレベルにまで増強していきました。ソ連課は、この行動に内在するソ連の意図をどのように見積もっていたのでしょうか。
 - (3) 83年1月には、アンドロポフ発言やグロムイコ発言など、ソ連は欧州部のSS-20を極東に移転するという案を提示し始めました。大使は、こうした提案をどのようにご覧になっていらっしゃいましたか。ソ連側の意図についてもお考えを伺えれば幸いです。【参考資料②】また、これらに関する日本の対ソ抗議【参考資料③④】や対米協議【参考資料⑤⑥】についてもお話しください。

- (4) 83年3月、外務省は同交渉に関する日本の立場を定めますが、ソ連課はこの過程にどのように関与していたのでしょうか。主管課である国連局軍縮課を支援することなどはございましたでしょうか。【参考資料⑦】
- (5) 83年3月から4月にかけて、米国が「ゼロ・オプション」から妥協する形の新提案を模索し始めますが、大使はこのことをどのようにご覧になっていましたでしょうか。米国の動機、ソ連の反応、西欧の反応、日本の立場などについてお聞かせいただければ幸いです。
- (6) 83年5月、ウィリアムズバーグ・サミットが開催され、「我々サミット参加国の安全は不可分であり、グローバルな観点から取り組まなければならない。我々の国内世論に影響を与えることによって真剣な交渉を回避しようとする試みは、失敗するであろう」という声明が出されました。ソ連課は、このサミットにどのように関与したのでしょうか。【参考資料⑧】
- (7) 83年10月のワルシャワ条約機構の外相会議では、西側に対する穏健姿勢を示唆するような共同声明が発表されています。当時、東欧諸国はINFをめぐる西側との緊張を回避しようとしているという見立ても提示されていました。ソ連課あるいは欧亜局は、ソ連と東欧の関係をどのように見ていたのでしょうか。【参考資料⑨】

※参考資料

- ① 宮本雄二『『INF交渉』どうみたらよいか：複眼的アプローチのすすめ』『This is』第4巻第12号（1987年12月）
- ② ソ連課長「SS20問題を考える」1983年1月28日（外交史料館、2015-1279）
- ③ 第813号（外務大臣発米大使宛）「SS-20 極東移転問題に関するわが方立場（ソ連側への表明）」1983年2月1日（外交史料館、2015-0700）
- ④ 電報番号なし（外務大臣発高島大使宛）「貴使・チーホノフ会談」1983年4月4日（外交史料館、2015-0701）
- ⑤ 第764号（外務大臣発米大使宛）「シュルツ長官訪日（第2回外相会談）」1983年2月1日（外交史料館、2015-0700）
- ⑥ 電報番号なし（外務大臣発米大使宛）「INF問題」1983年2月4日（2015-0700）
- ⑦ 第3791号（外務大臣発在米・西独・英・仏・伊・白・蘭大使宛）「INF交渉に関する我が国の立場（訓令）」1983年3月17日（外交史料館、2015-0700）
- ⑧ 「サミットにおけるINF討議（共同ステートメント）」1983年5月25日（外交史料館、2015-0701）
- ⑨ 第8147号（村角臨時代理大使発外務大臣宛）「WP 外相会談等（米の見方）」1983年10月21日（外交史料館、2015-2409）

5. 最後に、米ソ間の戦略兵器関連の問題についてお伺いいたします。

- (1) ソ連課は、INF 交渉と同様に、START 交渉もカバーしていたのでしょうか。もしご記憶にございましたら、大使の軍縮課長着任までの時点で、日本が同交渉に関して着目していた点についても伺えれば幸いです。
- (2) 83 年 3 月、レーガン大統領が SDI を発表します。大使は、これが日ソ関係や軍備管理交渉を含む米ソ関係にいかなる影響をもたらすとお考えになりましたでしょうか。【参考資料⑩：北米保「米国の大陸間弾道ミサイル防衛政策」1983 年 12 月 12 日（外交史料館、2015-2409）】。
- (3) 83 年 11 月から 12 月にかけて、米国の INF 西欧配備を受けて、INF と START に関する米ソ交渉が相次いで決裂します。大使は、これをどのように見ていらっしゃいましたでしょうか。また、この中断から 85 年の NST（核・宇宙交渉）開始までの時期に、ソ連課が米ソ軍備管理交渉の準備作業に関心を払うことはありましたでしょうか。

■参考：当時の主な出来事

1981 年 11 月	レーガン提案（「ゼロ・オプション」）と INF 交渉開始
1982 年 6 月	START 交渉開始
1983 年 1 月	中曽根首相の訪米（「不沈空母」「四海峡封鎖」発言）
1983 年 1 月	アンドロポフ発言・グロムイコ発言（SS-20 の極東移転案）
1983 年 3 月	レーガン大統領による SDI 発表
1983 年 4 月	第 3 回日ソ事務レベル協議（東京）
1983 年 5 月	ウィリアムズバーグ・サミット
1983 年 9 月	大韓航空機撃墜事件
1983 年 11 月	「エイブルアーチャー」
1983 年 11 月	INF 交渉の中断
1983 年 12 月	START 交渉の中断
1984 年 3 月	第 4 回日ソ事務レベル協議（モスクワ）
1984 年 6 月	第 8 回日ソ専門家会議（モスクワ）
1985 年 3 月	ゴルバチョフ書記長就任
1985 年 3 月	NST 開始

■参考：当時の欧亜局・ソ連課・駐ソ大使館の陣容

欧亜局長	1981年12月～1984年1月	加藤吉弥
	1984年1月～1987年1月	西山建彦
審議官	都甲岳洋	
ソ連課長	1981年8月～1984年1月	丹波実
	1984年1月～1986年6月	野村一成
ソ連課	地域調整官：今志洋 → 岡崎慶興	
	専門官：菊池富男	
	事務官：玉木功一、伊藤哲雄、高松明、篠田研次、森泉達士、 綾部高志、野口秀明、桂誠、伊藤哲雄、蒲原正義、長内敬	
駐ソ大使	高島益郎 → 鹿取泰衛	
駐ソ公使	小和田亘 → 空席	
参事官	久米邦貞、国安正昭、丹波實、米倉富郎、野上武久など	

■ ソ連課首席事務官着任

吉田 それでは、第二回のオーラル・ヒストリーを始めたいと思います。本日の内容とも重なりますが、第一回の積み残しがありますので、そちらから再開したいと思えます。第一回は中国勤務までのお話を伺いましたが、その後八三年一月に大使は本省に戻られて、ソ連課の首席事務官に着任されます。まずは、このご着任の経緯及び前任者からの引継ぎなどについて伺えればと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

宮本 突然でしたね。正確なところはよく分かりませんが、中国課の首席事務官で帰るといふ話もあり、直前になってソ連課に行くことになってしまいました。あの当時、外務省六階の一方の隅が中国課、もう一方の隅がソ連課でしたので、逆の方に行っていました。ソ連課に引張ってくれたのは丹波實ソ連課長です。欧亜局長は加藤吉弥というフランス語の方で、私の北京時代、大使館のナンバー2の次席公使としてお仕えした方です。これこそ文化人という方で、文章も見事で、フランス風の皮肉屋でもありました。おそらく私のソ連課行きを支持していただいたと思えます。

丹波さんは、私が中国課の事務官をしていたときに北京の日本大使館政務班で仕事をしていて、条約交渉は丹波さんの担当でした。前回日中航空協定の話をしました。それを北京でやっていったのが丹波さんでした。丹波さんは一九七二年の日中国交正常

化のときも、栗山尚一条約課長の下で条約課にいて、交渉に関係しています。ちなみに、北京の大使館で航空協定に関係する台湾問題をやったのが橋本恕参事官だと言いましたが、その通訳をして支えたのは畠中篤さんでした。

前回、中国課がいかに大変だったか述べましたが、北京に行くとは今度は丹波さんが指導官になるわけです。仕事には厳しい方でした。たとえば、かばんの中にホチキスを入れていないということで、えらく叱られたことがあります。会議の合間に大使館に戻る時間の余裕がなくレストランで食事をしながら報告電を書いていたときの話です。「こういう緊急事態を想定していないとは何事か、心構え不十分、覚悟が足りない」と、きつく叱られました。タイミング良く報告電を書き上げるには、食事は五分で終え、場合によっては食事なしで、どこでも仕事を終えられるようにしておけということです。外務省で重要案件を担当してきた先輩ならではの厳しい叱責でした。「おまえは要領が悪い」など、さうざん叱られましたし、私は丹波さんからは評価されていないと思っていたので、ソ連課に引張ってもらってびっくりしました。

吉田 ホチキスの件でお叱りを受けたというのは、駐中大使館時代ですか。

宮本 私が中国課から北京に出張したときの話で、丹波さんは北京の日本大使館にいました。

吉田 七〇年代前半のことですね。そして八三年に、丹波ソ連課長の強い意向で宮本大使がソ連課に呼ばれた。

宮本 そのはずです。いずれにしても丹波ソ連課長、加藤欧亜局長が「宮本いいじゃないか」ということで引っ張ってくれたのだろうと思います。

吉田 加藤局長と丹波課長が宮本大使を引っ張ろうと思った動機は、どこにあったのですか。

宮本 直接聞いたことはありませんので、それは知りません。気がついてみたら中国課ではなくソ連課になっていて、こつちがびつくりしました。

吉田 中国課の首席事務官に就かれたのはどなただったのですか。

宮本 私より一期下の原聡さんです。

吉田 やはりノンチャイナだったのですか。

宮本 彼は英国研修組です。私も、中国課は中国語研修生ばかりですから、首席事務官はノンチャイナのほうが良いとかねがね考えてきました。結果としては良い人事になったと思います。

吉田 ソ連課首席事務官の前任者は高野紀元大使で、軍縮課長に異動されることになりませんか。

宮本 そうです。これは全部丹波人事だと思います。米ソの軍備管理交渉の主管は軍縮課ですから、安全保障が分かる者に軍縮課を担当させなければならぬという考え方があったし、それが丹波さんたちの狙いだったと思います。

吉田 ソ連のことを分かっている人が軍縮課に行った方がいいた。

宮本 米ソ軍備管理交渉の主役の一人はソ連ですから。ちなみに高野さんの後の軍縮課長になったのが榎田（邦彦）さんで、私の

中国語の一年上ですが、その榎田さんは丹波安保課長のときにその下で働いているのですね。

吉田 首席事務官ですね。

宮本 そうです。

吉田 当時、丹波課長の外務省内での力というのは、かなり大きかったのですか。

宮本 それは大きかったと思います。丹波さんが言い出したら普通の人は抵抗しませんね。それはよく考え抜かれているからで、単なる思いつきではない。そういう人には議論ではかかないませんからね。それでも丹波さんが尊敬し、配慮する先輩や同僚はいましたよ。

吉田 丹波課長への抵抗が生じにくいというのは、政策の面にも当てはまるのですか。

宮本 すべてですね。それに丹波さんが怒ったら本当に大変です。

吉田 セリグマン (Albert L. Seligmann) のインタビューに、丹波安保課長がアーミテージ (Richard L. Armitage) に対して怒り狂ったという記述がありました。

宮本 よく見かけました。それほど仕事に全身全霊を傾けていることの証しでもあると思いますよ。ソ連課に行けたのは、駆け出しの私を一応見込んでくれたということではあります。ソ連課時代も丹波さんから評価されているとは思っていませんでした。

その後、軍縮課長時代にS S I 20問題で一緒に動いた佐藤行雄さんが何かの時に、「いやいや、丹波は君を評価していたよ。ロン

ドンに出張して来たときに、宮本がいるから安心して出てこられる、と言っていたよ」と言うんでね。しかし、ソ連時代に褒められた記憶はなく、丹波さんの要望にいかに応えるか、緊張した日々が続きました。

岩間 私はお話したことはないですけど、近くで拝見したことがあります。何か近寄るのも怖いような感じの方でしたね。

宮本 常にびりびりしてるときに爆発する。丹波課長が来ると皆シーンとなり、懸命に仕事をする、少なくともふりをする。針の一つが落ちる音が聞こえるぐらい静かになるのです。いなくないとがやがや、ざわざわとし始める。丹波さんがリラックスした顔を見せるのは、半年に一度くらい、課員がそろって映画を見と一緒に食事をするときです。兄貴の顔になりますね。いずれにしても、ソ連課に行ったのも運だと思っています。

■ 丹波ソ連課長

吉田 丹波課長のお話が出たので、（第一回質問票の）5の（2）に移らせていただければと思います。丹波課長の人柄は今伺いましたけれども、丹波課長が持つていらつしやった外交哲学のようなものをお聞きになったりすることはございましたか。

宮本 彼が私に「読め」と言った本が三つあります。これはほぼ彼の血となり肉となつていていると思つていいと思います。キッシンジャー（Henry A. Kissinger）のメモワール、ウラム（Adam B.

Ulam）のソ連外交論、ドイッチャー（Isaac Deutscher）のトロツキー伝でした（それぞれ、『キッシンジャー秘録』桃井真監修（小学館、一九七九〜一九八〇年）、『膨張と共存…ソヴィエト外交史』鈴木博信訳（サイマル出版会、一九七八年）、『追放された予言者・トロツキー』山西英一訳（新潮社、一九六四年）、『武装せる予言者・トロツキー』田中西二郎他訳（新潮社、一九六四年）、『武力なき予言者・トロツキー』田中西二郎他訳（新潮社、一九六四年））。

国際政治では、僕らの時代は圧倒的にキッシンジャーの影響を受けている。あれが教科書的な感じでした。その後、現場はそんな理論どおりにやれないから、キッシンジャーが言っているようなロジカルで美しい世界ではないことが分かってくるのですが、キッシンジャーはもともと理論があるから、理論に従って起こった出来事を整理できる。しかし、実際にキッシンジャーが理論を意識したとしても、ニクソンは別の次元で考える。それでも私たちの世代がキッシンジャーに強い影響を受けていることは間違いないありません。

吉田 やはり現実主義、リアルポリティークというものの影響が大きいということですか。

宮本 外交自体、リアルポリティーク以外はない。そうじゃない人は外交の現場ではひどい目に遭う。外交は、「だまされたら、だまされたほうが悪い」という世界ですから。ある意味で、何でもありませんよ。だから相手を見抜かなければならないし、相手の

狙いを正確に判断しなければいけない。相手の甘言とか上手な言い方にだまされたら、だまされたほうが負けです。今回資料をいただいたので、丹波さんのペーパー（参考資料②）を読みました。が、隅から隅までソ連に対する不信感ですね。

吉田 にじみ出ていますね。

宮本 ソ連に対する怒りがにじみ出ているでしょう。だから、それが彼の基本的なフレームワークですね。したがって、圧倒的な日米同盟主義者です。

岩間 丹波さんは、略歴を拝見すると樺太からの引揚げだったよ。うなのですが、そのようなことをお話しになることはありませんか。

宮本 その話はよく聞きました。日本が戦争に負け、七、八歳の子供のときに割り箸を使ってソ連の国旗をつくらされ、それを振りながらソ連軍を迎えた。このことを語り出したら、丹波さんは泣き出すのです。悔し涙です。もともと豊かな生活を送っておられて、北海道に引き揚げてから丹波家は非常に苦しい生活を送った。やはり徹頭徹尾ソ連が嫌いでしたね。「ロシア人は良いやつだが、ロシア人が二人になるとソ連人となってしまい、大嫌いだ」と言っておられた。相互監視や嘘がまかり通るソ連共産党のシステムと、それがつくりだすソ連人は嫌いだ、ということでしょう。

最初にモスクワに出張をしたとき、モスクワの大使館には東郷（和彦）さんが政治班長でいてくれて、面倒見が良く、とても歓迎されました。五月という季節もよかったです。新緑の頃で、

川を見下ろす景色の良いレストランで昼食をしたり、森を散歩したり、ロシア料理も四種類か五種類はあって、毎日違う料理を食べさせてくれたり、夜はボリショイ劇場。もちろん仕事では東郷さんにさんざんこき使われましたが。しかし、そういう意味でモスクワ自体には良い印象を持って帰ってきました。丹波さんに「モスクワどうだった」と聞かれたので「なかなか良い所ですね」と答えたら、突然、黒田義久総務班長に対し、「首席事務官が初めてソ連に行ったのに、良い印象を持たせて帰すようなプログラムを誰がつくった！」と雷が落ちました。ソ連課も私以外は全員ロシア語で、不慣れな私の面倒を見るのが総務班長の仕事でした。ソ連のことが分からない私の右腕として、総務班長の黒田さん、その後任の伊藤（哲雄）さんにはいろいろ助けてもらいました。

あの当時、ソ連に対していくつかの制裁がかかったままでした。七九年末にソ連がアフガニスタンに侵攻して西側の制裁がかけられ、八一年末のポーランドでの「連帯」運動の抑圧がらみでソ連に対する制裁は強化されました。だから、ソ連課の仕事は、ソ連との人の往来をやらせない、経済交流にも待ったをかけるというものでしたから、仕事はあまりなかった。何をしているかという、丹波さんはいつも本を読んでいたし、私も丹波さんにあんな厚い本を何冊も読めと言われていましたから、本を読んでいた。それがソ連課の現状でしたね。

吉田 丹波課長のアメリカ認識はどのようなものだったのでしょうか。

宮本 アメリカは好きだったですね。ロシア語ですが、米国で研修していますし、安保課長もしましたから、ソ連の裏返しみたいな感じで好きだったですね。希望してボストンの総領事もやっています。

吉田 敵の敵は味方というところもあった？

宮本 そういう面もあるかもしれませんが、あの時代、アメリカ自体に強い魅力があったのも事実です。だけでも、誇り高い自分の信念がある人ですから、それに触れられるとアメリカにも強く反発したはずですよ。日本にとってアメリカが重要だから大事にするということであって、当然日本が一番大事です。彼が「何くそ」と思ったときのエネルギーとか迫力とかというのは、普通の人は足元にも及ばない。それが仕事に向かうわけです。もともと極めて頭の良い人ですが、努力もする。それに加えて直感も優れていて人より数歩先を読む力がある。それで「丹波は優秀だ」という評価が若い頃からあったわけです。私はロシア語ではない外から来た人間だったので、私には遠慮されていたという気配はありますが、ロシア語の職員は厳しく指導されていました。

吉田 以前宮本大使から、丹波課長の働きぶりを見るといっても、ソ連課時代の重要な目的だったと伺いました。

宮本 丹波さんの新聞記者対策と安全保障に関する知識を学び、せっかくなので機会だからソ連の勉強をする、と決めていました。それくらい丹波さんは新聞記者の扱いが上手かった。新聞記者を味方につけ、自分の思う方向で新聞に書いてもらう。丹波さんのマ

スコミ対策はとても学ぶ価値があるということですね。

岩間 どうやって新聞記者を懐柔するのですか。

宮本 懐柔という言葉は不適當な気がします。新聞記者との関係も最後は人と人との信頼関係であり、相手に対するお互いのリスペクトは必要です。そういう関係を持てる記者は一人くらいはいるものです。私は、丹波さんは記者さんたちに結構本当のことを話していたと思いますよ。信頼関係があるから、「書かないでくれ」と言うと言者のほうも丹波さんが困ることは書かない。丹波さんがやるうとしていることに対する理解も深まるので、丹波さんの望む方向の記事になる。ソ連課には新聞記者がしょっちゅう来ていました。

岩間 どの社ということではなく、何人かいたのですか。

宮本 何人もいましたね。丹波崇拜者と言っても良いでしょう。

その後も友人関係は続いたと思いますよ。

岩間 丹波さんは、お酒はお強かったですか。

宮本 酒は好きでしたが、大酒飲みではない。

岩間 私の限られた体験でも、ロシア人や中国人を相手にする人はお酒が飲めないかどうかにもならないという感じがあります。

宮本 だけど、大酒飲みという印象はなかったですね（宮本注…丹波實氏にご関心の方は、同氏著作の『日露外交秘話』（中央公論新社、二〇〇四年）と『我が外交人生』（中央公論新社、二〇一一年）を閲読して下さい）。

■ ソ連課の雰囲気と大韓航空機撃墜事件

岩間 当時のソ連課には何人ぐらいらしたのですか。

宮本 三〇人近くいましたよ。一番多かったのが中国課で、その次がソ連課ですね。

岩間 中国課のほうが大きかった？

宮本 そうです。前回もお話ししましたように戦前大東亜省があつて、その関連で奉職していた中国語の人を外務省でかなり引きとつたのです。

岩間 そちらは何人ぐらいだったのですか。

宮本 それでも三五〇三六人でした。四〇人には達していませんたと思います。ソ連課は二七人とか二八人じゃないですか。

岩間 その中でどういう役割分担になっていたのでしょうか。

宮本 総務班、政治班、経済班、庶務班に分かれています。政治班がいれば課長直属で、動いている外交案件を担当します。政治班は政治的な外交案件も手伝いますが、基本はソ連の内外政分析です。経済班は、漁業交渉などの経済案件などの他は、ソ連の経済分析を担当していました。庶務班は、会計や省内の諸手続をやつてくれました。私は首席事務官で、課長のデピュティでしたが、一番大きいのはソ連課の中のマネジメントと在外公館の支援です。これは意識してやりました。総務班長というロシア語の一番シニアな事務官が私を補佐してくれましたが、実際問題として、ソ連課では基本的に対ソ政策とかそれに関する部分というのはロシア

語の人たちがやっていました。私も急に行つて、彼らの世界をどうこう言えるほどの勉強もしていませんし、そういう段階にはまだ達していないなど思っていましたから、対ソ政策のサブスタンスに関しては、ほとんど口出ししていません。これは課長と総務班長以下ロシア語の人たち、基本的には課長の仕事でしたから。

岩間 ロシア語でない方というのはどれくらいいらしたのですか。

宮本 私人です。私以外、全員ロシア語。庶務も大体モスクワと行き来している人が多かったですね。

吉田 中国課と比べて、雰囲気はどのようなものでしたか。

宮本 似ているのは、そういうふうによそ者が一人か二人しかいないということですが、この二つの課の雰囲気は違いました。中国と仲よくしなければいけないというのが対中政策だったのですが、ソ連と仲よくするというのが対ソ政策でしたから。

吉田 根本が逆ということですね。

宮本 ソ連には北方領土を不法占拠されているし、米ソ冷戦の真最中の頃ですから、ソ連は敵で、いかにして敵と戦うかというのがソ連課の基本姿勢でした。中国課はそうじゃなくて、日中国交正常化から一〇数年、新しく関係をつくったばかりだということもありましたし、対ソ共同戦線を張っている時代ですから、中国とは手を握らなければいけないという感じでした。基本姿勢が違ふ。ソ連課に行つても全く違和感は覚えませんでしたね。また、ソ連も悪かったですし、ソ連のマイナスの印象は強かったですね。非合法活動をもっぱらとするKGBが跋扈して、諜報活動や相手

の政府や役人に対する工作をあくどい手段を使ってやる。国内は秘密警察が牛耳り、プロパガンダ重視で平気で嘘をつく。レーガン（Ronald W. Reagan）大統領の「悪の帝国」とまでは行きませんが、良い印象はなかったですね。

吉田 少し話が戻ってしまうのですが、前任の高野首席事務官から何かとり立てて引継ぎはあったのでしょうか。

宮本 一〇日ぐらい高野さんとダブル配置にしてくれたので、引き継ぎは受けました。高野さんも新しいポスト（軍縮課長）の準備のほうが大変なようでしたが。国連代表部の時もそうでしたが、こういうダブル配置の例は多くなく、面倒を見てもらったと思います。ただ、限界はあります。外務省というところは、引継ぎのマニュアルはなく、基本はファイルの授受で終わりですから。
岩間 それで引継ぎはおしまい。
宮本 あとはファイルを読んで自分で勉強。まずファイルの勉強から始まります。

岩間 逆に言うと、ファイルが重要ということですね。

宮本 そうです。だから、ファイルにはいろいろな重要なことを入れておかなければいけないのに、そのファイルのつくり方のマニュアルもない。全部それぞれ自分流でつくる。どういうふうな政策をやってきたかというのは、そのファイルを読んで勉強するしかない。

吉田 特に口頭で説明があるというわけではないですね。

宮本 特に複雑で注意を要する事項以外は、説明もない場合が多

いですね。

吉田 （第一回質問票の）5の（2）なのですが、丹波課長が八四年に駐ソ大使館に異動され、野村一成課長に交代されましたが、これも、これで雰囲気が変わったというのではありませんか。

宮本 それは変わりました。野村さんという人はなかなか秀逸な方で、頭が良いだけではなく仕事もできる人なのですが、それなのに人あまりプレッシャーを感じさせない。お二人は全く違うタイプ。しかしソ連課長としてはともに一級なものです。

丹波さんが自分で書いた対処方針とか公電案、これは次官、大臣まで修正なしで通ります。とにかく丹波さんが考えたことは大体外務省の意見になる。野村さんが書いたのも、野村さんが書いたとおりになる。どこが違うかというと、丹波さんは自分の考えを書き、野村さんは書く前に知恵のある人を回り、意思疎通を図った後、それらを踏まえて書きます。結果として両方とも完璧な電報とか意見書を書くのです。

吉田 となると、宮本大使が重要な文書に関わるケースも、野村課長時代のほうが多かったということになりますか。

宮本 対ソ政策に関してソ連課長が部下に聞くことはないです。ロシア・スクールの中で経験豊富で、しかも優秀な人が課長に当たっていますから、課員がそれを超えるのは難しい。「知恵のある人」というのは、栗山さんや小和田（恆）さんといった人たちのことです。重要なものは、全部課長直筆です。

吉田 そこは変わらないのですね。

宮本 中国課長の場合もそうですよ。私がお仕えした橋本恕、國廣道彦、藤田公郎課長もそうでしたし、私が中国課長になったときもそうしました。重要な文書は全部課長直筆。人にやらせるというのは局長以上の仕事で、課長までは自分でやらないと。外務省、ひいては霞が関が「課長行政」とか「課長外交」とか言われている所以です。

吉田 課長の力が大きいということですね。

宮本 力がある。制度的にそうなっている。一つの政策ないし案件について最も多くの情報を持ち、最も真剣に、最も長い時間考えているのは課長ですよ。しかもある程度の経験を積み、組織としての訓練も十分に受けている。だから、課長は基本的には全部自分でやる覚悟でやらないといけない。

吉田 大使が軍縮課長のときも、重要なものは課長が書くということだったのでですか。

宮本 そうです。それを丹波、野村先輩に学び、このやり方は正しいと思つて踏襲しました。

吉田 既に少し伺っているところもあるのですが、第一回質問票の5の(4)に。先ほどポーランド関係のお話が出ましたけれども、それ以外で当時日ソ関係ないしは対ソ外交で印象に残っている話がありますか。

宮本 既に触れましたように、アフガンとポーランドがらみで二重の対ソ制裁がかかっていましたから、やることはあまりありませんでした。

吉田 丹波課長が書かれた回想録の中に大韓航空機墜撃事件に関する記述があつて、そこに宮本大使が登場されるのですが、何か印象に残っていることはございますか。

宮本 丹波さんの『日露外交秘話』ですね。私にとつても大韓航空機墜撃事件は極めて強く印象に残つた出来事でした。こちらが証拠を突きつけるまで、ソ連は「自分たちは撃ち落としていない」と言い張る。

吉田 当初ですね。

宮本 丹波さんたちの言うとおり、ソ連のプロパガンダは平気であつて、うそをつく。あらゆる証拠を突きつけられて逃げ場がなくなるまで「撃ち落としていない」と言い張る。

この事件のときの丹波さんの活躍というのは本当にすごかったですよ。丹波さんは天才だ、この人にはかなわない、と思ひ知らされたのはこのときです。第一に、先を読む力が尋常ではない。ソ連はどこで大韓航空機を打ち落としたのかという話が騒ぎになつてくるときに、丹波さんは「墜落した飛行機の遺留品の捜索はどうなつていくのか」と聞く。「海上保安庁がやっているとします」と答えると、「ちゃんとやっていると確認しておけ。マスコミの関心はそこに移る」とおっしゃる。実際には海上保安庁はあまりやっていなくて、それからやり始めるのですが、マスコミが気づいたときには我々はもう対処済みで逃げ切れませんでした。丹波さん自身、関係者の方々と一緒に遺留品の確認のためにソ連の現地に入りました。この問題を無事処理して、そこで第一ラウン

ドは終わるわけです。

そして第二ラウンドは、国連安全保障理事会に移りました。もちろん、ソ連が拒否権を持っていきますからいかなる決議も通じませんが、ソ連批判を安保理で展開することはできる。議論を通じてソ連の悪行を全世界にさらすというのがアメリカの強い意向でした。大韓航空機を撃墜したパイロットと地上の司令官との通信のやりとりを日本の自衛隊が盗聴していたわけですが、それを安保理で公表するかどうかという問題になっていくわけです。当然、中身をさらせば、我々の情報収集の手のうちをさらすことになる。したがって、防衛庁・自衛隊がそれを出したくないというのは正論なのです。ただ、日本がそういう形で得た情報は自動的にアメリカに行く仕掛けになっており、所有権は日本だけでも、モノは既にアメリカに渡っている。アメリカがどうしても出すと言ったら防ぎきれない。丹波さんは、そうならば「出すと言ってアメリカに恩を売れ」と防衛庁を説得するのです。丹波さんはロジックを駆使し、本人はそれを「筋を通す」と言っています。が、それで納得させる。やはり迫力ありましたよ。

吉田 外に向かったときの頼りがいがありますね。

宮本 実に頼りがいがある。いずれにしてもそういうことで、アメリカとの関係も保ちながら国連の安保理は終わりました。一連の流れの中に置かれたときには、丹波さんという人は人よりかなり先が見えている。それから、危ないなと思ったら——具体的なケースは忘れましたが——足を下ろす直前、すっと下ろす位置を

変える。これはもう先天的な才能であり、脱帽したわけです。

そんな感じで、極めて有意義なソ連課時代を丹波さん、野村さんと過ごさせていただきました。それから何よりも、ソ連というものをいろいろ勉強させてもらった実りの多い二年八か月でした。

■ 国際情勢認識

吉田 では、第二回の質問項目に移りたいと思います。1の(1)当時の国際情勢認識について伺います。八三年は新冷戦が最も激しい頃で、先ほどお話に出た大韓航空機撃墜事件もありますし、九月にはNATOの「エイブルアーチャー」もあって、本当に戦争の危機が感じられるような時代だったと聞きます。当時、外務省内で米ソ戦争があり得るのではないかという議論はありましたでしょうか。

宮本 そういう議論があつたことは、あの当時、私の耳には届いていません。ソ連課では、米ソの戦争に至るといふ、そこまでの意識はなかつたと思います。

吉田 冷戦がまだ続くという認識でしょうか。

宮本 ソ連崩壊なんかも予測できませんでしたから、当然冷戦は続くと想定していました。もちろんゴルバチョフ (Mikhail Gorbachev) が出てきて少しは変わっていったのですが、だからといって、ああいう形でソ連が終わるといふ分析はできていませんでした。これがあの時代の世界の普通の国際情勢認識でした。

吉田 その一方で、冷戦が熱戦になるところまではあまり考えられてはいなかったということですね。

宮本 それはなかったですね。少なくとも私にはなかった。NATOの極秘の議論がどうなっていたかは知りませんが、やはり極東に身を置くと鈍感になるのですね。一般的な認識は、欧州戦域でソ連が優位に立っており、通常兵力に関して言えば、ソ連およびワルシャワ条約機構（WPO）軍が圧倒的に強かった。だから、あり得る通常戦争シナリオとしては、東西ドイツの国境線が破られて、WPO軍が西欧に攻め込み、西欧が完全に落とされる前に米軍が駆けつけて打ち負かすというものでした。そこでWPO軍に攻め込ませないようにするのがNATO戦略でした。そこに核のエスカレーション・ラダーという考え方が生じる。圧倒的なWPO軍の侵攻に対し、米国の核を使って止め、ソ連が同じレベルの核で反撃してきたら、さらに核攻撃のラダーを上げ、最後は全面的な核攻撃に至る。この核戦略の信頼性を高める、すなわちアメリカは必ず核を使うとソ連に確信させることで抑止力が生まれる。これは優勢なソ連の通常兵力に対しアメリカが核を先制使用することで成り立つ戦略ですから、先制不使用など約束できるはずがない。ソ連は世論がないから口約束は可能だが、アメリカはそうはいかない。だから常に緊張感があったはずだ。

そこにソ連は、SS-20という、欧州には届くが米国には届かない中距離核ミサイルを欧州に配置した。ソ連は「ソ連が欧州にしか届かないミサイルを発射した場合でも、アメリカはニューヨ

ークやワシントンDCの破壊に至る対ソ核攻撃に踏み切りますか？」と言って、欧州の不安を煽る戦術に出た。つまり、アメリカの核の傘、拡大抑止の信頼性の問題を突きつけてきたわけです。NATOを不安化させる政治的兵器を導入してゆきぶっていたということ、客観情勢としては圧倒的にソ連側に有利だったわけです。このような状態では駄目だということでレーガン大統領は大軍拡にはしり、次の段階に入っていくわけです。

欧米で熱戦の可能性を議論していたことはあり得るでしょう。しかし、私には届いていませんでした。

岩間 当時、レーガン大統領はヨーロッパでは全然人気がなく、「スターウォーズ」にも反発が強かったのですけれども、外務省ではレーガンに対してはどんな感じを持っていたのでしょうか。

宮本 いや、そんなに悪い印象じゃなかったですよ。中曽根康弘総理との関係も良かったですし、全体としては良い印象を持っていたと思います。振り返れば、良い大統領の一つの型かもしれない。レーガンには幾つかの自分の信念があり、それは全てスピーチに書き込まれる。それが基本政策なので。スピーチをとっても大事にしており——逆に言えばそれ以外はあまり気にしないのですが——一生懸命に準備し、国民の胸を打つスピーチをする。スピーチはレーガンの思想を反映し、そこで大方針を示したのです。一つは「小さな政府」。民間に任せ、政府は手を引けということ。二つ目は、「悪の帝国」ソ連と徹底的に戦う、というものです。

この大きな基本方針の下で、実際はジョージ・シュルツ (George P. Schultz) というこの前亡くなられた国務長官と、それからもう一人、ブッシュ (George H. W. Bush) 副大統領の友人のジム・ベーカー (James A. Baker, III) 財務長官にすべてお任せでした。著しく優秀な二人の政治家が国務と財務を引き受けて、レーガン政権の実際の運営をやっていたのです。極めてリアルアブルで、政府同士のコミュニケーションもべらぼうに良かったですね、トランプ (Donald J. Trump) 政権と全然違いますから。我々が国務省と話しておけばシュルツに上がり、シュルツが「イエス」と言ったらレーガンも「イエス」なんです。

しかし、「小さな政府」と「悪の帝国」に関しては、レーガンは絶対に方針を変えない。政府の予算は削るが、対ソ軍拡にはお金をつけることに躊躇しませんでした。その一つの例が、米ソの間で成立した相互確証破壊戦略をめぐる大騒動です。レーガンは、この基本戦略に対してノーを出します。なぜならば、「自分の国民を守らないのみならず、国民が死ぬことを確実にすることにより成り立っているような戦略は正しくない」と頑張るわけですから。そこで「スターウオーズ」的な、宇宙を巻き込む戦争戦略でソ連を一気にたたたくという考え方に飛びつく。それには天文学的費用がかかるし、A B M (Anti-ballistic Missile: 弾道弾迎撃ミサイル) 条約を含めて既存の軍備管理の枠組みを反故にしなければならず、シュルツたちが説得した結果、ぎりぎりS D I

(Strategic Defense Initiative: 戦略防衛構想) というあのプロ

ジェクトに収まるわけです。

しかし、レーガンは、日本との関係は悪くなかったし、グレート・コミュニケーションターで上手な会話をする人で、人に不快感を与えません。日本との関係はレーガン大統領の時代はむしろよかったのではないですかね。

吉田 ワインバーガー (Casper W. Weinberger) 国防長官の印象はどうでしょうか。

宮本 ワインバーガーのほうが、ちょっと突出してレーガンにすり寄っている感じがしていましたね。この人も、日本に対しては結構温かかったですね。でも、僕らが絶対的な信頼を置いていたのは、やはりシュルツさんです。この人は日本でも大変尊敬されていました。

ちなみにもう一つ付け加えておくと、結局S D Iに代表されるアメリカの軍拡がソ連を崩壊に導いたというのはその後の定説になっっているわけですね。そういう意味で、レーガン大統領というのは評価されるべきだと思いますよ。瞬間的に冷戦は高まったかもしれませんが、結果としてソ連というレジームが立ち行かなくなったのは、レーガンが軍拡を仕掛けたからです。トランプ陣営の中のイデオログの中には中国に軍拡を仕掛けようとした人がいました。それはこの時代の米ソのアナロジーです。中国に軍拡を仕掛けて、それで中国が経済的に立ち行かないようにしてしまおうと、本気で考えていた人たちがいました。

■ ソ連認識

吉田 1の(2)に移りたいのですけれども、逆に、ソ連側の指導者に対する認識はいかがでしたか。ちょうどアンドロポフ(Yuri Andropov)、チェルネンコ(Konstantin Chernenko)、ゴルバチョフと三人が指導者になる時期に、大使は首席事務官でいらつしやいましたけれども、彼らに対する印象を伺えればと思います。

宮本 私はソ連課時代、八四年二月に死去したアンドロポフと八五年三月に死去したチェルネンコの葬儀を経験しました。ソ連の革命記念日は一月七日でモスクワは寒いのですね。ソ連の指導者は年寄りばかりで、この日、軍事パレードなどもあって赤の広場に長時間立っていないければならず、それがこたえて翌冬に死ぬんじゃないか、などと勝手に推測していたことを思い出します。アンドロポフは、八二年一月のブレジネフ死去の後、KGBのトップはソ連共産党のナンバー1にならないという慣例を覆して書記長になった。アンドロポフが死ぬと、党内力学というか、他に人材がいなかったということもあり、これも年寄りのチェルネンコがなった。能力というよりも、とにかく波風が立たないようにはポストを埋めたという感じでしたね。この頃は本当に変わらないうにソ連、変われないソ連だったのです。そういうものを眺めてきて、これではいかんと思つて満を持して登場したのがゴルバチョフです。そしてペレストロイカに始まる一連の改革政策を打ち

出していきました。

吉田 外務省側でも、ゴルバチョフが出てきてソ連が変わると見えていたのですか。

宮本 前の老人二人とは全然違つて、何かするだろうとみんな思つていました。しかし、あそこまで徹底した改革をするとは考えていませんでした。ソ連は、一番大きい問題は経済ですが、それがうまくいかずにもたついていたわけです。そういうところを中心にゴルバチョフは改革をしていくだろうと思つていました。しかし、ソ連共産党がああいう形で終わるとは全く予想していませんでした。

私が中国式に人の要素を重視して、「ゴルバチョフは若くてまだモスクワに自分の勢力の根拠地がない。そこを固めて実際に動かせるようになるまでには時間がかかるのではないか」と言うと、ソ連の専門家たちは異口同音に「ソ連共産党はポストが大事であり、ポストに就けばやれる」と断言していましたね。結局、彼らが正しかったわけです。ゴルバチョフの登場は実に颯爽としていましたよ。

合六 七〇年代末ぐらいから緊張緩和が徐々に後退していつて、まさに大使がソ連課に入った頃に新冷戦になるわけですが、軍事的にはソ連はどんどん軍拡を進めて、また地域的には第三世界でもアグレッシブな行動を示す。他方で、まさに同時期は政治的あるいは経済的には停滞の時期。今から見るとそういうふうには整理できると思つてすけれども、同時代的にはソ連課あるいは大使

は、ソ連という国の状況をどのように捉えられていたのですか。

宮本 ソ連がなかなか大変だというのは、ある程度推測していましたが、本当にどれぐらい大変なのかということについては、はっきりしたところは分かりませんでした。だから、ソ連はまだまだ我々に対抗して必要ならば軍拡を仕掛けてくる可能性があるというのが当時の一般的な見方でしたね。

合六 では、落ち目だから楽観的になれるという、そういう雰囲気ではなかったということですね。

宮本 全くありませんでした。レーガンは、その前のカーター (Jimmy E. Carter) の融和外交に強く反発しており、トランプに似ていますが、「アメリカ・イズ・グレイト」であって「ソ連ごときには負けない、叩き潰す」という決意で大統領になった。レーガン大統領の登場は、あの時代の米ソ関係にとって著しく重要なことでした。

岩間 当時、時々モスクワに出張なさったと思うのですけれども、一般市民の生活水準とか消費物資とかについて何かご印象はございますか。

宮本 それは低かったですし、モスクワに行っても商店にはあまり物もありませんでしたね。「モスクワで自動車免許をとった人は信用しちゃいけない」と、よく言われていましたよ。外国たばこ一カートンで免許証がもらえるということでした。しかし、ソ連は経済的に大して豊かじゃないまま何十年間もやってきていますし、戦争する能力は着実に増強させていきました。したがって、そ

う簡単にソ連が倒れるという認識はありませんでした。

吉田 1の(4)と絡んでくるのですけれども、国務省でもソ連との対決姿勢が強まっている雰囲気はありましたか。

宮本 それはあります。レーガン政権ではソ連宥和という立場の人はほとんどいなかったですね。東京も「悪の帝国」ソ連に対抗する気持ちは強かったですね。

吉田 それで一丸となっていたということですね。

宮本 ソ連は、日ソ中立条約を破り、日本人をシベリアに抑留し、北方領土を不法占拠しているのですから、「悪の帝国」ですよ。そんな雰囲気です。だから、レーガンとは波長が合うわけです。公平のために補足しますと、ロシア・サービスが対ソ強硬一本槍

だったわけではなく、野村課長は地道にソ連との意思疎通の強化と関係改善を心がけていました。それでも基本は、そういうソ連に対しては日米で結束して強く当たるというものでした。

吉田 (4)のところ、実際の資料は手元にはないのですが、ソ連に関する日米間の非公式協議というのが定期的に行われていたようなのですけれども、これに関してご記憶のことはございますか。

宮本 細かなことは覚えていませんが、当然アメリカとは密接な意思疎通を図っていたはずですよ。それをやっておかないと何かあったときにすり合わせが難しくなりますので、ソ連をどう眺め、ソ連に対してどう対応するかということをお互いすり合わせていたはずですよ。外交としてはいわば当然のことで、日常ベースでし

つかりと責任者同士がフェイス・トゥー・フェイスで話をして意思疎通しておくことは大変役に立ちます。ソ連に関する非公式協議というのは、意識的にやったと思います。

吉田 これは課長が主軸ですか。

宮本 当然そうなります。ワシントンで散々丹波節をぶち上げたはずですよ。

合六 丹波さんは、八四年一月までソ連課長となつていますが、この後どこに行くのですか。

宮本 モスクワの大使館で名称公使として館のナンバー2になります。松永（信雄）事務次官の強い意向だったと聞いています。丹波さんの年次ではまだ参事官しかやれず、当初打診された公使ポストはやれないという理由で断ろうとすると、次官が「それじや名称公使にする」ということで赴任が決まったようです。

吉田 この時期の駐ソ公使が空席になつていたから何でだろうと思つていたのですけれども、そういう事情だったのですね。

合六 ちょうどこの頃から、レーガン政権も再選を目指して、徐々にソ連に対して穏健な姿勢を示していく感じになります。八三年が米ソの緊張が最も高まった時期ですけれども、そこからややトーンダウンしていつて、八五年にゴルバチョフが就くと徐々に米ソの緊張緩和の機運というのが高まっていくわけです。こうした動きに対して、それまでレーガンのやり方をサポートしていた外務省の雰囲気、また丹波さんの雰囲気に変化が見られたという印象はありますか。

宮本 アメリカでは世論に敏感に反応する議会があり、二年に一回何かの選挙を迎えるわけで、その選挙をどう乗り切るかというのが大統領にとっては重要となります。したがって、ソ連との関係をもう少し良くしようというのが国内のムードで、レーガンが戦術的に修正することはあり得る。しかしイデオロギーがああいう人ですから、アメリカの対ソ政策が根本から変わるといふ気配は全くなかつたですね。ただ、雰囲気はゴルバチョフ登場で大きく変わりました。

武田 丹波課長に対するアメリカ側の反応というか、評価みたいなものを大使がお聞きになつたことはございますか。

宮本 特に聞いたことはありませんが、アメリカというのは自分の意見が明確にある人、傾聴に値する意見や視点というものを持つている人を評価します。丹波さんは心情的にはアメリカが好きで、ソ連は嫌いでも怒つていますがアメリカは好きで怒つていから、アメリカ側もそれが分かるのでないですか。

武田 少し前の時期になるのですが、七〇年代のアメリカの文書を見ていると、西廣整輝さんと佐藤行雄大使とともに丹波大使の名前が出てきまして、今後が期待できるといふようなことが書いてありました。

宮本 戦後、平和憲法に代表される日本社会の大きな枠組みの中で、日本の防衛政策というのは、本来あるべきリアリティなものになかなか近づかないわけですね。それを本来あるべき姿に近づけなさいけないということで理論武装して頑張つたのが

西廣さんですね。まさにリアリストですから、アメリカからすると望ましい人が防衛庁に出てきてくれたなということだと思いません。

外務省で戦略論を本格的にやったのは佐藤さん以降なのでですね。安全保障戦略というものを身につけた世代の最初が佐藤行雄であり、その後が丹波實じやないですか。二人とも安保課長経験者であり、外務省では安保課長が安全保障分野の核になっていました。それで、彼らがいろいろなポストに就いていくのですが、安保課長をやっていることで自動的に安全保障のグループに入っていくわけです。

吉田 ソ連の外務大臣がグロムイコ (Andrei Gromyko) からシュワルナゼ (Eduard Shevardnadze) に代わるというのが八五年七月なのですけれども、これに関してはどんな印象でしたか。

宮本 グロムイコは「ミスター・ニエツト」で表情も動かさない。そうでなければソ連共産党の中であれだけ長いこと外務大臣でいられませんよ。そういう意味では話しづらい。それに比べればシュワルナゼさんのほうが話しやすい感じの人だったですね。

吉田 大使が直接シュワルナゼ外相とお会いされたことはありませんか。

宮本 ソ連課時代というよりは、私は八七年一月から宇野宗佑外務大臣の秘書官をやりましたが、そのときに、シュワルナゼ外相との会談に何度か同席しています。

■ INF交渉とSS-20極東配備

吉田 次は2番ですね。INFに関する米ソ交渉について伺わせていただきます。(7)まであるのですが、一つずつお聞きしたいと思います。まず(1)ですが、当時、ソ連がSS-20を欧州部だけでなく極東部にも配備しておりましたが、外務省ではこのソ連の配備の目的をどのように見ていたのでしょうか。

宮本 ソ連課時代は、政策は課長、課のマネジメントは首席事務官、ということだったので、ソ連課ないし外務省云々というのはおがましいのですが、ソ連が何の目的もなく極東配備をするわけはないので、警戒はしてははずです。ソ連は、当然、極東の米軍基地と結びつけてきたでしょうし、いざとなればSS-20の削減を米軍の削減と結びつけることもできる。極東における戦力バランスはもちろん圧倒的にアメリカが強いわけですが、ソ連に少しでも有利にするためにSS-20を使うのではないだろうかということを心配していましたね。

それから中国に対する抑えというのも当然あったと思います。大陸間弾道ミサイルよりINFのほうが中国に対しては使いやすい。当時の中国軍の実力はソ連にははるかに及びませんでした。それでも恐怖感があったはず。私が外務省に入る直前、六九年三月に中ソは国境の珍宝島(ダマンスキー島)で衝突していたのですが、入省後、世界からいろいろな情報電が入ってくる中で、林彪が会議で「ソ連との戦争を恐れることはない。民兵も集められ

ば我々は四億の兵を組織できる。中ソ国境を越えるときに半分は命を落とすだろうが、残った兵でソ連に攻め込む」と言ったというのですね。ソ連の人口と同数の中国兵がなだれ込んでくるわけです。だから、逆にソ連は中国に対する核の使用の可能性を意識的に流していましたよ。やはり中国の巨大な人口というのは脅威なわけで、核の抑止力というものは中国との関係で意識していたと思いますね。

ですから、間違いなくここ（参考資料②）に書かれているような状況認識で、極東におけるバランスをソ連に有利に展開する上でSS-20を使うし、移動可能な兵器ですから、いざとなればヨーロッパに引き返せばいいわけです。逆にヨーロッパに配備したものをアジアに持ってきてもいいわけです。そういう自由な、自分たちの使い勝手の良い材料をできるだけ手元に置いておく。撤去しなくてもいいように理屈をひねりだしながら、あらゆる手を尽くす。我々はソ連をそういう風に見ていました。

ソ連の脅威が急に高まったかという点、そうではありません。弾頭数でいうとアメリカを圧倒的に上回るものを既にソ連は持っていたわけです。ソ連の核兵器は、アメリカに向かっていていけれども、当然日本にも向かっているわけです。このように本質的に非常に厳しい状況にある中で、いろいろ動いているという意識でした。だからSS-20の登場で世の中がひっくり返るという意識はなかったですね。大きな安全保障の構図が変わると思っていまいませんでしたが、日本にどういふような影響を及ぼすのか、在日

米軍も含めた米軍のアジアにおける兵力水準にどういふ影響を及ぼすのか、などが気になるところでした。

それともう一つは、ここ（二〇二〇年九月一九日のGRIPSでの第一三回公開研究会）でも議論したように、日米安全保障条約に対する国民の信頼が弱まれば大変なことになるという意識はありました。皆さんも研究してこられたのでよくお分かりだと思いますが、あの当時は日米安全保障条約に対する日本国民の否定的な感情は今よりもはるかに強かったのです。着実に支持する人が増えてきていますけれども、八〇年代は現在よりは否定的な見方をする人のほうが多かったわけです。戦争に巻き込まれる論が国民世論に大きなインパクトを与え得る世論環境でした。そういう中で、「本気でアメリカが日本を守る気があるのかどうか」というヨーロッパで行われたディカップリングの議論が起こるのは悪夢でした。我々はSS-20、INFというのは必要不可欠な兵器ではなく、基本的にはヨーロッパを分断する政治的な兵器だと見ていました。それがソ連の最大の狙いでした。SS-20の導入により、西ドイツが動揺し、パーシングII導入に対し国民の反対が起こるわけです。ソ連の見事な世論戦だと見ていました。

吉田 以前ご教示いただいた大使の論文（参考資料①）を調べてみたのですけれども、そこでも、必ずしもアジア諸国はSS-20の軍事的脅威を強くは感じなかったという旨を書いていらつやいます。この理由というのは、やはり先ほどおっしゃったように、既にソ連の核の脅威に長年さらされていたからということになり

ますか。

宮本 アジアといっても、米ソの冷戦を気にしていたのは日本と韓国と中国ぐらいですよ。他の国は関係ない。米ソ冷戦は西側と東側の対決であり、大多数の第三世界の国々は関係なかったのです。それから、日本もそうですけれども、安全保障認識というのはアメリカの核の傘への安心感もあって、議論は低調でしたよ。S S-20の問題に関して言えば、日本が一番強く反応したのであって、他の国はもうほとんど反応しなかったと思います。

岩間 日本も外務省だけでしたよね。

宮本 そうかもしれない。

岩間 一般の関心は本当になかったと思います。

宮本 防衛省は入れましょう。

岩間 そうですね。防衛省、当時は庁ですか。

宮本 防衛庁では、個人的に関心を持っておられる人はいたと思いますが、組織としてはまだそういう体制になっていなかった。軍備管理・軍縮、そんなところまで関心を持つのではなくて、日常的な自衛力の整備であるとか基地問題であるとかに忙しかった。したがって、このINFの問題に関しては基本的には外務省と官邸がやりました。防衛庁と公式に相談した記憶はありません。ただそういう体制になっていなかったのですね。ただ、後でも出てくると思いますが、外務省に外向してきていた自衛隊の制服の人たちには大変お世話になりました。彼らの軍事的な専門知識に裏打ちされたアドバイスがなければ、外務省の対応の水準はかなり

落ちていたと思いますよ。

吉田 2の(2)と(3)が若干重なるところはありますが、ソ連がS S-20の基地を極東部でかなり増強する一方で欧州部ではあまり増強しないという流れが、八三年になって出てきます。それとともに、アンドロポフ発言とかグルムイコ発言で、ソ連がS S-20を極東に移転するという案を提示し始めます。これらに関するソ連の狙いを、当時のソ連課ではどのように分析されていたのでしょうか。

宮本 正確にどう分析したかというのは定かではありませんが、ソ連にとって何かデイルをするときに、極東にも置いておいた方が有利ですよ。ヨーロッパの連中に「極東に置いてあるんだから心配するな」と言えるし、極東に増やしたものは必要なときにヨーロッパに持っていける。ソ連は、どうしたらうまくS S-20のヨーロッパ配備が進むか、ヨーロッパを主たるシアターとした世論戦を考えていましたよ。ソ連にとっては、日本なんかは付け足しでしょう。だから、ヨーロッパの世論との関係で、ということですよ。

吉田 第一義的には、西欧での世論戦だったということですね。

宮本 そうです。それから、日本を少し揺さぶってやろうということ、日本の米軍基地か何かを言い出すわけですね。

吉田 当時の丹波課長の論文、資料②を拝見すると、ソ連が日米・日欧の離間を狙っているということが書かれているのですが、れども、そういった意識は強かったのですか。

宮本 それはもう常識でしたね。

吉田 これはもう共通の認識ですか。

宮本 共通の認識ですね。現在、中国が日米離間をやっているとすぐ言われますが、あの頃はそれ以上に、ソ連がまた日米離間、日欧離間に来たなと思えましたよ。現にソ連はそうしてきた。

吉田 突如警戒心が外務省内に高まったというわけではなくて、またやってきたなという感じですか。

宮本 ソ連に対しては一貫して警戒心がありますから。外務省がソ連に対して警戒心を緩めたことは一回もないはずですよ。

吉田 当時の文書、特に丹波課長の文書を拝見すると、日本に対するプロパガンダ作戦がかなり強まっているということが書かれているのですけれども、INFはその一部だというふうに認識されていたのでしょうか。

宮本 それはウラム先生が『膨張と共存』に書いているとおりですよ。ソ連はプロパガンダの国であり、INFでも当然その要素を色濃く持っています。

岩間 当時、こういう軍事的な情報に関しては、オープンソースに頼っておられたのか、あるいはアメリカから一定の情報をもらっていたのか。

宮本 主にアメリカからもらっていましたね。ソ連課にいた時代は、日米のコミュニケーションは結構あった。

吉田 ソ連課のファイルの中に、駐米大使館にいた岡本行夫さんがアメリカから情報をもたらってきている文書があります。

宮本 岡本さんは一等書記官か何かでワシントンに勤務していたと思いますよ。

吉田 ソ連課もやはりそういった情報を得ていた？

宮本 米ソ交渉に関するものは、その背景情報を含め全部ソ連課に来ていました。

■ 対ソ抗議

吉田 2の(3)の後段に移りたいと思います。資料の③④⑤⑥と多くなってしまったのですが、日本がこの時期対ソ抗議をかなり強めている印象がございます。この時期の日本の対ソ抗議および対米協議について、ご記憶のことがございましたら伺えればと思います。

宮本 むしろこの資料を読んで思い出すことのほうが多いのですが、アメリカに対していろいろ注文をつけるにしても、その原因をつくっているのはソ連であり、直接ソ連に言わないのはおかしいじゃないですか。アメリカに対して、自分は何もやらずに頼みごとばかりするのは、大人の外交としてはおかしいでしょう。

吉田 直接自分でも言わないといけない、ということですね。

宮本 直接我々の懸念とか問題点をソ連に対しても言っておく。アメリカに対しては「我々は直接ソ連にも言っている。我々の懸念を十分配慮して対ソ交渉をやってくれ」と言わないと迫力はないですよ。だからといって、対ソ抗議が、どれほど効果があるか

樂觀はしていません。米ソ交渉において、ジャパン・カードのウエイトは限りなく小さいですよ。だからソ連が対応を変えざるんて考えられません。しかしながら、アメリカとの関係で日本も外交努力をしませんと、何でもかんでもアメリカにやっつけてくださいというわけにはいかない。もちろんソ連に対する日本の懸念の伝え方も慎重に検討の要ありです。あまりソ連を利するような懸念は伝えちゃいけませんから。弱みと受けとられますからね。

吉田 そのところは難しいですね。

宮本 難しいというか、考えればすぐ分かるので、そこを踏まえながらソ連に対して厳しい姿勢をしっかりと示しておくということとです。なおかつ、日本とアメリカはちゃんとすり合わせをして一枚岩でやっているので、日米の分断は無駄な努力ですよ、ということをお知らせするのは悪くないのではないですか。

吉田 対ソ抗議には日本の国民に対するアピールもあるということをお聞いたことがあるのですが、いかがでしょうか。

宮本 それはありました。でも、この問題でそれほどまであったか。国民の関心は低かったですからね。一般論として言えば、国民、とりわけ右サイド向けに、政府もやっていることを示しておこうという側面はあったでしょう。

吉田 右翼に。そちら側へのアピールなのでですね。

宮本 ただ外務省は、反ソとか親ソとかではなく、日本全体の利益のために何をすべきかを判断し、それに従い行動するわけです。きれいに聞こえるかもしれませんが、そう教育され訓練され

てきました。日中航空協定の台湾問題がらみで、七四年一月に大平（正芳）外相が訪中され、政治決断を逡巡されていると、同席していた外務省の諸先輩が「大臣、ご決断ください。歴史家がどう記載するかお考えください」と説得するわけです。丹波さんも一等書記官でその場にいましたよ。

私は、日ソ漁業交渉に携わったことがあります。ソ連が漁獲高と、幾つかの日本の港へのソ連漁船の入港問題を絡めてきたことがありました。水産庁は漁獲高を重視し、受けいれに傾くのですが、外務省は情報収集のための艀装漁船を紛れ込ませてくる可能性があるので反対していました。「ソ連のスパイ工作に乗っちゃいかん」というのは丹波課長もそうですし、外務省全体がそうでしたよ。水産庁と交渉していたのが私で、どこで聞き及んだか知りませんが、右翼の街宣車が外務省の近くに立て、**「宮本ソ連課首席事務官、頑張れ！」**とスピーカーでがなり立てるわけです。これには参りました。国民全体もソ連に対して厳しかったですから、ソ連に対して厳しい姿勢をとることが国内世論対策上必要だということがありました。

吉田 ソ連のプロパガンダ攻勢が日本の世論をターゲットにしているから、政府も頑張っているということをお国民に伝えようという意図はあったのでしょうか。

宮本 それもあるし、対ソ抗議の身を對外ブリーフしますから、それは国民に対して日本政府の考え方を伝達することにもなります。そのときに丹波さんの貴重なマスコミ人脈が役に立つわけ

す。丹波さんの考え方を十分消化した記者さんたちがちゃんと解説記事を書いてくれるわけです。

吉田 当時の新聞はかなり外務省の信頼度が高いということですね。

宮本 高いというか、丹波色に染まっている記者がかなりいたということでしょう。外務省というよりも丹波省です（笑）。

吉田 資料⑤⑥は対米協議になりますが、宮本大使が対米協議に出席されることはあつたのですか。

宮本 対米協議は、僕はなかったと思います。丹波さんがいないときに代理でやったことはあるかもしれませんが、丹波さんがいるときには、こういうのは全部課長マターでしたね。

吉田 課長が出席される際の資料を準備されるようなことはあつたのですか。

宮本 基礎資料は準備したと思います。ただ丹波さんは基本的に資料要らなかつたですね。電報も頭に全部残る人だから。

■ 米国のINF配備の問題

岩間 米ソの交渉もそうですけど、結構西ドイツのことを気にしているなという感じが随所にあるのですけれども、西ドイツ大使館からの電報なんかも綿密に見ていらつしやつたのですか。

宮本 もちろん、ヨーロッパからのものは、特にボンからのものは注意していました。というのは、NATOの鍵は西ドイツだっ

たわけですね。イギリスは安全保障の観点からしつかりした対応をしてくれるだろうという安心感がありましたので、心配する必要は全くなかつた。だけど西ドイツは、国内で選挙を勝たなければいけないでしょう。西ドイツは戦後の日本と似ていて、平和志向が強いし、安全保障に関しても冷徹な議論が通りにくいのですね。「それよりも平和がいい。若干妥協してでも平和がいい」という風の流れやすい国民世論でした。その弱点をソ連が突いてきていると我々は読んでいたわけです。

だから、シュミット (Helmut Schmidt) 首相は本当によくやりましたよ。そういう国内事情にもかかわらず、国内的には決して評判のよくないパーシング II の国内導入を決定したのですから。シュミットの見事な政治的決断でしたね。それぐらいドイツの国内世論は分裂し、パーシング II 導入の反対派というのは決して少数ではない、むしろ多数だったにもかかわらず決断してくれた。

岩間 あの時代は二〇万人デモでした。信じられない数の人が出ていて、結局シュミット政権は倒れてしまい、コール (Helmut Kohl) になるわけですよ。この頃、すごくつらそうにしていく西ドイツを佐瀬 (昌盛) 先生がすごく応援していたのを私はよく覚えています。

この電報 (参考資料⑥) を読んでみると、「欧州側は対抗してクルーズ・ミサイルとパーシングを配備した。日本側にはそれが無い」という話が出てくるのですけど、当時そういう議論はあ

ったのですか。あるいは、「こちらも何か持ってこないと交渉できないのではないか」という議論はありましたか。

宮本 ソ連課のときのことはよく覚えていませんが、軍縮課長時代に、それは非常に重要な論点になってきました。何を用いてアジアに残るSS-20に対抗し、最終的にゼロに持っていくバーゲニング・チップにするかが現実の問題となっていたのです。そこをアメリカに迫ったわけです。まさか第七艦隊を減らすなんてことにしないでしょうね、という意味もあります。そこで我々がアメリカ側に提案した幾つかの案の一つが、アリューシャン列島の米軍基地にパーシングIIを配備するというものです。そうすれば、ウラジオが射程内に入り、ソ連の軍事施設に脅威を与えることができず。我々は、ヨーロッパと同じことをアジアでやらなないとソ連はアジアから撤去することはないので対抗策をとるべきだ、と主張し続けました。アメリカもアリューシャンを検討していたようですが、技術的困難も大きいというので決めかねていましたね。そういう議論を我々はアメリカ側とずっとしたわけですが、最後はアリューシャンで行けるとは思っていました。

岩間 当時、その話は全くマスコミには出ていませんでしたよね。
宮本 出てないはずですよ。

岩間 私も初めて聞きました。

宮本 この案は、既に亡くなりましたけれど、当時軍縮課に来てくれていた、航空自衛隊の上田完二という本場に頭の良い人が考えたものです。彼には、そういうことを含めていろいろ知恵を出し

てもらいました。

岩間 そんな提案もしていたのですね。

宮本 自衛官は安保課にもいました。

吉田 出向で来られていたのですか。

宮本 そうです。軍縮課には伝統的に航空自衛隊から来ていたいていて、安保課には陸と空の二人いました。ソ連課は海で、中国課は陸でした。上田さんにはINFを初めとする軍備管理を担当してもらいました。上田さんは早く亡くなりました。非常に惜しかったですね。

岩間 二〇一六年に亡くなっていますね。

吉田 決裁書に、軍縮課長、首席事務官、その下に「上田さん」という欄が入っていることがあり、これは何だろうと思っていたのですが、理由がわかりました。

宮本 上田氏がINF問題の専門家で、INF関係は上田さんが起案するか、上田さんに見せないといけないということです。

吉田 その話は、また課長時代のお話で伺えればと思います。

岩間 八〇年代頭の欧州では反核デモが盛り上がるのですけれども、日本の中でそれに呼応するような動きはあったのでしょうか。私はあまり記憶がないのですが、例えば『朝日新聞』とかはそうした動きに反応していたのですでしょうか。

宮本 ほとんどなかったですね。

岩間 そもそも関心がなかった？

宮本 関心がなかったということもあるし、要は平和ボケでした

ね。例えばソ連は、安保条約が一〇年の固定期間終了を迎える一九七〇年に向けて日本の世論を揺さぶるために、北方四島に最新の戦闘機を配備して日本を威嚇したのですね。ところがこの軍事的な動きに日本の誰も反応しない。抑止力とか恫喝とかいうのは、経験則から言って全部精神世界の話だから、感じない人には効かない。抑止力とか外交カードといっても、物事をそういうふうに発想していない人には効かない。日本社会が軍事安全保障の問題には耳をふさいでいる状態でしたね。

吉田 カードへの反応が起らないということですね。

宮本 反応がない。おかげで日本の社会は、後に、つまり今のことですが、そこにツケを回したのです。安全保障の問題を正面から向き合って、それに対応してこなかったのです。社会全体の安全保障問題に対する理解が進まなかった。これからまともな議論をしていく上で国民の基礎知識の欠如が大きな障害になっていく。これが国内の安全保障議論の大きなネックになっていると思いますよ。ヨーロッパではあの当時、その議論が行われていた。日本社会は巻き込まれるのだけを嫌がり、安全保障問題から目をそむけていましたね。

岩間 逆に言うと、そういう比較的静かな中で、ごく少数の人で議論ができたということですね。

宮本 そういうことになります。自民党も、今だと何とか部会で大騒ぎになりますが、当時は全く関心がない。だから例えば、例の八六年二月のレーガン親書に対する返事も外務省で決めて大臣

と総理の了解をとるだけでした。時間がないので、大臣と総理は同時並行で了承をとりました。

吉田 安倍（晋太郎）大臣ですね。

宮本 安倍さんの外相としての最後の頃だと思います。

■ INF交渉に対する日本の立場

吉田 2の（4）番が外務省のINFに対する立場に関する質問なのですけれども、資料⑦の電報が、外務省がINFに関する立場を固めてそれを在外公館に発出した訓令です。ソ連課が、この⑦の電報にあるINF交渉に関する日本の立場の策定に関することはあったのでしょうか。

宮本 当然ありますね。これをご覧になりますと、ソヴィエト連邦課長「了」になっているでしょう。ということは、別途コピー決裁という形で来るのです。

吉田 コピー決裁？

宮本 原義———決裁書の原本———を一つ一つ回していたら時間がないでしょう。だから決裁書のコピーを回して同時並行的に決裁をとる。それが決裁書原義上の「了」という意味です。

吉田 この文書の場合、他の課長も同じようにコピー決裁ということですね。

宮本 主管の課長と協議される課長があり、急ぐ場合は協議課長に対しては全部コピー決裁です。そのまま了承することもあれば、

コメントを書き込む場合もある。決裁書の内容に問題ありということになれば課同士の協議が始まる。それが終わって次官、大臣と上げていきます。

吉田 ソ連課の中でも協議は行われているのですか。

宮本 ソ連課の中の協議というのは、普通、コピー決裁書は担当官のところに届きますので、それで問題があれば彼がコメントを書き込む。それが総務班長を経て首席事務官に上がってくるので、必要に応じ修正し、それを課長に上げるのです。それが課内の協議です。普通は会議を開いて協議はしません。本当に急ぐときは「持ち回り決裁」というのがあり、人が持ち回って決裁をとりまします。人が持つてきたら、忙しくても優先して決裁してあげるのが不文律でした。このプロセスが、外務省の実質的な協議といえます。

吉田 当時ソ連課内でINF交渉をカバーされていたのはどなたでしたか。

宮本 おそらく高松（明）事務官だったと思います。

吉田 それが大使のところが上がって、最後に丹波課長のところに行くという流れなのですね。

宮本 そうです。

吉田 この電報をご覧になって、ここにコメントしたとか覚えていらっしやいますか。

宮本 それは覚えていませんが、あの当時の省内のコンセンサスを書いているなと思いますね。違和感を覚えるところは全くありません。

ません。

こういう形で外務省の中の意思疎通が図られ、コンセンサスができる。場合によっては、それに至るまで課長レベルでも大変な折衝をします。調整し終わったものが主管局長に上がる。もちろん、課長折衝がまともらずに局長折衝になることもたまにあります。本件の場合は軍縮課が課長レベルの協議をするわけです。課長レベルの協議をしたときに、ソ連課長がこれは欧亜局長にも見せておかなければいけないと判断すれば、ソ連課に回ってきたコピー決裁の決裁書に欧亜局長の決裁欄を付け加えます。

吉田 そこで局長がサインするケースがあるのですね。

宮本 主管の場合は、局長決裁がないと次官、大臣にあげることができません。そうじゃない場合は課長の判断で局長まであげる。これは軍縮課のペーパーですが、ソ連課に別のものが残っていると思いますね。

吉田 多分、これはソ連課のファイルの中に入っていたものだと思います。

宮本 これと別のものがあつたと思います。なぜなら、これにはソ連課長のサインがありませんから。これは、軍縮課主管の文書としてソ連課長が了承したという意味で「了」になっているわけです。本当に「了」かどうかということの証拠が要るわけで、ソ連課には課長のサインしたものがあつたと思います。

吉田 なるほど。私が見逃しているのかもしれないですね。

宮本 いや、見逃しているわけではないし、同じものを公開して

も意味がないというので、本筋の軍縮課主管の文書を公開したのかもしれないね。

岩間 この文書は八三年のものですけど、既にこの時期に相当コンセンサスできている感じですね。

宮本 そのようですね。

岩間 こういうラインに落ち着くに当たって丹波さんの存在は大きかったのでしょうか。

宮本 丹波さんの存在は大きかったと思いますよ。やはり前安保課長ですから。ただ丹波さんの回想録（『日露外交秘話』『我が外交人生』）には、米ソ間の核問題に関する言及はないのですね。あの当時は、まだ外交問題としてそういう位置づけだったということでしょう。それから軍縮課長の高野さんは、既に触れたように丹波ソ連課長の下で首席事務官をやっていましたから、必要ならいつでも丹波さんと相談したと思います。

吉田 そこもツアーカーなのですね。

宮本 安保課長は誰でした？

吉田 安保課長は加藤良三さんですね。

宮本 加藤さんも当然発言しているはずですし、川島裕北米一課長にも意見があったはずですよ。

岩間 もう既に中曽根総理大臣になっていますけども、中曽根さんはいつ頃からこの問題に関心を持たれていたのでしょうか。

宮本 これは首脳会談に出る案件ですよ。

吉田 まさに出ていますね。

宮本 首脳会談で出る案件は総理も勉強しなければいけませんから、しっかりと勉強されたと思います。日本とカナダを除くG7の首脳にとって、米ソの核問題は極めて重要な内政問題でもありました。G7の場では必ずこれは問題になります。発言せずじつと下を向いているのが嫌いなのが中曽根総理ですから、一生懸命に勉強して臨まれたはずです。

岩間 そうすると、もうこの頃はかなり関心を持って追っていて、日本の立場も中曽根さんも発言されることはあったのですかね。

宮本 あったと思いますよ。とりわけウイリアムズバーグ・サミットのときですね。

■ ウイリアムズバーグ・サミット

吉田 2の（6）番のところですね。

宮本 （6）番の訓令なんてとても良くできているじゃないですか。

吉田 資料⑧ですね。

宮本 そうです。よく書けていますよ。今でも感心しますね。

岩間 そうですね。私も既にこんなに対応が進んでいたのだと知りました。

宮本 よく考えられて、いろいろな状況を全部想定して、そのときどうするかまでやっています。これ、起案者の軍縮課の「高橋」はどの高橋さんだったのだろうか（高橋利弘軍縮課首席事務官）。これ

が例の「日本を含む西側の安全保障は不可分だ」という宣言につながる訓令ですよ。最後の部分は、まさにそれを狙っているわけです。(3)で、「従って、今次サミットにおいて確保する文案としては、今後とも欧米諸国に対し、上記三つの我が国の立場を主張していくための必要最小限の手がかりとなる表現であること」。それを考えた人が「インディヴィジブル (indivisible)」というところに行き着くわけですよ。

吉田 資料⑧の最後のページに、「西側全体の安全保障を考慮し、グローバルベースで」云々というのがありますね。これが文言案ですね。

宮本 それで「不可分である」というところに行き着いたのだと思いますよ。

吉田 ちなみにこの決裁書を見るとソ連課長のところに「コメントあり」と書かれていますけれども。

宮本 何かコメントしたのではないですか。

吉田 覚えていらっしゃいますか。

宮本 覚えていません。

吉田 宮本大使は、このウイリアムズバーグに何かしらの形で関与されたことはありませんでしたか。

宮本 私のほうは、ソ連課に来て四か月くらいですから、仕事を覚えたりソ連課本来の仕事をこなしたりするのに精いっぱい、関与した意識はありません。軍縮課長になって、その重要性を再認識するわけですが、ソ連課のときは、そこまで理解できていな

かったと思います。

吉田 ちなみに、宮本大使はこの段階で次のポストのことは何か言われていましたか。

宮本 全く聞いていません。

吉田 では、とにかく安保のことはここで吸収しなければいけないという意識で仕事をされていた。

宮本 そうです。外交を論じようとするれば、安全保障のことが分からないと駄目です。これまでのキャリアで、きちっとした安全保障の勉強をしていないので、良いテーマだったわけですね。

岩間 一月に移られた時点からその政策ができてくるという感じではなくて、もう既にそこにあつたという印象ですか。

宮本 五月のウイリアムズバーグ・サミットで何かしなければならぬという状況があり、それが八三年の訓令となったということでしょう。やはりヨーロッパの動きではないですか。

岩間 一月のソ連課の認識はどういうものでしたか。省内を説得しなければいけないような状況だったのですか。

宮本 丹波さんの心配はソ連のプロパガンダの力は決して無視できないという点にありました。ソ連の対欧州プロパガンダは特に西ドイツにおいてかなり成功していましたからね。もう一回きちんとしたソ連に対する不動の認識、不動の姿勢をもってこの問題に臨むべきである。これが丹波さんの問題意識であり、危機感を持ってメモ(参考資料②)を書いたのだと思います。

幸い関係課長も問題点をちゃんと理解しており、あの時点であ

あいう形の方針に収斂していったのだと思います。

合六 今回のお話と添付の参考資料を見聞きしていると、八〇年代前半の第一ラウンドのときに既に日本の立場はかなり固まっている印象を受けました。八六年のレーガン書簡に対する中曽根書簡の要素も、丹波課長のメモの中でもかなり触れられている部分があったと思います。こういった対処方針、大きな方針は、もちろん今日はソ連課での話を中心だったので丹波さんの影響というお話があったのですが、安保課長の加藤さんとか北米一課の川島さんとか全体的にもう共有されていて、それら三人を中心にスムーズにまとまっていったという感じなのでしょうか。

宮本 今顔ぶれ的に眺めるとそういうふうには推測できますね。佐藤行雄さんはその頃どこにいたのかな。

吉田 多分イギリスだと思えます。

宮本 佐藤さんが日本にいたら、当然、影響力を發揮したと思えますけど。

合六 佐藤さんや岡本さんが当時の証言を文章で残されているので、どちらかというとも八五年以降の話がよく記憶されていると思うのです。一方で、八〇年代前半というのはウイリアムズバーグ・サミットの話は教科書にも出てくる有名な話ですけど、その裏話は証言としてこれまであまり伝わっていない。そのバックで外務省内のどういう人がどういう考えを持っていて動いていたという話がなかなか今までなかったと思うので、その意味では今日、八五年以降の顔ぶれとは異なった方々がすごく重要な考えを同じ

ようにシェアされていたのだなということを理解しました。

宮本 そうですね。私もこれ（参考資料）をもう一回読ませてもらって、全く同じ感想を持ちました。したがって、この時代の皆さんの努力というのをもう一回、正當に評価するべきだと思います。サミットに対する例の対処方針は？

吉田 資料⑧ですね。

宮本 この対処方針を準備した人たちのことを、ぜひ丹念にやってほしいと思います。ウイリアムズバーグ・サミットは日本の安全保障政策の転換期であり、初めて日本の安全保障がヨーロッパの安全保障と結びついたのですが、何でそうなったのか。今回の軍縮課が書いた資料⑧の対処方針の中で見事にそれが書かれていますね。

岩間 そうですね、数日で書いたような文書じゃないですね。もう既にちゃんと方針があつて書けたという印象の文書ですよ。

宮本 いろいろな電報や文書をご覧になったらお分かりになるけれども、それまでの経緯が積み上げられてきているわけですね。

この最終的な訓令で、日本のポジションは（イ）（ロ）（ハ）の三つなのだけでも、これを全部ぶつけて全部とるのは難しいかもしれない。したがって、今回は、これらのポジションの将来を担保できるような文書をつくれ、西側全体を視野に入れながらそういう文書をつくれ、ということになり、それがウイリアムズバーグ・サミットのあの文言になった。私も全部覚えていたわけではないので、今回の復習ではっきりしたという感じがしますね。

だから、このプロセスに正当な光を当てて、この時代にいろいろ努力された人たちの名前が浮上することを、心から念じますね。

吉田 交渉の具体的な話に入ってしまうのですが、質問項目の2の(5)のところで、三月にレーガン大統領から中曽根首相に書簡が届いて、「ゼロ・オプションをとり下げようと思うが、どうか」という問い合わせが来ているのですけれども、ソ連課でこの問題が話に出てくることはありませんか。

宮本 そうというのは全部ソ連課にきています。ただこの頃、INF交渉は基本的には丹波案件なので、我々の中で議論した記憶はほとんどありません。米ソINF交渉の主管は軍縮課であり、あの当時は日本の安全保障すなわち日米安保でしたので安保課がからみ、この問題が対米関係上重要だということで北米一課がからみます。この意味で、ソ連課は少し外れるのですが、丹波さんは安保課の前に二年間ワシントンの日本大使館政務班にいましたから、土地勘もあり関心も強かったと思います。

吉田 丹波課長が一人で消化しているところがあつたのですね。

宮本 対ソ外交もそうですよ。丹波さんは一人でやれました。もちろん我々が全力で支えたから可能になったのですが、頭脳は丹波さんで、その指示で我々は動く。我々レベルで若干の補整はしますが、基本は丹波案でした。ある意味ではワンマン課長ですよ。しかし、見事な司令官だったと思いますよ。野村さんになったら、「困ったな、どうしようか」と聞いてくる。

吉田 意思決定のスタイルの違いですね。

宮本 野村さんは、課外の他の人の意見も聞く。そして出来上がったものは丹波さんに負けない。それが野村流でした。

吉田 質問項目の2の(7)番も丹波案件になってしまいかと思うのですが、当時東欧諸国がソ連とは若干違ったスタンスでINF交渉を見ているような雰囲気があつたようなのですが、何かご記憶にありますでしょうか。

宮本 当時のソ連課は、東欧がソ連に影響を及ぼすことができるなんて思っていなかったでしょう。後から考えてみると、だんだん東欧も変わり始めていたかもしれないし、ゴルバチョフの時代になって東欧も一挙に変わっていくわけです。だけど当時の常識的な判断は、東欧圏というのはソ連の言うとおりになるということであり、東欧諸国がソ連に影響を及ぼすという発想はまずなかったですね。

岩間 少し話が逸れるのですが、ヨーロッパの文書を見ると、六〇年代後半ぐらいから、中国が東欧に手を出してきているのが散見されます。当時、中国課はそういうことを見ておられましたか。

宮本 よくそこら辺りをカバーできていたかどうか分かりませんが、例えば米中会談はワルシャワで行われたりしていますね。ワルシャワの中国大使館が重要だったのは間違いないです。それは何年頃ですか。

岩間 六八年から六九年頃だったと思います。ダマンスキー島事件などで中ソ関係が一気に悪化し、ある意味ルーマニアなどがソ

連と中国を手玉にとるようなそぶりを見せたりするのですよね。そこで自分の行動の自由を確保しようとする。EUと中国を手玉にとつて、今も同じようなことをやっています。

宮本 六六年から七六年まで文化大革命の時期ですね。一時期、中国の在外公館に大使が残っていたのは黄鎮駐仏大使と黄華駐エジプト大使の二人だけになり、その後少し元に戻し始めるのですが、中国が東欧を外交の柱としていたことはないのかなという感じはしますが。

岩間 中国としては、東欧自体をとり込むというよりは、むしろ共産主義の自家争いのような形でソ連を攻撃することで自分の地位を高めようとしていて、その過程で東欧も利用したということでしょうか。

宮本 それは十分あり得ます。中ソ対立はイデオロギー論争の形をとるのですが、そのときに、自分たちの考え方を支持してくれる国が多くなるほど中国の立場は強まりますから、そういう意味で東欧の共産党に近づく。ユーゴスラビアやルーマニアなどを使うことは当然考えたと思います。

■ START、SDI、INF交渉決裂

吉田 3番になりますが、INFを離れて戦略兵器に関連する質問をさせていただきたいと思います。当時はINF交渉と並行する形でSTART (Strategic Arms Reduction Treaty: 戦略兵器

削減条約) 交渉が行われていたのですが、ソ連課がこの交渉をどうカバーしていたのか、ご記憶にございましたら伺えますでしょうか。

宮本 ソ連課はソ連のやることを全部カバーするので、STARTに関する電報も全部入ってきています。そういう情報のアクセスはありましたが、STARTそのものに日本の安全保障や日米関係からどう対米発信するかは、軍縮課や北米局の仕事です。ソ連課は、対ソ政策の観点から必要なコメントを出すという立場でした。STARTは間違いなく米ソの横綱相撲でしたよ。

吉田 ヨーロッパも入り込む余地はあまりない？

宮本 ありませんね。米ソのパリテイというか戦略核兵器のバランスをどう考えるかというのは、そもそもアメリカ本土の対ソ抑止力の問題であり、ひいてはアメリカの拡大抑止力の問題です。アメリカはフランスと違って最小核抑止の考え方をとりませんから、自分の国を守れず、同盟国も守れない状況をアメリカがつくり出すはずがない。INFは非常にトリッキーで政治的な兵器なので、ヨーロッパも日本も必死になってこの問題に対処したわけです。START交渉は基本的に米ソ。アメリカが自分に不利なことをやるはずはないという確信はありましたよ。

吉田 確信ですか。

宮本 特にレーガン大統領がそういうことをするはずがない。客観的に見てもアメリカがソ連に対しギブアップする理由は何がありませんか。一時期、ソ連が軍拡をし、通常兵器のみならず核兵器

でも米国を上回るという時期がありました。しかし総体的な国力においてアメリカはソ連に追いつかれたという意識は全くありません。あの当時は本当に強いアメリカでしたから。

ただアメリカ国内で、軍備力増強だけでいいのか、核兵器をこれだけ大量に持ち続けていいのかという反省が出ていたのも事実です。これは健全な疑問であり、アメリカとしてソ連に対抗しながら軍備管理の世界に入れればいいと多くの指導者は考えただろうと思います。

吉田 当時ソ連課が、日本としてはこの兵器が削減されると困るという形でアメリカに注文をつけることはありませんでしたか。

宮本 少なくとも私の記憶ではS T A R Tに関してはなかったと思います。その後のS D Iについては、ヨーロッパと同じように、現在の抑止力を支える核戦略に大きな修正を迫るということに対する危機感の間違いなく外務省にありました。

吉田 最終的に研究参加ということになりますけれども、当初は警戒心もあつたのですね。

宮本 当然ありました。ただ、皆さん方にご理解いただきたいのは、日米はイコール・フッティングではないということです。我々は核兵器を持っていない国であり、実際に核兵器を持ち、それを運用した経験を持っている国と知見において圧倒的に差があるわけです。イギリスとかフランスはぎりぎりできるかもしれませんが、非核兵器国が平等の立場で現実問題の対処振りを議論することは難しい。

我々はそれまでの核抑止戦略になれ親しんできたわけであり、国民にもそれに基づいて説明してきたわけです。しかし、S D Iはその根幹のところを揺るがすということで、その次の段階に果たして平穩無事に行けるか。結果としてその次のステージがあつてもいいと思います。レーガンが言っていたように、「国民をさらけ出して国民の命を担保に安全保障を確保するというのは非道徳的だ。為政者としてそういうことが許されるのか」。これは我々の胸にも響くのです。しかし、国民を守る立場にある人たちが、国民の命をさらすことによつて国民の命を守っているというのが、核抑止力なのですね。だから、そうではない世界に行くということを考えることは悪いことではないけれども、どういう世界になるか、あの時点でレーガン政権は我々に示していない。最初に打ち出したのがまさに「スターウオーズ」であり、技術的に未完成で、いくらお金がかかるかも分からない。それで「ディフェンス・イニシアチブ」になった。「もう少し地に足がついたものです」とアメリカが言うから、「研究に参加するぐらいはいいだろう」ということになりました。今のままでいいと思つていません。今の核抑止の世界が未来永劫続くことが人類にとつて正しいというふうには自信を持って言えません。そこでその次のステージに進める研究することについては悪いことじゃない。ましてや、アメリカが圧倒的に強い核戦略の世界がきたら、それは日本にとつても悪いことではない。そしてレーガンが本当に思い詰めてやっていると、ああいう対応に落ち着いたわけです。

当然のことながら全面的な賛成ではないし、パーセンテージは忘れたけれども五〇%を超えるか超えないか、下手すると五〇%に行かないぐらいの賛成だったと思います。

吉田 S D Iに関する八三年の文書（参考資料⑩）がソ連課のファイルに入っていたのですけど、その文書をつくっていたのは安保課でした。S D Iは基本的には安保課が主管していたのでしょうか。

宮本 米ソ軍備管理交渉の流れで出てきたとはいえ、これは日本にとり対米協力の問題ですから安保課主管だったと思います。

吉田 S D Iは軍縮課長のときにまた何えればと思います。最後に3の（3）番になりますけれども、八三年一月にソ連が交渉の場から退場するという状況が生じます。大抵ないしはソ連課はこのソ連の行動をどう見ていたのでしょうか。また、八五年に交渉が再開しますが、それまでに何か関心を払われていたことがありましたか。

宮本 これはソ連が一番嫌な結果を我々が作り出すことができたとということであり、我々のやってきたことが正しかったということの証明でもあります。西ドイツがパーシングIIとGLCM（Ground-Launched Cruise Missile: 陸上発射巡航ミサイル）の配備をしてくれて、本当に感謝しましたよ。岩間さんが言われたように、シュミット首相は政治生命が絶たれるのですけれども、信念で配備を決断してくれた。また、西ドイツ国内が生易しい状況ではない中でそれを実施できたのはコール首相のおかげだと皆

分かっていましたよ。西側にとって正しいことは、ソ連にとっては、長い間やってきたプロバガンダが失敗したということです。ソ連は、間違った決定のおかげで平和は遠のいたと思わせ、もう一回ヨーロッパの反核世論を巻き起こそうと交渉の席を立ったと思いますよ。しかし、そういうふうにはならなかったわけです。そこで再びのこの交渉のテーブルに戻ってくるわけだ。

吉田 それが八五年のNST（Nuclear and Space Talks: 核・宇宙交渉）ですね。

宮本 次のラウンドの交渉になってくるわけです。

ヨーロッパで起こったことは、我々の脳裏に焼き付いていました。軍縮課長時代ですが、S S 20のアジア配備の問題がまた出てきたとき、西ドイツで起こったアメリカの拡大抑止力に対するクレディビリティの問題が日本国民の間で議論され始めたら日米安保の基礎が揺らぐかもしれない、と我々は本当に心配しました。

吉田 大使のソ連課首席事務官時代の経験というのは、軍縮課長時代に生かされたということですね。

宮本 そうです。ソ連課では自分の勉強ばかりさせてもらいました。何も知らずに軍縮課に行くよりはるかによかったと思います。

吉田 西ドイツの状況もアナロジとして得られたということですね。

宮本 そうです。

■ 余話——秘書官の役割

宮本 軍縮課長の後に行ったのが大臣秘書官ですが、ここも重要な情報は全部上がってきます。担当課が来た情報をどこに回すか決める権限を持っているのですが、重要なものは大臣、官房長官、総理に上げます。ただ大臣は政治家ですから外務省以外の仕事も多く、多忙を極めておられる。そこで秘書官が公電を含むお読みいただく資料を整理して大臣にお渡しするのですが、私の場合はお渡しするのは一〇分の一くらいで、全体の三分の一は車に同乗した時間を使って口頭でお伝えしました。三分の二はお伝えできなかったということですよ。「伝えた」「いや聞いてない」が霞が関や永田町では大事になるので、「とにかく何でもかんでも大臣に上げておけ」という風潮がありましたので、割愛せざるを得ませんでした。私がお仕えた宇野宗佑大臣は、極めて頭脳明晰でしたし記憶力も抜群でしたが、地頭というか自分で考える力がとても優れていて何度も舌を巻きました。夜遅くご自宅についたときに「大臣にお読みいただきたい日本の公電です」と手交すると「まだ俺に仕事させる気か」とご機嫌斜め。そこで「間もなく日英外相会談を控えておりますが、ジェフリー・ハウ (Geoffrey Howe) イギリス外相は毎日朝三時、四時までいろいろな資料を読んで準備しているというふう聞いております」と言うと、翌早朝、ちゃんと赤線引いて戻ってきました。宇野大臣が赤線を引いたということは、その部分は記憶したということです。

吉田 となると、大臣秘書官時代は、後ほど少しだけでも時間いただいて伺ったほうがよさそうですね。

宮本 軍縮関係はあまり覚えていませんけど、何か電報でも見せてもらえば、ああそういうこともあったと思いつくかもしれません。

吉田 ちょっと探してみます。

岩間 外務大臣まではピラミッドの中で上がっていくと思うのですが、外務省と官邸の関係というのは、当時はどんな感じだったのでしょうか。

宮本 上からの指示の場合もありますが、基本は課長が官邸に伝えるかどうか、相談するかどうかを決めます。例えば大臣までの決裁書類の決裁欄に次官が「総理」と書き込めば当然総理まで上がります。

外務省にとって有り難いのは、総理大臣にも官房長官にも外務省出身の秘書官がいることです。そこに送っておけば、それは基本的に総理とか官房長官に送ったことになるのです。それを実際に見せるかどうかは秘書官の判断になります。見せずに問題になつたら、それは秘書官の責任になります。時間との頃合いでそういうことも判断しながら対応するのも、秘書官の大事な仕事の一つです。

岩間 秘書官というのはどれくらいのレベルの人が行くポストなのか。

宮本 総理秘書官になつてくると局参事官、今はもう局長クラス

が行っているかもしれませんが、前は局参事官でした。大臣秘書官はジュニアな課長でしたね。

外務大臣秘書官は、重要な案件は担当の課長とか局長に来てもらって説明してもらえばよくて、基本的には要領よくアレンジするのが仕事です。総理秘書官は、官邸に来てもらっては間に合わないことも多い。そこで総理秘書官はサブスタンスまで判断しアドバイスするのが仕事になります。だから、外務大臣秘書官と総理大臣秘書官は位置づけが全然違うのです。外務省の場合は隣室に次官がいらつしやいますし、何かあれば次官に来ていただいて直に説明していただければいいわけですね。官邸はそうやれない場合もあるということですね。

岩間 官邸に行く電報というのは、物理的に持っていくのですか。

宮本 あの当時は外務省の職員が物理的に持っていきました。それが一番確実なですね。

岩間 もう一点だけ。内閣情報調査室というのがありますよね。あそこにも中堅、ちよつとシニアぐらいの外務省の方とか防衛省の方が常に来ておられるのですけれども、そことのやりとりみたいなものはご記憶にありますか。

宮本 最近の状況は知りませんが、私が現役だったころは情報調査局との関係は深かったかもしれませんが、地域課などとの関係はあまりなかったですね。

岩間 ありがとうございます。

吉田 次回は三月になりますが、またよろしく願います。

宮本雄二

オーラル・ヒストリー

第3回

開催日： 2021年3月1日

開催場所： オンライン

〔出席者〕 (肩書きはインタビューの時点)

宮本 雄二 (元駐中国大使、宮本アジア研究所代表)

岩間 陽子 (政策研究大学院大学教授)

合六 強 (二松学舎大学国際政治経済学部専任講師)

高橋 和宏 (法政大学法学部教授)

武田 悠 (広島市立大学国際学部講師)

吉田 真吾 (近畿大学法学部准教授)

質問票

1. 今回から2回にわたり、1985年8月から87年11月の国連局軍縮課長時代についてお尋ねします。本日は、ご着任からレイキャビク会談前夜（86年9月）までのことを伺えれば幸いです。まずは、軍縮課に関するお話をいただきたく存じます（4頁にある「外務省・国連局・軍縮関連局課の陣容」「米国の軍備管理・軍縮関連の担当者」も適宜ご参照ください）。
 - (1) 前任者は榎田邦彦大使でしたが、重要な引き継ぎ事項はございましたでしょうか。
 - (2) 軍備管理・軍縮問題に関する軍縮課と他局課（安保課、ソ連課、安全保障政策室など）の連携についてご教示いただければ幸いです。逆に、軍縮課と他局課の間で、所掌の問題が起こることはございましたでしょうか。軍縮課と駐米大使館や軍縮代表部などの在外公館との関係についても、あわせてお話しいただければ幸いです。
 - (3) 当時の軍縮課内での役割分担についてお聞かせください。また、諸外国、特に米国のカウンターパートとなった方々のことについて印象に残っていることがございましたらお話しください。
 - (4) 軍縮課が他の省庁、あるいは外部の専門家と協議や意見交換などを行う機会がありましたでしょうか。もしありましたら特にご記憶の方についてお話しください。
2. 85年1月、米ソ外相が軍備管理・軍縮交渉の新たな枠組み作りに合意し、9月のシュヴァルナツゼ外相の訪米後、NST（核・宇宙交渉）が本格化します。
 - (1) ソ連課首席事務官時代のこととなりますが、大使はソ連が交渉に復帰した理由をどのように分析されていらっしゃいましたでしょうか。
 - (2) 9月のNST開始にあたって、軍縮課長として大使が注視ないし重視していた点をご教示ください（下記3、4の質問とも重なるかもしれませんが、概略的なお考えで結構です）。
 - (3) この9月から翌月にかけて、ソ連と米国がそれぞれ新提案を提示しますが、これらについてご記憶のことはございますでしょうか。【参考資料①『外交青書』1985年度版】
 - (4) 11月には、6年半ぶりの米ソ首脳会談がジュネーヴで開催され、核兵器の50%削減やINFに関する暫定合意というアイディアが提示されます。大使はこの会談をどのように見ていらっしゃいましたか。

3. 86年初頭、米ソがNST、特にINFに関する提案を相次いで表明します。

- (1) 1月のゴルバチョフ提案は、2000年までの核兵器廃絶を謳い、その一部として5～8年以内の欧州部INFの全廃を含んでいました。大使は、この提案をどのように見ていらっしゃいましたでしょうか。【参考資料②】
- (2) 2月には、米国の逆提案にあたり、「欧州0、アジア50%削減」を旨とするレーガン大統領から中曽根首相宛の書簡が届きます。この書簡に対する大使の第一印象をお聞かせください。その後の、いわゆる「ギャング・オブ・フォー」による対応についてもお話しいただければ幸いです。外務省上層部や首相官邸の関与についても、ご教示ください。【参考資料③】
- (3) 大使は2月から3月にかけて欧州に出張されますが、訪欧中のやりとりで印象に残っていることをお聞かせください。【参考資料④】
- (4) 7月にINF交渉を担当するグリットマン代表が、翌8月にはラウニー顧問が訪日し【参考資料⑤⑥】、同月には大使が米国に出張されます【参考資料⑦】。INFに関する米国とのやりとりに関して印象に残っていることがございましたらご教示ください。

※参考資料

- ② 軍縮課「軍縮に関するゴルバチョフ書記長新提案に関する取り敢えずの評価」1986年1月16日（外交史料館、2018-0755）
- ③ 「INF交渉訓令」・「中曽根書簡」1986年2月10日（外交史料館、2018-0846）
- ④ 軍縮課長訪欧関連電報（第681号（1986年2月27日）、第77号（1986年3月2日））（外交史料館、2018-0760）
- ⑤ 軍縮課「グリットマン大使との協議（記録）」1986年7月16日（外交史料館、2018-0762）
- ⑥ 軍縮課「ラウニー顧問との協議要録」1986年8月（外交史料館、2018-0762）
- ⑦ 軍縮課長「米国出張報告」1986年8月18日（外交史料館、2018-0759）

5. 本日最後の項目となりますが、戦略兵器と防御・宇宙兵器に関する米ソ軍備管理についてお聞かせいただければ幸いです。

- (1) 86年春、オハイオ級原子力潜水艦の就役、ALCM 搭載重爆撃機の増加、新型 ICBM の配備などにより、米国が自主的に尊重してきた SALT II を遵守できなくなる可能性が浮上しました。この問題に関する日本の立場を確定するにあたって、外務省が重視していたのはどのような点だったのでしょうか。【参考資料⑧】
- (2) 6月、NST に関してソ連が新提案を行います。その骨子は、①実験室であれば SDI 研究は可、②FBS は交渉から除外、③ALCM と潜水艦搭載 SLCM は交渉対象、というものでした。このソ連提案については、7月のラウニー顧問訪日と8月の宮本軍縮課長訪米の際に議題に上がっていますが、日本が問題視したのは如何なる点だったのでしょうか。【参考資料⑨】
- (3) 9月の倉成外相の国連総会出席に際して、軍縮課は核実験禁止問題に関する調書を作成しています。同問題に対する外務省の立場についても、詳しくご教示いただけると幸いです。【参考資料⑩】
- (4) 9月には、日本政府が SDI 研究への参加を表明します。軍縮課は、この決定過程にどのように関与していたのでしょうか。これは、米ソ軍備管理・軍縮交渉を意識した決定だったのでしょうか。それとも、別の考慮や意図があったのでしょうか。

※参考資料

- ⑧ 軍縮課「米国の SALT II 遵守問題に関する我が国の立場」1986年4月2日（外交史料館、2018-0760）
- ⑨ 軍縮課「軍備管理交渉（SLCM 問題）（未定稿）」1986年6月30日（外交史料館、2018-0762）
- ⑩ 軍縮課「核実験禁止問題」1986年8月28日（外交史料館、2018-0759）

■参考：当時の主な出来事

- | | |
|----------|----------------------------------|
| 1985年1月 | 米ソ外相が軍備管理・軍縮交渉の新たな枠組み作りに合意 |
| 1985年3月 | ゴルバチョフが書記長に就任 |
| 1985年7月 | シュヴァルナツェが外相に就任 |
| 1985年9月 | NST に関するソ連の初提案（シュヴァルナツェ訪米） |
| 1985年10月 | 米国の対案 |
| 1985年11月 | ジュネーヴ首脳会談（「INF 暫定合意」のアイデア） |
| 1986年1月 | ゴルバチョフ新提案（2000年までの核廃絶、欧州 INF ゼロ） |
| 1986年2月 | レーガン・中曽根書簡（INF のアジア部 50%残置問題など） |
| 1986年2月 | 宮本軍縮課長の訪欧 |
| 1986年4月 | 米国の SALT II 遵守問題 |
| 1986年6月 | NST に関するソ連側提案 |
| 1986年7月 | グリットマン INF 代表・ラウニー大統領特使の訪日 |
| 1986年8月 | 宮本軍縮課長の訪米 |
| 1986年9月 | 日本政府が SDI 研究への参加表明 |

■参考：外務省・国連局・軍縮関連局課の陣容

外務大臣	1982年11月～1986年7月	安倍晋太郎
	1986年7月～1987年11月	倉成正
外務事務次官	1985年1月～1987年6月	柳谷謙介
	1987年7月～1989年8月	村田良平
外務審議官	1985年8月～1987年3月	梁井新一
	1987年3月～1987年7月	村田良平
	1987年8月～1989年8月	栗山尚一
国連局長	1983年8月～1985年11月	山田中正
	1985年11月～1987年8月	中平立
	1987年8月～1989年11月	遠藤実

軍縮課

首席事務官	高松明 → 高田稔久 → 楠田かおる
課長補佐	高田稔久、棚木元、小畑正比呂、楠田かおる、松本好隆、渡辺正人、上田完二
北米局長	1984年7月～1985年11月 栗山尚一
	1985年11月～1988年1月 藤井宏昭
安保課長	1985年8月～1988年7月 岡本行夫
ソ連課長	1984年1月～1986年6月 野村一成
	1986年7月～1988年7月 茂田宏

在外公館の軍備管理・軍縮問題担当者

駐米大使館	折田正樹、斉藤泰雄、田村鞆利（防衛班）
軍縮代表部	小西正樹 → 沼田貞昭

■参考：米国の軍備管理・軍縮関連の担当者

- NSC：ラウニー顧問、リンハード特別補佐官、クレーマー部員
国務省：ホームズ次官補（PM）、ディーン次官補代理（PM）、ホーズ次官補代理（PM）、ハレンベック参事官（PM）、テインビー副長官補佐官
国防総省：パール次官補（ISA）、ウォウカー次官補代理
ACDA：エメリー副長官、ノセンゾ戦略局次長
NST 交渉団：カンペルマン団長（兼防衛・宇宙担当代表）、ジマーマン副団長、グリットマン代表（INF 担当）、タワー代表（戦略兵器担当）、ウッドワース次席代表（INF 担当）、レーマン次席代表（戦略兵器担当）、クーパー次席代表（防衛・宇宙担当）

■ 軍縮課長着任

吉田 第三回と第四回の二回にわたって、国連局軍縮課長時代のことについて伺っていきたく思います。第三回と第四回の時代区分は、八六年一〇月のレイキャビク会談を境にしております。今日は、レイキャビク会談前までのお話をいただきたくと考えております。1番では、軍縮課長に着任されてすぐのお話を伺います。(1)ですが、前任者の榎田邦彦大使から重要な引継ぎ事項はございましたでしょうか。今までのお話では、外務省では引継ぎは詳細にはなされないということでしたが、もしありましたらお聞かせ下さい。

宮本 引継ぎを丁寧にする人としらない人がいましたね。私は、丁寧に引き継いだほうが良いと考えていたので、かなり詳しくメモに書いて説明するのですが、前任者から同じように引き継いでもらえた例は多くはないですね。

吉田 人によるということですね。

宮本 人によるというか、就任した人が自分の判断と責任でやれば良いという考え方が外務省にはあり、ある意味で個人主義といえば個人主義なのですが、後任をあまり縛るようなことはしない。私は、自分自身の経験から、いろいろアドバイスしてもらったほうが助かるなと思っていましたので、丁寧にブリーフしました。「何だ、うるさいな。自分に任せてくれよ！」と思う人もいたと思います。そういう雰囲気を外務省の中にある気がします。

吉田 二〇二〇年九月のご講演(一九日のGRIPSでの第一三回公開研究会)のときにお話を伺ったのですが、着任とほぼ同時にNPT再検討会議に出席されていたということですが、これは八月の着任直後のことでしょうか。

宮本 そうです(宮本注・NPT再検討会議は九月二五日に最終文書を採択しており、八月末もしくは九月初めに開催されたと見てよい)。

吉田 軍縮課長になった直後に、例えばINF(Intermediate Nuclear Forces: 中距離核戦力)とかNST(Nuclear and Space Talks: 核・宇宙交渉)とかいった問題があるということ、軍縮課で課長から聞くという形になるのですか。

宮本 そのブリーフはしっかり受けました。ただ、前回も申し上げたとおり、ソ連が交渉相手の案件は全てソ連課に公電が届きますので、「NSTって何だ」なんてことはないので、中身を軍縮課ほど知っているはずはありません。

吉田 (2)と関連しますが、軍縮課の仕事は、今おっしゃったソ連課や安保課、安全保障政策室などと関わってくると思うのですが、これらの部署との関係性はどのようになっていたのでしょうか。

宮本 前回は申し上げましたとおり、何で軍縮課が米ソ軍備管理交渉をやっているかというと、主管が難しかったからだと思います。米ソの安全保障関係ですから、中身からいうと安保課とソ連課のどちらかということになるでしょうが、どちらがやるかで必

ずもめますし、ソ連課が日本ひいては西側の安全保障にかかわる問題の主管となるのもおかしい気がします。安保課の仕事は、外務省組織令では日米安全保障条約の運用であり、一般的な日本の安全保障政策について関与するとは書かれていない。そこで軍備管理という点に着目して軍縮課に回ってきたのだと思います。

吉田 安保課の主管は、規則上はあくまで日米安保条約に関する事項ということですね。

宮本 しかし現実問題として、日本の安全保障はかなりの部分が日米安全保障条約で担保されているわけですから、安保課の役割が著しく重要なわけです。だから、サブスタンシヤルに安保課の発言権は大きいし、安保課の仕事は安全保障条約とか地位協定だけを眺めていればいい世界ではないわけです。広くアメリカのことを考え、世界のことを考え、そして日本の安全保障を考えると、安保課長をやった人は安全保障全般をよく勉強しています。当然のことながら安保課長は米ソ関係やグローバルな安全保障のことを勉強しなければいけないのですが、それは外務省組織令には書かれていないということです。それで安全保障政策室などができるのですが、安保課の存在感は別格でした。

吉田 安全保障政策室ができたのはこの時期ですね。

宮本 安全保障政策室はその前からありましたが、安保課を中心とする「安全保障マフィア」があつた当時は日本の外務省の安全保障政策を牛耳っていたわけです。北米一課も絡みます。

吉田 北米一課も関与しますか。

宮本 北米一課長は安保課長より年次が上で、岡本行夫さんも安保課長から北米一課長に昇格します。対米政策全般を見ますし、あの当時対米政策の外交政策全体に占める重みも大きかった。北米一課長は大体、重量級の人が就任するということです。外務省はポストというよりも人です。実力のある人が重要なポストに就いたら、そのポスト以上の力を発揮できる。外務省というものは基本的に人だということをくれぐれもお忘れなく。

吉田 外から見ているとなかなか分からないところでですね。

宮本 実際は、省内の力のある人たちと本当の相談はします。したがって、その案件なりにちゃんと発言権を持った人というのは、必ずしもポストではないですし、そのポストにふさわしい力を持っているかどうかで全部決まる。

吉田 大使が軍縮課長になられたときによく相談にいかれた相手というのは、やはり佐藤行雄総務課長ですか。

宮本 佐藤さんはちよつと前に総務課長で帰ってきていました。困ったときは相談していたと思います。最も相談したのが、安保課長の岡本行夫さんで、一年先輩でしたが親友でもありました。条約課長の加藤良三さんは常に尊敬する先輩でした。軍縮課の属する国連局の、後に事務次官になった林貞行審議官にも折に触れ相談しました。特に触れておきたいのが、年次はずっと上だったドイツ語の小野寺（龍二）さんです。この資料（参考資料⑤）の中にも情報調査局の審議官が出てきますが、ドイツに関して外務省で一番よく知っているのは小野寺さんだと思っていましたから、

どんなポストにいらしても、ドイツ問題で困ったら必ず小野寺さんのところに相談にきました。

吉田 INFの問題でも？

宮本 ドイツで困ったら小野寺さんに相談です。これがある種の外務省の仕組みです。形式的な決裁書類には、例えば小野寺さんの名前はありません。組織としての決裁書としては不要だからです。しかし、どうやって政策が形成されるかというと、こういう人たちの貢献は大きいということです。決裁書に名前が出てくる人でも、実質的に貢献した人とそうでない人がいるということです。

吉田 大使の場合はソ連課のバックアップが大きかったと思うのですが、当時は野村（一成）課長ですね。

宮本 野村さんには、その後もずっとバックアップをいただきました。

吉田 相談に行くことも多かったですか。

宮本 いろいろ相談することはありましたが、米ソ軍備管理交渉そのものについてはあまりなかったですね。この案件はやっぱり丹波（實）さんの関心事項でしたね。

吉田 丹波さんは当時駐ソ大使館にいらっしやいましたね。

宮本 なので丹波さんとは、モスクワに出張したとき以外はほとんど相談できませんでした。

ただ今回、資料②の「軍縮に関するゴルバチョフ書記長新提案に関する取り敢えずの評価」という一九八六年一月の文書を読み

直しましたが、一九八五年八月に就任してから八六年一月までに、私の軍備管理交渉に関する知識はここまで進んでいたということです。

吉田 これは大使が執筆されているのですか。

宮本 いや、基本的には、自衛隊から来ていた上田（完二）さんが書いてくれたものに、ソ連に関する分析も入りますので、私も手を入れたと思います。

吉田 上田事務官は、軍縮課にずっといらっしやったのですか。

宮本 私が着任する前からトータル三年はいたはずですよ。

吉田 大使の課長時代に代わられたのですか。

宮本 課長時代に航空自衛隊にまた戻りました。後任は彌田（清）さんでした。彼らが軍備管理交渉の実質担当官です。兵器体系のことも含めてそういう背景、知識がないと分かりません。戦力を管理し減らすという形で実質、軍事競争をしているのですから、彼らの存在は大きな助けとなりました。

吉田 （3）のところで軍縮課の中の役割分担について伺おうと思っていたのですが、上田さんが基本的には軍備管理・軍縮を主管されていたということですね。

宮本 軍縮ではなく、軍備管理の主管です。軍縮は外務省の軍縮を長年やってきた小畑（正比呂）さんや新井（勉）さんが頑張ってくれていました。

吉田 上田さんが主管されていた問題でも、文書には首席事務官のサインがありますね。

宮本 これは首席事務官のサインがないと課長に上げられないシステムとなつているからです。首席事務官も優秀でよく勉強していますから、サブスタンスについてもコメントしてくれていたはずです。

吉田 起草はほぼ上田さんが担当されていたということですか。

宮本 それを歴代の首席事務官、高田（稔久）さんや楠田（かおる）さんたちが見てくれた。私は、部下に非常に恵まれましたね。特に、楠田さんはその後早くに亡くなって本当に残念でね。将来を嘱望された、久方ぶりに登場した女性キャリア外交官だったのですが。人間的にとっても立派な良い人でした。高田さんも非常にリライアブルで、よく助けてくれました。突っ走りがちの私のパランスをよくとってくれたと思います。高田さんの前任の高松（明）さんはソ連課と一緒に仕事をしましたが、私が軍縮課にいったときには既に別の課に異動していました。彼を軍縮課にやったのも、かつての部下の高野（紀元）、榎田（邦彦）両氏を課長にしたのも、丹波人事でしょう。私の場合、それが宮本のためになると思つて野村課長が実現に努力してくださつたと思います。

吉田 丹波さんは、軍縮課のことを気にかけていらつしやつたのですね。

宮本 それは軍縮課が日本の安全保障を担い、対ソ交渉の一翼を担うからです。「対ソ交渉でいい加減なことをして、アメリカの国益を損ね、日本の国益を損なうことを絶対にやっちゃいかん」ということだつたと思います。

吉田 軍縮課は比較的新しい部署でしたよね。

宮本 いや、結構前からありましたよ。佐藤行雄さんと同期の、イラクで亡くなった渡辺陽一さんも軍縮課長でした。

吉田 初代の軍縮課長ですね。

宮本 彼は初代ですか。

吉田 ぱつと見た限りでは、課長として名前ですぐに出てきたのは最初です。

宮本 渡辺さんは、ちょうど佐藤安保課長の頃に軍縮課長になり、安全保障観が違つたのですね。それで佐藤行雄さんは軍縮課にマイン・イメージを持っていました。

吉田 以前少し伺いましたが（第一三回公開研究会）、その話は渡辺課長だったのでですね。

宮本 彼が初代ですか？

吉田 はい、手持ちの資料を見た限り、課長としては初代です。

宮本 数原（考憲）さんはどういう肩書でした？

武田 軍縮室長ですね。まだ室だと思ひます。

宮本 でも、室は長いことありましたよ。

武田 はい、六六年から。

宮本 その後、軍縮を重視しなければいけないということになつて、課になつた。

吉田 そして、現実の世界で軍備管理が進んでくる中で、丹波さんのように、日本としてもこの問題にもっと力を入れなければいけないと考える方が出てきたということですね。

宮本 そういうことです。それで（４）の話をすると、外務省だけでやっていました。

吉田 他省庁との関係性。

宮本 米ソ軍備管理交渉に関しては、防衛庁も含め他省庁とは相談することはありませんでした。自衛官が各課にいたのでやれたという側面もありますが。

吉田 上田さんが防衛庁と相談していたということはありますか。

宮本 それはよく分かりません。ただ当時の防衛庁は、基地問題、防衛力整備といった国内の問題に大忙しで、軍縮・軍備管理に対する関心は低かったですね。だから、基本は外務省だけでやっていました。ただし、官邸とは相談しました。

吉田 やはり官邸は調整が必要だった。

宮本 外国首脳から総理宛書簡は来るし、米ソ軍備管理交渉はG7サミットでの主要なテーマでもありました。日本を除く国々はNATOの加盟国ですから、米ソ軍備管理交渉は当然NATOの関心事項であり、G7でも常にこの問題が議論になる。だから、日本の総理大臣は問題を理解してサミットに臨む必要があったわけです。

吉田 1の（４）にある外部の専門家についてはいかがですか。

宮本 これもほとんど相談した記憶がない。専門家がいなかった気がします。

吉田 専門家ではないですけども、安全保障だと高坂正堯先生

が活躍されていたかと思えます。

宮本 高坂先生は私の恩師であり尊敬して止みませんが、軍備管理の専門家ではなかった。私がブリーフした記憶はありません。

岩間 桃井（眞）さんはいかがですか。

宮本 桃井先生も安全保障の大家でしたが、米ソ軍備管理の専門家という意識はありませんでした。それほど軍備管理は専門性が高いということです。

吉田 あとは小川伸一さんでしょうか。

宮本 ご相談をした記憶はないですね。私がアメリカに行ったときの報告書を読んでいただくと、その一例として分かってもらえるとと思うのですが、我々は、アメリカの、あの時点で最も知見のある人たちと濃密な意見交換をして、徹底的にアメリカの考え方を探りました。在米大使館もコンスタントにフォローしてくれるわけです。同じことをヨーロッパでもやりました。私も頻繁にアメリカ、ヨーロッパに出張していました。今日ほど情報へのアクセスがなかったあの時代において、我々の持っていた情報量は圧倒的だったと思います。それが外務省だけで対応せざるをえなかった大きな理由だと思います。（軍縮代表部の）今井（隆吉）大使とは頻繁に相談した記憶はありますが、それ以外は殆どない。それが、あの当時の軍備管理を巡る日本の国内状況だったと思います。

■ 米国の軍備管理関係者

吉田 アメリカの話が少し出ましたが、質問票の四ページ目に、電報でも名前が出てくるメンバーを書いてみたのですけれども、この中で大使の印象に残っている方はいらっしやいますか。

宮本 一番印象に残っているのは、NSCのINF担当のリンハード (Robert E. Linhard) です。彼には米国に行くとは必ず会っていました。一番INFのことを知っていて、一番丁寧に教えてくれた。彼はどこかの小さな核ミサイル基地の指揮官からNSCに来ていて、「ソ連の核をリーダーで見つけ、ワシントンに相談する時間的余裕がない場合には、迎撃用の核ミサイルのボタンをためらわずに押す。そうしないとアメリカは守れない」と言っていた。ちよつと太り過ぎで……。岡本さんもリンハードは非常に気に入っていましたね。

吉田 インタビュー(五百旗頭真他編『岡本行夫 現場主義を貫いた外交官』(朝日新聞出版、二〇二〇年))にも出てきますね。

宮本 彼は若くして亡くなりましたが、とても良い人でした。それから、印象深かったのは、INF交渉の責任者グリットマン (Maynard W. Gitman) 大使です。グリットマンを日本に呼んだときの記録(参考資料⑤)があるでしょう。ラウニー (Edward L. Rowny) は自分がレーガン (Ronald W. Reagan) 大統領から米ソ軍備管理交渉に関する日本との窓口指名されたと思っていたのももちろん大事にしましたが、しかし本当のとは

ろ、我々の最大の関心はINF交渉でした。微妙なところまで知るためにはINFの責任者であるグリットマンを日本に呼ぶ必要があるということ、アメリカ側に強く要請をして訪日を実現しました。こうすることでINF交渉についての情報を収集し、日本の考えや懸念を常時インプットしておく新たなチャネルをつくるという意味もありました。

吉田 こちらから呼んだのですね。

宮本 そうです。呼ぶだけではパンチがないので、箱根一泊旅行をつけました。

吉田 重要なインセンティブですね。

宮本 グリットマン訪日の報告書を見ていたら、懐かしい名前が出てきましたね。マコーネル (Donald J. McConell) 補佐官。グリットマン大使についてきて、会議の後、箱根に行ったときに温泉と一緒に入ることになった。グリットマン大使は、学生の頃にコロラドの林野局でアルバイトをしていた経験があり、山の中で作業をした後、仲間と一緒に温泉に入ることには身についていたので喜んで飛び込みました。ですが、マコーネルと一緒に入るのを嫌がって来ようとしません。

吉田 補佐官が来ない。

宮本 もう一回電話して、「大使が来ているのに、何しているんだ。大使が来いと言っている」と命令して、やっと恥ずかしそうに入ってきた(笑)。

吉田 初めての日本の温泉スタイルですね(笑)。

宮本 なおかつ、彼は海鮮アレルギー。「日本に来て海鮮アレルギーとは何事だ。日本食から海のもの抜いたら何が残る。よくもまあこんなやつがくっついてきた」と思いましたが、救急車で運ばれたことがあるというので、慌てて旅館に「肉だけにしてくれ」と頼んで、本当に迷惑をかけました。グリットマン大使の印象も強いのですが、この補佐官のほうが個人的にはもっと強い印象が残っています(笑)。

吉田 この補佐官はグリットマン大使の補佐官ですか。

宮本 そうです。

吉田 では、ジュネーブにいた人ですね。

宮本 そうです。やはり、サブスタンスとしてはリンハード。あとACDA (Arms Control and Disarmament Agency: 軍備管理・軍縮庁) のノセンゾ (Louis Nosenzo) かな。

吉田 ノセンゾの名前はよく出てきますね。

宮本 ノセンゾが私のカウンターパートで、それで例のアリュエーション列島への配備の話を彼にすると、「この案を自分が日本側に伝えたのではないかと疑われた。実は、あれは自分がACDAの内部で主張していた案だったからで、日本と仲が良いのを皆知っているから、一時部内で疑われた」と笑っていました。

吉田 国防総省のカウンターパートというのはいなかったのですか。

宮本 国防総省は特にカウンターパートはなくて、これは担当の人に参考意見を聞きに行くことでしたね。やはりNSC

とACDAですよ。これがメインです。NSCはホワイトハウスに属しており、リンハードにはホワイトハウスで会いました。

吉田 INF交渉に関する日本の立場が一番近いのは、国防総省の気がしていたのです。しかし日本側が国防総省と連携しないのは何でだろうと思っていたのですが、形式上難しいですね。

宮本 ベースでの意思疎通は、大使館が当然やっていたと思います。しかし建前としては、米ソ軍備管理交渉を含め、軍備管理・軍縮の主管はACDAで、ここが対外関係の窓口でもあります。NSCはホワイトハウスの組織として口を出すことができます、直接関係国の意見も聞いておきたいし、影響も与えたいというので、我々と会ってくれたのでしょう。国防総省が話しにくい立場にあることは事実です。ACDAが我々のカウンターパートで、それでは不十分なのでホワイトハウスを押しえるというのが我々の構図になります。またそれだけで日本の立場は担保されると判断していました。それだけホワイトハウスの力が強かったということです。

吉田 これで大体1番のところは話を伺えたかなと思いますが、その他ご質問、如何でしょうか。

宮本 あの時代に比べると、こんなに多くの皆さんに関心を持つて研究してもらっているというのは本当にうれしいことです。

吉田 調べれば調べるほど、奥の深い話だったことが分かります。**宮本** 考えてみれば、あんなに少ない数の者だけで日本の重要政策を決めているのかという気がします。国家、政府としての体制

が未整備だったと言うことですね。

吉田 軍縮課も規模は小さいですね。1番の部分、皆さんいかがでしょうか。

合六 ラウニー氏については、顧問として日本にも来られていると思うのですが、ふだん頻繁にやりとりするということはなかったのでしょうか。

宮本 現場の我々にとっては「ヒー・イズ・ア・グッドマン。ザッツ・オール」ということなのでですね。もちろんレーガン大統領が特別に派遣してくれたということで日米関係のマネジメントの観点からは大きな意義がありました。しかしサブスタンスに関して言えば、我々が収集していた情報を超えることはあまりなかったし、彼が積極的にレーガン大統領に影響を及ぼしてくれるかどうかについては懐疑的でした。良い人でしたが、彼に言えば何かが起こる、変わるという感じはしませんでした。しかし、レーガンさんとの関係が良いので「おまえ行ってこい」と言われて来ます。そういう意味ではレーガンさんとの関係では当然使えます。だからといって、彼はレーガンさんに直言するタイプじゃない。おそらく、忖度してレーガンさんに報告するタイプだろうと思われるっていました。しかも米ソ軍備管理交渉のあらゆることに精通しているわけではない。おそらくグリットマンだって、INF交渉についてそんなに徹に入り細に入りラウニーに伝えないでしょう。だから、全体は知っているが、本当に知っているとは言えない。レーガンとの関係でも、チャンネルとしては役に立つけれども限界

がある。それがラウニーさんの世界なので、大事にしているふりをしていましたし、そこそこ付き合っていればいいと少なくとも私は思っていました。彼に「日本は何だ！」と腹を立てられたら大変なことになるので、大事にして帰しましたよ。でも、ラウニー工作というのは日本側の記録にはないはずですよ。

吉田 レーガン大統領ないしはアメリカ政府の中枢に日本の立場を届けてくれるだろうと外務省が考えていたのは、リンハートですか。

宮本 そうです。彼はNSCだから大統領と直結している。彼はホワイトハウスでINFを任せられ、しかも彼一人だけですよ。NSCのあのときのトップは誰でしたかね。

吉田 マクファールレン (Robert C. McFarlane) ですかね。補佐官が結構代わるのですよね (当時の大統領補佐官 (国家安全保障担当) は、八三年一〇月から八五年一二月までがマクファールレン、一九八五年一二月から八六年一二月までがポインディングスター (John M. Poindexter)、八六年一二月から八七年一二月までがカールツチ (Frank C. Carlucci, III))。

宮本 彼らは必ずリンハートの意見を聞きます。米ソ軍備管理交渉は極めて専門的で技術的なものです。だから、サブスタンスに関してはリンハートの言うことが通る。彼は日本に好感を持ってくれていたし、ナイスガイでしたよ。

吉田 大使がリンハートに最初に会ったのはいつぐらいですか。

宮本 それは軍縮課長になってからです。

吉田 課長になってから八五年の一〇月に訪米という記録を見たのですが、そのときに会われたのですか。

宮本 恐らくそうでしょう。最初の出張は既にお話ししたNPT再検討会議のジュネーブで、三週間以上居させられました。長かったし、中身も分からずに毎日勉強の日々で大変でした。なので、余裕ができた一〇月ぐらいにアメリカに行ったのでしよう。中身を知らないで行くとは駄目だから、この間、猛勉強したはずですよ。

■ N S T交渉の開始と軍縮課長としての所信

吉田 では、その中身の話に移らせていただきたいと思えます。2番ですが、八五年一月から実質的にN S Tが始まります。この時代、まだ大使はソ連課首席事務官だったことになりましたが、ソ連が交渉に復帰した理由をどのように見立てていらっしやったのでしょうか。

宮本 正確に覚えているわけではありません。私はいろいろなことを考えるときに必ず歴史年表を眺めます。歴史年表を眺めると、いろいろな映像が浮かび上がってきます。それをやってみますと、八二年の一〇月にブレジネフ (Leonid Brezhnev) が死去している。これは、これまでのソ連体制がある意味で老衰状態の終わりに近づき、次のゴルバチョフ (Mikhail Gorbachev) への移行期間にあったと見たらいい。アンドロポフ (Yuri Andropov) が中継ぎの指導者になる。アンドロポフは当時、間

違いなく実力ナンバー1で、他に人がいないので、K G Bの長官は書記長にならないという慣例を破って就任しました。K G B出身のアンドロポフは、逆にソ連の実態を含め世界中のことをよく知っている。国民に知らせるかどうかは別問題として、ファーストハンドの情報が全部入ってくる。アンドロポフは、「今の状況をこのまま続けていくわけにはいかない。何かしなければならぬ」と強く自覚していたと思います。だからアンドロポフは八二年の一二月に欧州I N F削減提案をしたりして動こうとした。ところが八四年の二月、アンドロポフは死去するわけです。もう人材拮据で、能力はないが敵がいらないということで、これも年寄りのチェルネンコ (Konstantin Chernenko) が書記長に就任。ソ連共産党はここで半分死んだのですね。だから何も動けない。

しかし、「これではいけない。チェルネンコに頼るわけにはいかない」ということで、ソ連国内にもいろいろ動きが出てきたと思います。そして、八五年三月にゴルバチョフが登場するわけです。八五年一月のソ連の提案というのは、グロムイコ (Andrei Gromyko) も含め残っていた連中が今のままではいかんということ、米ソ関係に関しても働きかけを行ってくる。けれどもグロムイコがやるとなると、相変わらずプロバガンダに重点を置いた、我々が批判したような要素を含んだ提案になってくるわけです。したがって、ソ連が何かきちんとした戦略に基づき積極的にやろうとしたということではなく、ソ連の体制の衰亡化という流れの中で何かしなきゃいけないということで、受け身で

対外関係を動かした。その対外関係の最重要項目が米ソ軍備管理交渉であり、対米関係なわけで、そのために打ち出したのでしよう。こういう年表を見ながら、おそらくそうだったのではないだろうかなという姿が私の頭に浮かびました。事実かどうかは分かりませんが。

吉田 ソ連の意図の分析は本当に難しいところですね。ソ連が動いた理由を整理してみると、大使がおっしゃったように、一つには体制の衰退があり、同時にプロバガンダのための材料というのもあるようにも見えます。

宮本 そのときに研究しなければいけないのは、西ヨーロッパの動向がどうだったかということだと思います。西ヨーロッパでかなり世論が沸き上がっており、今何か手を打っておけば西側の同盟を脆弱化することができるというのが、ソ連にとり二つ目の大きな重要な判断材料となります。一つはソ連の国内情勢、もう一つはヨーロッパの情勢。三番目にアメリカの国内情勢ですね。レーガンさんがどこまで追い込まれていたかは定かではありませんが、私の書いた報告（参考資料⑦）を読み直しても、国内の理由から軍備管理・軍縮交渉で何らかの妥結を必要としているという箇所がありますね。これらを押さえて分析すると、そう間違った分析にはならないと思います。

吉田 ありがとうございます。それでは次の2の（2）、大使がNST交渉で重視していた点についてお聞かせ下さい。個別の話は後で出てくる3と4に含まれると思うので、大まかな話をいた

だければと思います。オーラル・ヒストリーのための顔合わせの際に大使がおっしゃっていた、軍縮課長として書かれた大きな方針に関するペーパーが外交史料館のファイルからは見つからなかったのですが、ご記憶の範囲でその話も伺えれば幸いです。

宮本 前に整理したときに、もう関係ないだろうと思って自分のいろいろな記録を捨てたみたいで、ペーパーは私のほうで探しても見つかりませんでした。必ずしも正確には覚えていませんが、これは就任後三か月から半年以内に書いたもので、それまでに学び考えたことを整理し、日本の軍縮基本政策を構築しようとしたものです。自分の原案をまず歴代の軍縮課長経験者に送り、コメントをもらい、それを踏まえて書き直し、省内に配布したのを覚えています。一番重要なのは、安全保障政策としての軍縮政策を考える、これを日本の軍縮政策の柱にしていく、という点にあったことは間違いのないと思います。つまり国防政策や日米安保政策が表とすれば、軍縮政策は裏であり、日本の安全保障政策はこれらが表裏一体のものになるべきであるという発想です。

それからもう一つは、本当の意味での軍縮政策を進めていく必要があるという点です。なぜなら、歴代の総理大臣、外務大臣が「軍縮をやります」と国民に約束しているのに、日本政府は口先だけで、実際は何も踏み込んでやっていないと感じました。公約違反は駄目だということで、軍縮の具体的措置に踏み込むことにしました。幸いなことに、前任の榎田課長時代に一つのアイディアを予算要求という形にしておいてくれました。それは地震探査

の機能を使った全世界的な核実験探査網の設置支援という予算項目を新たに立てたということです。私の時代に予算をとった。八六年の三月のことです。それが具体的な形のある国際貢献の最初のスタートでした。

基本政策ペーパーには、もちろんINF交渉も入っていたと思いますが、全体として七、八項目あったと思う。そのなかに軍縮専門家の養成も入っていたはずはです。

吉田 この核実験の探知網以外に、予算が必要だったものはあったのですか。

宮本 とりあえずそれだけでした。その前はゼロだったということです。

吉田 それが一番大きかったということですね。

宮本 一番大きいし、数千万円のオーダーでした。霞が関では予算要求してもすぐにはつけてくれないのですが、こちらが足繁く通ったこともあり大蔵省もその意義を理解して一回でつけてくれました。地下核実験の探知網は、全世界の適切な地点を網羅したグローバル・ネットワークにしないと不完全なものとなります。ところが、適切な地点のある国は自分で設置する力がないことが多い。例えばモロッコで国際機関と一緒に機器の設置、人材の養成、維持費の負担などをしてあげる。モンゴルに置くべきだということになるとモンゴルを支援しなければいけない。だから結構お金がかかる。それを支援する財政的基盤をつくったわけで、大きな意味を持ちました。おかげで今はそのネットワークも完成し、

どこで地下核実験をしても分かるようになったわけです。

吉田 これは榎田課長の時代に動き始めたのですか。

宮本 初めてそういう項目をつくって予算書に計上したということです。

吉田 榎田課長時代に軍縮課が動いた理由も、大使がおっしゃったように、日本政府として約束したことをやらねばというところにあつたのでしょうか。

宮本 そうだと思います。少なくとも私は、政策として実現すべきであると明確に意識していました。

武田 軍縮課は本当にいろいろなことをやっていたらっしゃるなと思っただけですけれども、核実験の探知ということになると、今気象庁も運用している地震監視網で探知することですよね。

宮本 そうです。あのシステムを全世界に設置しました。CTBT (Comprehensive Test Ban Treaty: 包括的核実験禁止条約) の必要不可欠な構成部分としてあのシステムが今あるのです。あのシステムの構築に日本が積極的に協力したということです。具体的なノウハウはすべて気象庁の専門家の方たちに助けてもらいました。

武田 これもすごく専門的な話だと思うのですが、軍縮課の中でこういう軍縮マターと、米ソ軍備管理交渉のようなマターと、それぞれ班分けとかはされていたのでしょうか。それとも個人ごと、担当官ごとという分け方ですか。

宮本 班は何かありましたけど、そんなに精密な分け方じゃない。何せ少ない人数でやっていましたから。外務省の中での当時、小畑さんとか新井さんとか、軍縮を長くやっている人が何人かいました。C T B Tとか、いわゆる本当の軍縮プロパーの問題については、彼らに中心となってやってもらいました。その頃は防衛庁に軍縮の専門家はいませんでした。化学兵器禁止条約とか、専門的知識を必要とする場合は、先ほどの気象庁と同じように自衛隊の専門知識を使わせてもらいました。防衛庁自身は、防衛力を増やすことに一生懸命で、ましてや軍縮にはあまり関心はなかったと思います。

■ I N F交渉とジュネーブ首脳会談

吉田 では2の(3)に移りたいと思います。八五年九月から、米ソがI N F交渉に関する提案を出すようになっていきます。数字も入ってきて細かい部分はあるのですが、『外交青書』にまとめた記述があったので、そちらをお送りしました(参考資料①)。この米ソの提案に関してご記憶のこと、印象に残っていることがございましたら、お聞かせ下さい。

宮本 このときまでは、我々は実質蚊帳の外だったという感じですね。例の八六年二月の中曽根書簡でそのプロセスの中に我々はぐっと入り込むわけです。それまでも当然関心を持ち心配していたと思います。ただ八三年、ウィリアムズバーグ・サミット政治声

明において、G 7の歴史上初めて欧州とアジア太平洋の安全が不可分のものであるという共通認識を表明しました。日本が蚊帳の外におかれ、日本の安全保障上の利益が損なわれることを心配したからです。ただ私自身は、就任早々ジュネーブに行かされたりしていましたので、この点の備えが不十分だった可能性は十分あります。私が八五年一〇月に訪米しているというのであれば、おそらくアメリカともすり合わせをする必要があるという問題意識の下に、皆からアドバイスをもらいながら準備したはず。本省の責任者である担当課長がアメリカの責任者に直接関心や懸念を伝えることはとても大事です。もちろんアメリカに対する顔見せの意味もあったと思いますけど。

吉田 このあたりから、ソ連の提案の中に三沢基地のF-16が含まれているという話が出てくると思うのですが、ご記憶のことはありますか。

宮本 それはもう安保課が一番神経をとがらせる問題です。三沢のF-16がなくなれば対ソ抑止力が低下します。ソ連に対して意味を持つのは航空戦力と海上戦力であり、対ソ抑止のために三沢に米空軍を置き、その抑止力の中核が最新の戦闘機群です。日本の世論に対する揺さぶりということも含めて、ソ連がそういうことをやってきたことには、安保課が一番ピリピリしていました。

吉田 実は、先ほど大使がいらっしやる前にインタビュアーの間で、核に関するF-16の運用はどのようになっていたのだろうという話をしていました。F-16が日本にいる間は核はないはずで

すけれども、F-16がソ連をたたく際にはどこで核を積むということになっていたのでしょか。

宮本 おそらく安保課長も含めてNCND (Neither Confirm Nor Deny) だったと思います。最もセンシティブな問題であり、軍縮課長が知る術はありません。

吉田 アメリカは何も言わないのですね。

宮本 言わないでしょう。

吉田 日本側としては、ここは知り得ないところだった。

宮本 核の持ち込みについては条約上、当然事前協議しなければならぬですね。事前協議していないから持ち込んでないというのが、安保課のロジックでしょう。

吉田 F-16の場合、艦艇もそうですが、すぐにどこか別の基地に行けるから、例えば韓国で積んだりするのかななどと推測していたのですが、そういう話も出てきませんでしたか。

宮本 軍縮課長、知るべからず、ですよ。

吉田 やはりこの辺は安保課の領域。

宮本 そう、聖域です。

岩間 三沢はこの時代F-16で、韓国にもまだ核は結構あったと思うのですけれども、そういうのも含めてアジアのバランスをとるとか、そういう協議をすることはなかったでしょうか。

宮本 少なくとも軍縮課の議論では韓国ファクターは全く入ってきいていません。

吉田 INF交渉に戻りますが、アメリカも一〇月の末に新提案

を出しています。そのアメリカ側提案の中に「アジア部におけるソ連のSS-20のプロポーショナル削減」という言葉があります。これはヨーロッパの削減とプロポーショナルということだと思っておりますけれども、この言葉は日本としては歓迎すべきものだったのでしょうか。

宮本 ただ、日本は基本的にはゼロ・オプションですからね。前回あなたたちが出してくれた外務省の資料(第二回オーラル・ヒストリー参考資料⑦)を読み直しても、外務省というか日本政府はゼロ・オプションにこだわっていましたよね。ですから、「プロポーショナルだ」と喜んだことはないと思います。

吉田 日本にとつては、次善の妥協案ということですね。

宮本 西ドイツの抱える国内世論もありますので、ゼロ・オプションでなければ断固反対というわけにもいかない。アメリカ国内でも早期解決を望む声がある。基本はゼロ・オプションで、具体的対応は上手にやるということではなかったかと思えます。そういう姿勢ですから、アメリカ側には日本の感触は伝えたと思いますが、アメリカも真剣に日本の意見を考慮する段階には至っていません。

吉田 この段階ではまだだったということですか。

宮本 私自身は、八五年一〇月はまだ勉強中だったということですね。

吉田 ということは、課長になってからアメリカが出した一〇月末の案は、宮本課長にとってそこまで大きな問題はなかったとい

うことですかね。

宮本 我々としては、八三年とかそのぐらいからずっと、米ソ交渉を日本の安全保障と結びつけて議論してきたわけです。アジア、すなわち日本がヨーロッパより軽視されたと国民の目に映ることが、日米安保体制の基礎を揺るがすことを心配してきた。アジアとヨーロッパが同じ割合で減っていけば日本にとって文句はつけにくいですが、しかしアジアが置き去りにされる心配は常にありました。まだ「アメリカに正面切って文句言う段階かなあ」ということで、見守っていたということではないでしょうか。

吉田 八六年二月の中曽根書簡の話が後で出てくるので、「文句言う」ところは改めて伺えればと思います。あともう一つ、八五年一月にジュネーブで米ソ首脳会談が六年半ぶりに行われることとなります。この会談は、INFに関する暫定合意だとか核兵器の五〇%削減とか、一部現実的な要素、一部理想的な要素が出た会談になったかと思いますが、この会談に関して印象に残っていることはございますか。

宮本 それは、我々もゴルバチョフに対する期待を持ち始めたということです。ゴルバチョフがソ連を変えようとしている、方向転換を図ろうとしている、ということがどんどん伝わってくるわけです。その中での提案ですからね。したがって、ゴルバチョフ新政権の動向に細心の注意を払いながら、彼らの前向きなところについてはそれを殺さないようにする。そういう対応をアメリカも含めて西側はやったと思いますよ。ソ連は変わらない。それ

がウラム (Adam B. Ulam) の言うソ連なのですね。我々は、それまでソ連は変わらないという確信を持って、変わらないソ連と表面的な交渉をしても意味はないと考えてやってきた。しかし、ゴルバチョフになってソ連は変わるかもしれないと思い始めたということです。

吉田 やはりそれほどゴルバチョフの影響は大きかったですね。
宮本 そうです。しかし、ゴルバチョフが国内でどれくらいやるかという問題もあり、お手並み拝見という側面はありました。ただ前回もお話したように、外務省のソ連の専門家の意見は、書記長というポストが大事であり、書記長となったゴルバチョフはかなりのことができるというものでした。これは世界のソ連専門家の共通認識だったと思います。そうだとすれば、ゴルバチョフは何かやってくれるのではないだろうかという期待は確実にありました。

何といってもゴルバチョフは五〇何歳と若く、しかも頭脳明晰なことが伝わってくる。私たちは、もしかしたらソ連が変わるかもしれないと本当に希望を持ちました。おそらく西側の首脳も、「この人とうまく付き合っていけばソ連は変わるかもしれない」という気持ちだったと思います。その期待がゴルバチョフをああいう方向にソ連をもっていかせた一つの誘因でもあったのでしよう。ゴルバチョフの提案も、同じことをブレジネフがやったら我々は歯牙にもかけない。しかもゴルバチョフとともにシュワルナゼ (Eduard Shevardnadze) が登場した。グロムイコだった

らまだ疑心暗鬼ですが、シュワルナゼになった期待もありました。
吉田 その一方で、ゴルバチョフ政権になってもまだソ連のプロパガンダはあるのではないかと懸念というのはあったのですか。

宮本 当然それはありました。プロパガンダは組織としてのマシンの一部であり、上が代わっただけで全体は変わりません。だから、ゴルバチョフになったから急に民主的なやり方になるとは誰も思わない。発想もやり方も基本はソ連の枠組みでなされることはしようがない。そうしないと、ゴルバチョフは国内であつという間に失脚ですよ。

吉田 日本から見ると、この段階では両輪が動いているという感じですか。

宮本 例えば、私がこの前ちよつと言っただけでも、イギリスの外務省の評価も、「こういうところは新しい」とか、「全体として新味はないが、ここは注目している」とか、そういう見方ですよ。むしろ変わっているところを一生懸命探していました。

吉田 なるほど、変化に注目して探していくということ。

宮本 何か新しい動きがないかということを必死で探ろうとしていたということです。そういう形で我々にメッセージないしニュアンスを伝えようとしているのではないかという形で、ゴルバチョフの発言を見ていましたね。

吉田 後世の人間が文書を読むときの指針にもなりますね。勉強になります。

宮本 従来と違うところにエネルギーを集中して丁寧に読む。それでゴルバチョフは何を我々に伝えようとしているのかを一生懸命に探ろうとする。それを踏まえて、西側の外交官を含む情報機関の人たちがソ連の外交官とかKGBに接触するわけですよ。そして、そのニュアンスの違いがどういうものかということの確認にかかるわけです。全世界、西側で数多くの人たちがそのために動くわけです。それで得られた情報がそれぞれのキャピタルに集められる。それを踏まえて、ゴルバチョフの言ったことの真意は何だろうかという最終的な分析をするわけです。それぞれの国の判断というのがそこで固まる。これがいわゆるインテリジェンスとアナリシスの関係ですね。

吉田 ジュネーブ会談の時点では、それなりに新しい要素は出てきているという判断がなされている段階ですか。

宮本 少しはね。でも、まだ苦労しているなど。だって、既存のシステムはまだ全然変わっていないのですから。

吉田 まだなつたばかりですしね。

宮本 なつたばかりだから、これからですよ、ゴルバチョフがソ連を変えていくのは。

■ SDI

吉田 では3番に。八六年に入って、ゴルバチョフが二〇〇〇年までに核兵器廃絶をするというかなり踏み込んだ提案をしました。

そしてその一部として、欧州部のINFを中期的に全廃するという内容が含まれていました。先ほど話題に上がった資料②の軍縮課の「取り敢えずの評価」がこれと関連しますが、この提案に関してご記憶の点、印象に残っている点は、どのようなことになりましたでしょうか。

宮本 この文書をもう一回読みましたけど、よく書けていると思いますよ。これは上田さんが原案を書いて私が入れたのだと思いますけど。これを超えるものを今コメントできませんね。あの時以上に勉強をしませんから。あの当時、この問題に関しては私のトップレベルの状態だったと思います。

皆さん方に注目してもらいたいのは、ここでSDI (Strategic Defense Initiative: 戦略防衛構想) に触れていることですね。これは前回もお話ししましたけれども、ソ連に対して相当大きなインパクトを与えた。ソ連に軍備管理交渉を一生懸命にやらなければいけないと思わせた最大の動機づけは、このSDIだったと思いますよ。これをアメリカに本気でやられたら困る。だから、SDIが発展しないように、そしてアメリカとの間合いをゆるキャンピング、つまりこれ以上アメリカが強くなるにように、できれば全体として下げていく。そういう戦略的な安定性と安全性を、ソ連が本気で追求し始めた。その原因をつくったのはSDIだと思います。調べてみたら、レーガンさんは八三年三月二三日のテレビ演説でこれに言及しているわけですね。したがって、八三年からずっと、ソ連の軍備管理交渉に対する基本的姿

勢はこれに影響され続けてきているということです。SDIの議論がどうなっていたか。皆さんは研究者ですから、SDIについてのアメリカ国内の議論とソ連の対応についての比較をしてみたら面白いですよ。

吉田 それらが相関している可能性があるということです。

宮本 相関している可能性が高い。ソ連が一番怖がっていたのはこれですよ、いわゆる「スターウォーズ」ですから——これは過大な表現ですけども。したがって、その次の米ソ軍備管理交渉が宇宙も含むようになったでしょう。怖いからですよ。これも抑え込んでおかないとソ連は引き離される。アメリカはずっと総合国力において、科学技術も含めて引き続き上昇傾向にある。あの頃ソ連は頭打ち。米国の力を誇示されるとソ連としては異常な危機感を持つということだと思いますね。SDIというのは、私はキーファクターだと思いますね。よくレーガンの対ソ軍拡競争がソ連の崩壊を招いたと言うでしょう。軍拡競争の鍵はこのSDIですよ。

吉田 このゴルバチョフ提案に対する軍縮課の評価で、特段新しいというわけではないのですが、やはり興味深いなど確認させていただいたのが、アジアのINFの扱いの部分です。アジアに関しては、ソ連は何も言っていない。軍縮課の見立てでは、これは西欧とアジアの分断を図る動きだというふうに分析されていますね。こういった見方というのは、当時の軍縮課の中でのスタンダードだったのでしょうか。

宮本 スタンダードか知りませんが、私は丹波さんたちにソ連に対する見方をすり込まれているから当然そう判断しました。

吉田 丹波さんの見方というのは、やはり大きいのですね。

宮本 私も、ものの見方としてそれが正しいと判断したということです。ものの見方について影響を受けたということであって、個々の判断が違うことは十分あり得ます。ベースになる考え方がソ連課で訓練を受けたものだった、ということですから。八三年の大韓航空機事件でも、ソ連のプロパガンダというものの実態を私は身をもって知りましたから。

吉田 「撃っていない」と。

宮本 必要だったらもうそも平気です。狙いは責任回避であり、そのための世論工作、ということですよ。

吉田 その世論工作とも重なると思うのですが、このゴルバチョフ提案の中に核実験の禁止、無条件の停止というのも盛り込まれていて、これに対して日本としては軽々とは応じられないということが書かれています。

宮本 要するに世界中に反核感情があつて、日本だけでなくヨーロッパでもこれが広がっているわけですよ。そうすると、反核に至る非常に重要なステップが核実験の禁止だということを皆知っているわけです。核実験の禁止は、そういう人たちにアピールするための非常に良い手です。実際問題として、ソ連は既に十分実験をして自分には必要ないので、そういう提案をしてくるわけですから、この提案は各国の国民世論を動揺させるためになさ

れたプロパガンダです。専門家は欺けません、ソ連は良いこと言っている」と思ってくれる相手国国民が割でもいければ、それは成功でしょう。

吉田 このゴルバチョフ提案にある二〇〇〇年までの核兵器廃絶というのがゴルバチョフの本音だったのかどうかというのの一つの論点かと思うのですが、当時どういふふうに見ていらつしやいましたか。

宮本 本気じゃないでしょう。

吉田 ここは本気ではないと。

宮本 だって、専門家になればなるほど、ゼロにするのはいいが、ゼロであり続けることの検証の難しさは十分に分かっています。軍備管理交渉している人間なら当然、兵器の削減と検証というものを表裏一体のものとして考えてやっていますから、ゼロにすると言っても、二〇〇〇年に検証のノウハウをどうやって確立するのですか。あまりに非現実的です。

ゴルバチョフの思いつきで、軍当局が「ノー」と言わなかったのかもしれないですね。軍当局はできないことはよく分かっている。実務当局は、できないことを百も承知で、「これで欧米の世論が湧くのだったらいいんじゃないの」という程度でしょう。

岩間 SDIの実現可能性については、当時の外務省の中の印象はどんな感じだったのですか。

宮本 難しいだろうと思っていましたし、アメリカ国内でも、レーガンさんが打ち出したあのSDIは難しいというのが専門家の

意見でした。でもレーガンさんは一度言ったら引つ込めませんか
ら関係者は対応に困っていたというのが実態でした。「『悪の帝
国』ソ連を打ち負かすために、そして親愛なる国民を盾にせずに
アメリカの安全を守るために必要だ」とレーガンさんは信じ込ん
でいましたし、大統領でいる間これを続けていくと皆思っていま
した。それをやれると思っていた人はアメリカ当局にもほぼいな
かったと思います。だから、その後いわゆるミサイル防衛という
形でこのSDIが進展していくわけですね。変化するわけです。

岩間 SDIは実現不可能だろうと考えつつも、これを交渉材料
にしてもいいと思っていた人も中にはいたのでしょうか。

宮本 それはいたかもしれませんが、ソ連とアメリカは違
います。ソ連は嘘をついても国内的に何の問題もありませんが、
アメリカは大統領の発言は国民との約束です。いい加減なことは
言えない。基本的にはレーガンさんの理想であり、レーガンさん
は具体的中身に関心ないので、SDIとして最終的に打ち出され
た具体的中身はもつとまともなものになっていきますよ。もう一回
検証されたらいいと思いますが、それはちゃんと科学技術的にも
不可能なものじゃないようなものになっています。それはレーガ
ンさんが当初構想した「スターウォーズ」ではない。しかし、同
じ呼称で呼んでいるのです。実現不可能なものは、実務家は国の
ペーパーには書きません。だから、国の、国防総省の計画になっ
たときには、もつとまともなものに必ず変わっているはずですよ。

吉田 国防総省は国民を守るためのSDIを志向していたのでは

なくて、あくまでミサイル・サイロを守ることを考えていた面も
あったようですね。

宮本 国民を守るためにどの戦略が正しいかの問題でもありまし
た。それまで「恐怖の均衡」を維持してきたのは相互確証破壊戦
略という、お互いに相手を破壊できる——国民を殺せる——こと
を確証し合って、だから相手には手を出さないという戦略でした。
これにレーガンさんは反発した。同時にソ連の核の高度化が進み、
核の全面戦争をもたらすことなく核使用が可能なシナリオも出て
きた。相互確証破壊戦略破綻の可能性が出てきたということであ
り、アメリカの専門家の中に攻撃ではなく防御に力点を移す考え
が出てきていたのも事実です。そこでSDIとなった。ミサイ
ル・サイロのためだし、あの頃は宇宙に関してアメリカが圧倒
的に優勢だったので、宇宙を使ってソ連を押し込むことについて
は魅力を感じていましたよ。

吉田 同じSDIでも中身が全く違うということですね。

宮本 違うということです。

吉田 SDIの話が出たので、少し先に飛んでしまうのですが、
4の(4)のSDI研究の日本の参加について伺わせていただけ
ればと思います。八六年九月に日本政府がSDI研究への参加を
表明するのですが、軍縮課はこの決定過程に関与されていたので
しょうか。

宮本 もちろん関与しています。しかしこれは安保協力になりま
すから、安保課主管だったと思います。私の記憶では、SDIと

いうものはレーガンさんが考えるように極めて魅力あるコンセプトなのですが、同時に、それは現在我々が享受しているストラテジック・スタビリティを著しく動揺させる可能性も秘めているわけです。すなわち、米ソの競争を宇宙に拡大し、しかもいわゆるA B M (Anti-ballistic Missile: 弾道弾迎撃ミサイル) 条約でやっているこの枠組み——A B M条約で自分たちの防衛能力を制限することによってストラテジック・スタビリティというのは確立され、あのとときの抑止というのにはそれに基づいている——の根本に動揺を及ぼしかねない。そういうものについて、我々には大きな躊躇がありましたよ。しかし、研究に参加しないことのデメリットもあるし、対米関係を考慮した上で、研究参加だけを決定しました。その次の段階に参加するかどうかは未定での研究参加です。S D Iそのものについては、相互確証破壊戦略を超えた戦略不在の状況ですので、大きなリザーベーションを日本外務省は持っていました。

吉田 研究参加しなかった場合のデメリットとしては、どういうことが挙げられたのでしょうか。

宮本 日本が研究に参加しなくてもアメリカは進めます。参加することにより日米協力を強化できますし、研究の中身を早く深く知ることができます。宇宙が戦略環境としてこれから非常に厳しい状況になるというのは分かっています。そこで置いていかれるということは、日本の安全保障上マイナスですよ。だから、研究には参加です。

吉田 日本が研究に参加することで西側の結束というものをソ連に知らしめて、それで軍備管理を促進するという考えはあったのですか。

宮本 S D Iについては、日本とヨーロッパは似たような感じでした。だから西側の結束というか、アメリカとの結束ですね。アメリカとの結束のために、力を入れずに手を握り合ったということです。アメリカも、レーガンさんだけが一生懸命拳を振り上げていて、官僚機構も含めて冷静に対応していた。それで、日本もヨーロッパもそれにお付き合いをしたということでしょう。

岩間 ヨーロッパは、日本以上にこの問題では世論が反発していましたよね。特に西ドイツなんかはすごく政府はやりにくかっただろうなと思いますよね。

宮本 私もそうだと思います。

岩間 民間企業や科技庁は入ってきていたのでしょうか。

宮本 基本は安保課マターですのでよく分かりませんが、あの当時、科技庁とは相談していなかった気がします。S D Iについては、安保課が防衛庁と相談したと思います。しかし、科学技術庁を入れる発想がありましたかね、あの頃。セキュリティ・クリアランスの制度が整っていない日本で、不慣れた人を入れることに対する心配はありますよね。

■ 中曽根首相と安倍外相

吉田 S D Iの研究参加に関する官邸の意向というのは、伝わってきていたのですか。

宮本 大臣も総理も世の中のことを心配されたと思いますけれども、アメリカとのことを考えればこの研究参加ぐらいはせざるを得ないだろうというのが共通認識だったと思います。ちなみに、安倍外相もよく分かっておられたし、中曽根総理は本当にいろいろなことをよく分かっておられた。

岩間 中曽根さん自身は、レーガンさんのS D Iに対する一種宗教的な飛躍した考えというのをどういうふうな距離感で見えていたのでしょうか。

宮本 あまりこれについては総理と私が直接話した記憶はありませんが、そんなに我々の感覚と違うというようには思いませんでした。最低限、総理は我々の考え方を正確に理解され、そしてそういう方向で間違いないと正確に判断されたと思います。「下が言うからやる」という人では全くないということです。分かった上で、「これでいい」と判断しておられました。だからといって、「それじゃ、こうしろ」というアイデアは総理からは下りてこなかったというのが私の記憶です。

これも調べてもらったら分かりますが、I N F交渉に関し、国連特別総会の機会に緊急G 7サミットを開くとレーガンさんが言い出したことがあります。そのときに私も担当課長として同行す

るのですが、日本でサミットに臨むための勉強会を最低二回、もしかすると三回やっていますよ、一回一時間ぐらい。資料を準備して、それに対するご説明をして、総理からのご質問もあつて、それを二回か三回東京でやって、もう一回ニューヨークで勉強会をするのです。そしてサミットが始まる直前、「ちよつとみんな聞いてくれ」ということで、慌てて国連代表部の大使の部屋に駆け込んで、そこで総理がおもむろにホテルの便箋を引つ張り出されて、「君たちの話をいろいろ聞いたが、自分は今日の会議ではこういうふうにおもうと思ってるが、どうだ」とおっしゃって、自分でお書きになったものをお読みになる。それが完璧の出来なのです。一〇〇%理解しておられる。中曽根さんがすごいのは、それを全部自分の言葉で語られる。「これでどうだ」と言われるから、「そのとおりでございます」と我々も舌を巻くわけです。四回も勉強会をやった後ですよ。中曽根康弘という人はそういう人なのです。そのホテルの便箋の書き付けをポケットにポンと入れて、もう二度と出しません。サミットの間では自分の言葉で自分の立場として紙を見ることなく堂々と発言される。だから「中曽根はすごい」ということになる。中曽根さんは間違いなく正確に理解しておられた。

安倍晋太郎という人も頭の良い人ですよ。私はソ連課のときに、ソ連関係の訪問者のために直前に一五分ぐらいブリーフしたことがあります。発言要領を読んでくれと言われ、我々が読み上げると、安倍外相は目をつぶって聞いておられる。会談の場では

それを一言一句、正確に話される。一切修正不要。とても頭の良人でした。

吉田 安倍外相は、INFについてもかなり熱心に諸外国と協議している感じを受けます。

宮本 あの当時、中曽根、安倍という極めて優れた政治家がいてくれたということも、我々にとってもプラスだったと思います。

ただ、私が軍縮課長だったときには、外相が表に出て交渉をされたという記憶はないですね。ソ連課時代については、先ほど話したような強い印象があるのですが。軍縮課時代に私がどれくらい安倍さんとダブっていましたか。安倍さんは何年までですか。

吉田 八六年七月ですね。

宮本 軍縮課長としては一年足らずのお付き合いですね。安倍外相は、大きな派閥の長であり、次の総理候補でしたし、よく理解されていたので、すべてにおいて存在感は大きかったですね。八三年の例のG7ウィリアムズバーグ・サミットにおける宣言の発出に尽力されたという話は聞いていました。ただINFの問題に関していえば、中曽根さんの存在感が大きかったですね。安倍外相の秘書官が元軍縮課長の高野さんでしたから、現職の軍縮課長がこの顔を出さなくても、ペーパーさえ配っておけば後は高野さんが上手に説明してくれるという安心感がありましたね。ちなみに高野さんは、ウィリアムズバーグ・サミットのときの軍縮課長です。

武田 ウィリアムズバーグのときの日本の対応というのは、中曽根首相が主導されたということでしょうか。

宮本 そうですね。既に触れたように安倍外相も尽力されたと思いますよ。しかしサミットの間になつてくると相当首脳意向が反映されますから、そういう意味で中曽根首相主導だと思います。その前の議論を練る段階で、皆さんが参考にされている外務省のああいう意見（第二回参考資料⑧）は、当然中曽根さんにもあるわけです。先ほど言いましたように、中曽根さんは非常に勉強されたと思いますよ。そういう勉強されているときに、ああいうロジックが中曽根さんの頭の中に入っていく。あの人はロジカルな人ですから、ロジックが頭に入っていて、それはそうだというふうにお考えになつて、そのロジックに従ってサミットの場合に必要な議論というのをちゃんとやっていた。やっぱり総理が発言をし、総理がそういう方向で持っていけないと、下だけの力では限界がありますから、中曽根総理にやっていたというふうに思います。だけど、アイディア自体が中曽根総理から来たということではなくて、それは事務局とのいろいろなすり合わせの中で総理の頭に入ったというのが一番自然な見方じゃないでしょうか。

吉田 サミットつながりですが、先程伺ったニューヨークでのサミットがいつ頃だったか、ご記憶ありますか。

宮本 私の軍縮課長時代のG7特別サミットですね。ちょっとこれ、調べてみて下さい。いつだったか。国連総会のあれですから、

おそらく九月だった可能性が高いですよ。せいぜい一〇月（特別サミットは八五年一〇月の国連創立四〇周年記念会期中に開催された）。

■ 一九八六年二月のレーガン・中曽根書簡

吉田 質問票に戻りたいと思います。先ほどのゴルバチョフ提案が一月になされて、翌月、アメリカも新しい提案を出さなければいけないということで、有名なレーガンの中曽根宛書簡が届くこととなります。これは、「欧州部ゼロ、アジア部五〇%削減」という、日本にとって問題のある内容でした。このお話は既にGRIPSでの第一三回公開研究会のときにお伺いしているのですが、大使の中で印象に残っていることをお聞かせ下さい。

宮本 皆さんの資料をもう一回読んでみると、二月六日にレーガン書簡が来ている。これがワシントン時間なのか東京時間なのかということが気になりました。私が調べたら二月六日は木曜日。**吉田** そうですね。佐藤行雄大使の回顧録（『差しかけられた傘…米国の核抑止力と日本の安全保障』（時事通信社、二〇一七年））には、八日が土曜日だったと書かれています。

宮本 だから六日は木曜日。レーガン書簡は六日に来たし、返信で「二月六日付の貴書簡を拝読しました」となっているから、書簡の日付は六日ですね。これがワシントン時間かどうかというのが非常に気になります。ワシントン時間だったら、下手すると日

本側に手渡されたのは七日の可能性がある。ただ、普通は大使館が受けとって、大使館が現地の時間、日付を入れる可能性もあるから、この点は今となってはよく分かりませんね。いずれにしてもレーガン書簡が六日付で、時差のことをとりあえず捨象して考えても、一〇日には返事の手簡を出している。さらに、ラウニーが説明に来ているのですね。

吉田 そうですね。七日にラウニーが来日と書いてあります。

宮本 七日に来日しているわけですね？

吉田 はい。

宮本 六日からラウニーが来るまでの間に、サブスタンスについては相当練り上げておかないと、ラウニーに対する説明と総理の返事が食い違ってしまう。六日に書簡を受けとってからラウニーが来て説明するまでの間に猛烈に作業したということですね。

私の記憶では佐藤行雄さんの印象が強過ぎて、佐藤さんがディクテートしているいろいろなものを書いたように錯覚していた気もしますが、今回一月付の軍縮課のゴルバチョフ提案に対するコメント（参考資料②）を読んで、軍縮課も相当勉強しており、よく分かっていたということが確認できました。軍縮課の力でいろいろなものを書いていた。ですから、中曽根さんのレーガン宛の書簡を私が書いて、それについてのワシントンの大使館に対する訓令を岡本さんが書いたわけですね。岡本さんの訓令案の中で新しいのは、いわゆる代替案のところですね。アジア部に残置されるS-20をアジア部西端ないし中央部の基地に集めさせるという代

替案を安保課が中心に考えたというのは、間違いないと思います。しかし、大きなところに関しては軍縮課も理解した上でやっていた。

INF交渉の結果次第で日米安保体制が打撃を受けるという考え方は、丹波さんのソ連課長時代にもあったわけですが、丹波さんの前任の安保課長である佐藤行雄さんも同じ考え方だと思っ
ていいですよ。したがって、安保課長経験者の共通のコンセンサ
スとして佐藤さんはそれを強く主張して、それに強く彩られた中
曾根書簡、説明文書になったということでしょう。佐藤色が一番
出ているのは、そこかなという感じがしましたね。いずれにして
も、一九八六年一月の段階で軍縮課自体はあれだけのものを書く
力を持っていたわけです。だから、柳谷（謙介）次官用の発言要
領についても、そういうことを踏まえてラウニーが来る前に案を
つくって、それを安保課にも見せ、総務課長にも相談したという
ことでしょう。

というのは、これは明確に記憶していますけど、二月六日に
レーガン書簡が来てどう回答しようかということに悩んでいたと
きに、前にも話したように（第一三回公開研究会）、外務省の先
輩で対米関係をずっとやってきた方に「こういう書簡が来たけれ
どもどうしましょうか」と相談したら、「レーガンさんが『こう
いうふうにしたいのだけれどもいかがでしょうか』と言っている
日米関係上、アメリカが『こういうふうにしたいのです』と言っ
たときに、宮本君、ノーはないよ」と言われたのです。これで日

米交渉の歴史というものを垣間見た気がしましたが、アジアがは
つきりと差別的に扱われており、そうもいかんだろうということ
で、帰国後間もなくの佐藤行雄さんのところに相談に行ったわけ
です。佐藤さんは、「駄目だよ、我々に意見があるのだから言う
べきだ。レーガン書簡の最後に『もしご意見あればお聞かせ下さ
い』と書いてあるじゃないか。我々の意見があるのだから出そう
よ」ということで、例の四人（佐藤総務課長、加藤条約課長、岡
本安保課長、宮本軍縮課長）が集まって二月六日に打合せをし
たわけですね。

今このように考えていくと、二月六日に打合せをして、そして
おそらく柳谷さんがラウニーに会うときの発言要領もその晩につ
くって、とりあえずラウニー対策をする。あわせて中曾根書簡と
説明案について作成を続け、その中で安保課からああいいう代替案
が出てきた。おそらくラウニーのときには、代替案の説明はな
かったはずですよ。

吉田 実は、このラウニー訪日時
の文書が外交史料館のファイル
から出てこないのです。

宮本 あると思うけど。いずれにしても、ラウニーの発言はレ
ーガン書簡の焼き写しだったという印象でしたよ。ラウニーから
「ぜひこの案を飲んでくれ。飲んでくれなければ困る」という発
言はなかったと記憶しています。

吉田 そこまで強い要請ではなかった？

宮本 もし大統領特使からそういう発言があったら外務省は相当

動揺したでしょう。レーガンさんの本意がそこにあるのだということですから。それはなかったと思う。

吉田 実はこの辺のアメリカの史料が少し開いていて、NSCの会議でも同盟国に聞いてから最終決定しようという雰囲気だったようです。

宮本 それで、土日かかって案を準備しました。月曜日の朝一番に柳谷次官のところへ、これについての外務省としての意思決定をする会議を開いたわけです。

吉田 柳谷次官のところだったのですね。

宮本 そうです。そしてこの前（第一三回公開研究会）話したように、会議室に入る前に佐藤行雄さんから「トンチンカンな議論をする先輩が必ずいるから驚くな」と言われていて、現にそんな先輩がいてね。確かにアームズ・コントロール、軍備管理の考え方というのは、彼らからすると子供の遊びに見えるのですね。

「ここにあつたものをあつちに動かし、あつちにあつたものをこちに動かすゲームをやっている。それが本当にどれだけの意味があるんだ」と思う人が出てきてもしょうがない世界ではありません。軍備管理というのは、外務省でもごく一部の人の世界だったということです。月曜日の朝一番か、遅くとも一〇時には会議を開いて、おそらく一一時にはその会議は終わっていると思うから、その足ですぐ長谷川（和年）総理秘書官と高野大臣秘書官に同時に、こういう書簡と発言案でいきたいということで決裁を求めた。たしか中曽根さんから午後二時か三時にはオーケーが来

ましたよ。

吉田 早いのですね、すぐ来たのですね。

宮本 それは急がないと。長谷川秘書官に対しても、「早くやらないと、アメリカが自分の意見を固めてしまったら、いくら総理の手紙で日本の意見を注入してもアメリカは立場を変えないかもしれない」。早急に日本の考え方をアメリカに示しておくことがこのオペレーションの鍵です。総理の了承をすぐにもらって下さい」とお願いしたら、すぐにオーケーが来た。それで二月一〇日付の中曽根書簡と対米発言案になるわけです。それがワシントンに発電されて具体的なオペレーションが始まりました。今回いろいろな公開資料を見ていて、そういうことだったということがはっきりしてきました。

吉田 一〇日の外務省の会議なのですが、「SSI-20を動かすなんていうのはゲームだ」と言ったのは次官ではないですね？

宮本 次官ではありません。某幹部です。

吉田 それ以外に異論はなかったのですか。

宮本 ありませんでした。

吉田 これでオーケーだと。

宮本 アームズ・コントロール、軍備管理を理解していた人が、外務省でもいかに少なかったかということですね。

岩間 ただ、中曽根さん自身は、多分もう二重決定の頃からINF問題に関心を持っておられたのですね。

宮本 もちろんそうです。

岩間 ですので、すぐオーケーが出たということからも分かるように、落としどころというのが中曽根さんの中にはあったのではないかと思うのですけれども。

宮本 我々の書いたペーパーは、二重決定前後も含めた日本政府の基本方針からいさきかも逸脱していませんし、それを踏襲して、なおかつアメリカが飲めるように知恵を出したものです。だから、安倍さんの場合も、それから中曽根さんの場合も、分かった上で、「これでいい」というふうに了解してくれたということですよ。

岩間 外務省幹部の中でも、官邸はこっちの方向だということを知っている人は知っていたのでしょうか。

宮本 知っていたでしょう。

岩間 外務省としては、そういう意識が強かったのですか？

宮本 大多数の外務省幹部にとり、あの当時、「ホワット・イズ・アームズ・コントロール？」なんです。このコンセプトとかアームズ・コントロールの世界というのを分かっている人は少ない。そういう時代だったのですよ。本当に狭い範囲の人間だけがアームズ・コントロールに関わっていた。

岩間 多分レーガンさんも分かっていたので、逆説的に突破口が開けたのではないかとも思います。

宮本 それはそうですね。だから、政治家はそれで構わないのですが、問題はあの時代、日本の中でいかに層が薄かったかということですよ。

合六 一九八六年一月のゴルバチョフの核廃絶イニシアティブか

らレーガンからの二月書簡が中曽根首相に届くまで約一か月あると思うのですけれども、史料を見るとこの期間にアメリカでは政権内でどういうふうなゴルバチョフ提案に対応するかというので意見が割れていたようです。先ほど大使もおっしゃったように、ゴルバチョフの提案はプロパガンダにすぎないとする旧来的な見方と、この提案すべてを受け入れないにしてもポジティブな部分があるということ、どう対応するかが議論されたようです。ただ、同盟国にも協議をしていこうという形で最終的に決定が下されて、ラウニーを派遣したりレーガンから書簡を送ったりという流れになっているようです。そこで書簡が来るまでの約一か月の間に、外務省の中でアメリカの動きを探ったりするようなことと、この間は記憶としてございますか。いきなり書簡が来て、ちょっと驚いたという感じですか。

宮本 情報収集は日常的に行うものです。動いている重要な案件についてはいつもアンテナを張っていないけません。ところが政策を検討中の段階は、関係国政府に中身を伝えることは厳禁です。これが常識です。ですから日本大使館にも、アメリカ政府からはなかなか情報が入りません。しかし、北京でもそうですけど、ワシントンには街のうわさというものがある。インナーサークルの連中から漏れてくるのですね。だから、「ちよっとおかしいぞ」というくらいのは東京にも伝わってきていたと思います。

したがって、「びっくりした」というわけではないけれども、

それに対してどう回答するかということが悩ましいでしょう。初めて従来の基本方針から少し逸脱する事態になるわけです。ましてやレーガンさんがそういう方向に傾いているということであれば、日本政府としての対応は悩ましいですね。だから、私が一番悩んだのはそこです。驚いて「どうしましょうか」とパニックになったのではなくて、アメリカに対してどこまで「ノー」と言えるのか、やれるのか。私がアメリカの専門ではないので自信がない。そこで聞いて回ったわけです。

少し後のことですが、私たちは、レイキャビクの米ソ首脳会談は心配していました。レーガンさんは何を「イエス」と言うか分からないし、何が起こるか分からない。ということで、本当に緊張しました。

合六 やはりレーガンに対する不安感というものはあったのですね。

宮本 ありました。あの人は、ロジックとかストラテジーで判断する人ではない。したがって、その場の雰囲気で「ゴルバチョフは良いやつだ」なんて言って「イエス」と言うかもしれません。そういう次元の不安を我々は持っていました。しかもレーガンさんは結構カリスマ性がありましたから、間違った決定でもアメリカの中で通る可能性がある。それを私たちは恐れました。

吉田 先ほどの中曽根書簡に戻ってしまうのですが、書簡と訓令を首相官邸に届けたということですが、これは課長直々ではないですよ。課員が届けた？

宮本 急ぐときには課員に持っていかせます。直接持って行って、長谷川秘書官に直接渡します。長谷川秘書官には、「今至急持つて行きますのでよろしく願います」と私が電話して、それと一緒に人がすっ飛んでいって、だから一〇分後には長谷川さんのところに届いている。

吉田 実は、この点で気になることがあります。中曽根首相のオーラル・ヒストリー（『中曽根康弘が語る戦後日本外交』（新潮社、二〇一二年））を読むと、「この書簡を私が了承したのかね」とかいうくだりが出てくるのです。間違いなく外務省から案を出して、そして許可も来ているということですよ。

宮本 当然です。中曽根総理のレーガン大統領宛返信ですから、署名もあつたはずですよ。外務省の文書は外務大臣の決裁までしかありませんから、総理決裁の欄はありません。しかし必ず総理のご了承はとります。

吉田 たまに欄外に「総理秘書官」と書いてあることがありますね。

宮本 あります。それは資料を届けるといふことで、決裁じゃないですよ。

吉田 決裁ではないのですか。

宮本 決裁書の欄外に総理秘書官のご了承と書いておくことはあります。実際上は総理の了承を得ているけれども、形式的には全ては外務大臣です。電報も外務大臣が政府としての命令を在外公館長に出します。

吉田 長谷川秘書官を通じて、総理も「オーケーだ」というのを連絡してきたのですね。

宮本 当然です。総理の書簡を総理のご了承なく出すことなどあり得ないということです。

吉田 では、ここは間違いない……。

宮本 間違いありません。

吉田 先ほど、大使のところにて承の電話もかかってきたと伺いました。

宮本 長谷川さんからかかってきたのを、はっきり覚えています。

吉田 この中曽根さんの言がよく分からなかったのですよね。

宮本 お忘れになったということだと思いますよ。あれだけ重大なことをあれだけ沢山こなされてきたわけですから、我々にとつて重大でも中曽根さんにとってはそれほどでもないかもしれませんね。だから徐々に記憶から外れていくのでしょうか。

吉田 そうということかもしれませんね。九〇歳を越えられた後に話されているということもありますし。

宮本 長谷川さんに説明をして、そして午後二時か三時か、非常に早く返事が返ってきました。そこは間違いない。

吉田 中曽根首相はこのアメリカの案が届いたときに、「白人の連中が中心になって話をまとめて、日本は犠牲になってもいいと軽視されたと感じた。憤りを覚えた」というふうに語られているのですが、外務省でもこういった感覚はありましたか。

宮本 それはありませんでした。またこの感触は私たちには伝え

られていません。

吉田 もっと冷静と言いますか……。

宮本 冷静というか、この時代はまだアジアを日本が代表しなければならぬという意識はありましたが、中曽根総理の世代ほど欧米に対する否定的感情は少なくなっていたと思います。

吉田 あったとしても……。

宮本 少なくとも我々の世代にはそういうのはなかったですね。

吉田 逆に中曽根首相から、日本の国際的な地位を意識したような指示が来るといふことはありましたか。

宮本 それは特に記憶していません。ただ、皆さんもそうだと思いますが、日本の国際的地位を高め、世界の尊敬される国になるということ自体は、我々もそうだと思っていましたので、中曽根総理のそういうご指示があったとしても特に違和感はなかったと思います。ウィリアムズバーグ・サミットは特によかったです、あれがなかったらその後の展開は本当に難しかったです。日本の安全保障政策の大きな一つの節目だったのはもう間違いないですね。それをやっていただいたのは中曽根さんだから当然評価するわけです。

吉田 「ギャング・オブ・フォー」の話、他にございますでしょうか。

宮本 何で私らがそういうふう特別に見られるのかよく分からない面もあるのですが、私たちは当然やらなければならぬことをやってきたと思っています。たまたまそうすべきだと比較的強

く信じている者が一緒に仕事をしたということでしょう。私たちは何の違和感もなく、当然のことをやっているという意識でやったのですが、アメリカの中からは「何だ。日本がノーと言っているのは珍しいし、なおかつ代替案を持ってくるとは、一体何が起きているんだ」ということで、東京のアメリカ大使館に調査訓令が来て、そして調べた結果この四人が浮かび上がってきて話題になったということでしょう。この話は、私もアメリカの友人から聞きました。

吉田 八七年の電報に「アメリカにとつてのニクソン・ショックだった」と書いてありました。

宮本 まあ「アメリカにとつてのニクソン・ショック」と言われるほどのことではないと思いますが、当然やるべきことをやったということであり、特別なことをやっている意識は全くなかったですね。

吉田 訓令を精読して、今までと少し違うなというふうに思った点があります。それは何かと言いますと、今回のアメリカ案がソ連による日米分断とか日欧分断に寄与するのではないかという点が書かれてないように見受けられますね。これは意図的にそうされたのか、それとも偶然か。あるいは、おそらくこれは丹波色だと思うのですが、丹波さんがいなかったからその色が弱まったのか。

宮本 岡本さんが書いたからでしょう。

吉田 観点が少し異なるということですかね。

宮本 私が書いていたら入っていたのではないですか。

吉田 そこは丹波イズムの継承者らしく書いていただろうということですね。言い換えると、大使としては日米分断に寄与してしまふという危機感があったと解釈してもよろしいでしょうか。

宮本 これはソ連の対日外交という観点から見ているわけですよ。ソ連課の視点です。ソ連課の視点からするとずっとそうなんです。それが外務省の視点になるかというと、人によって濃淡が出てくるということだと思いますね。岡本さんは少し視点を異にする。

吉田 むしろ、日米の安保の観点。

宮本 とにかく短時間でお互いに書き上げましたから、お互いのことをあまりチェックする暇がないし、基本的には岡本さんに任せた文章です。

吉田 日曜日もずっとお仕事を。

宮本 この週は、当然週末を潰しての作業でした。

■ 軍縮課長の欧州出張と米国の軍備管理関係者の訪日

吉田 では、次に移りたいと思います。若干関連してくると思うのですが、この書簡と訓令を出された後、大使が欧州に、岡本行夫安保課長がアメリカにという形で、出張されることになりました。この訪欧中のやりとりで印象に残っていることを伺えればと思います。

宮本 主戦場はアメリカであり、実はこのときの訪欧の記憶はあ

まりなく、大きな印象は残っていません。公開情報にこのときの記録があれば確認できるのですが。なぜ行ったかという点、ヨーロッパが崩れるという不安が常にあったからです。とりわけ西ドイツです。したがってそこに、「日本としても困る」と直接働きかけておく必要があるとの判断になるわけです。結局、本省の責任者が直接やった方が良好だろうということで行ったと思います。よく出張しました。頻繁にヨーロッパとアメリカ、つまりG7の関係国に出張して、彼らの考え方をチェックし、動揺していかどうか確認し、我々の考え方を注入するということをやっていました。それぐらい注意して、いろいろなところで巻き返しが起こらないように気をつけていました。

吉田 崩れるとしたら西ドイツからだという認識だったのですか。

宮本 西ドイツでしょうし、西ドイツが動揺するとフランスもイタリアも動揺します。その意味でこのイギリス関係の資料（参考資料④）をもう一回読み直すと、やっぱりイギリスは頼りになるわけですよ。ヨーロッパの中でイギリスが最も我々の助けになったと思いますね。

吉田 イギリスも、一九八六年二月のアメリカの案には、かなり強く反対したようです。これは、大使の報告にあるとおり、ヨーロッパから核がなくなるというのを、イギリスは不信感を持って見ていたということですか。

宮本 持っているし、まさにヨーロッパとアメリカの分断というのを心配しているわけですね。

吉田 イギリスはそちらを。

宮本 イギリスは心配している。それはプロパガンダの問題、国民世論の問題ではなく、安全保障のいわゆる軍事態勢の問題としてそういうことが起こり得る危険性があるということをきちっと分かっています。したがって、アメリカがそういう動きをすることについては必ずくぎを刺していくというのが、イギリスの姿勢になっていたと思いますね。

岩間 英語のメディア、ヨーロッパ系のメディアの論調はこの当時、ほぼこんな感じでしたね。『エコノミスト』とかが猛反対していたのを覚えています。

宮本 イギリスはですね。西ドイツはどうでした、あの頃は？

岩間 西ドイツは苦しかったと思います。この頃からだんだんゲンシヤ（Hans-Dietrich Genscher）がゴルバチョフに寄っていききました。結局最後までコールの路線とゲンシヤの路線はうまく合わなかったですけど、両者の齟齬が開始するのがこの頃だと思えますよ。ゲンシヤはC S C E（Conference on Security and Cooperation in Europe: 全欧安保協力会議）を重視し始める。ゲンシヤはすごく人気がありました。コールは何か鈍いという印象を一般には持たれていた。両者の路線には差異があったと思います。

宮本 やっぱ最後頼りになるのはイギリスだという認識を強めたし、私のイギリスに対しての高い評価というのものもつながっていくのです。イギリスという国はグローバルに眺めていて大局的

な判断ができる国だなどという印象を、このときにも強く持ちました。

吉田 フランスもこのアメリカ案には反対していたようですが、フランスはどういう感じでしたか。

宮本 フランスにも行きましたけれども、フランスはあまり強い印象はないですね。イギリスだとこっちの味方についたらずっと味方してくれるけれど、偏見かもしれないませんがフランスは途中で変わる可能性がありますからね。イタリアもそうですが。西ドイツもこっちについてくれたら信頼できるのですが、西ドイツはそのとき動揺していましたし、西ドイツ外務省は間違いなくゲンシヤアの指揮下になりましたから。したがって、西ドイツ外務省は必ずしも我々と肌合いが一致しているわけではないということなのです。

岩間 西ドイツも時々は行かれていたのですね。

宮本 結構行きましたよ。ボンの西ドイツ外務省の、乗ったり降りたり自分でしなきゃいけない、ドアのない止まらないエレベーター。

岩間 パーテルノステル。

宮本 あの時代ですよ。

岩間 いや、まだあります。あれはベルリンでも使われています。
宮本 あのエレベーターに乗つけられてね。それで何年でしたかね、「いつになったら首都になったベルリンに行けるんだろう」と西ドイツの外務省の連中に聞くと、「いや、自分が生きている

間は難しいだろう」なんて言っていましたよ。

岩間 そうですよ。日本大使館をちょうど建て替えようとか言っていた頃ですよ。

宮本 そうそう。

吉田 質問項目には書けなかったのですが、今気づいたことがあります。大使の欧州出張の後に、中曽根首相が四月にキャンプ・デービッドでレーガンさんに会ったり、安倍外相がソ連に行つてゴルバチョフに会ったりしているのですけれども、これらに関して何かご記憶のこと、印象に残っていることはありませんか。

宮本 特に記憶にありませんが、中曽根首相も安倍外相も言わなければいけないことをきちんと言う人ですから、我々の懸念事項とか関心事項というのは確実に提起していただいていると思います。日本政府として言わなければいけないことはちゃんとやっていただいたと思います。

吉田 もう安心して。

宮本 安心していました。

吉田 では次に。七月に入つて、アメリカから重要な軍備管理・軍縮担当者が三人来ることになりました。先ほど少しお話に上がったグリットマンが来て、ここには書かれていないのですがその後にエーデルマン (Kenneth L. Adelman) ACD△長官が来て、最後にラウニーが来るという形になります。この訪日及び翌月の大使のアメリカ出張について、印象に残っていることをお伺いできればと思います。

宮本 我々の動きを「アメリカにとつてのニクソン・ショックだ」というのを、私は今回知ったわけですが、あの当時は全く知りませんでした。全体としてアメリカは、日本とも協議しなければいけないという気になっていたと思います。やはり、「相談してくれ」と言うだけでは駄目で、相談したら成果がある、相談することで自分たちにも収穫があると相手に思わせることができなければ、相手は来ないということです。三人も来たというのは、グリットマンのように我々が呼んだということもありますが、日本と協議することに意味があるということであつたのだと思います。

エーデルマンは鍵となる人です。米ソ軍備管理交渉の政府の組織としてはACDAが一番重要だつたからです。我々のカウンターパートは国務省ではなく、ACDAでした。もちろん国務省の日本部とかには連絡はとっておかなければいけないと思つてもよく会っていましたけれども、しかし実際上の仕事はすべてACDAでした。その長官にも来てもらつて、ラウニーも来る、グリットマンも来るということです。

グリットマンは、先ほども申し上げたように、INFについての機微などところまで聞き出さなきゃいけないので強くお願いして来てもらったということです。ACDAは我々のカウンターパートですから敬意を表さないといけない。ラウニーさんは、対日窓口としてレーガンさんから指名されている。向こう側で競い合った可能性はある気はします。

吉田 それで各省庁が個別に説明をすることになるわけですね。

宮本 急に日本の重要性が増して、日本と協議することがファクションになつたのではないですか。

吉田 大使の報告でも、ラウニーさんは日本との連絡役をやりたがっているけれども、実際に情報を握っているのはグリットマンだということが書かれていましたね（前段部分は参考資料⑦を、後段部分は軍縮課長「米ソ軍備管理交渉（対米協議）（メモ）」一九八六年四月八日（外交史料館、二〇一八—〇七六〇）を参照）。

宮本 そうだと思います。というのは、私の報告（参考資料⑦）の中にも書いてるように、ランクからしてラウニーが私に会う必要はなかった。私は課長で、局長でも何でもありません。にもかかわらず、大使クラスのラウニーが、私が行ったら会うでしょう。ということ、やっぱり日本側が自分を外すことを心配したのですね。

吉田 彼にそういう不安があつたということですね。

宮本 そういうふうには読んでいただけです。そうじゃなければ、私に直接会うのではなく、デピュティか何かに会わせて、その報告を聞けばいい。「どうもこの宮本というのは四人組の一人で、注意しておかなきゃならん」という意識だったかどうかは分かりませんが、ラウニーが会いたいと言つてきたのにはびっくりしましたね。

吉田 直接？

宮本 もちろん在米日本大使館に対してですが。

吉田 このエーデルマンの訪日に関して資料を見つけたのが最近なので、今チャットでお送りしました。画面共有します。この資料（追加資料）の中に、まだ研究者にもあまり知られていないことが書かれていたので、伺いたいと思っただけです。日米軍備管理・軍縮協議が、このエーデルマン訪日をきっかけに始まっているようなのですけれども、ご記憶にありますか。

宮本 その可能性は高いと思います。そういう形がないとエーデルマンも来にくいでしょう。

吉田 新しいチャンネルをつくると。これがエーデルマンが来るときの資料で、軍縮課が用意した文書だと思うのですが、同席者に宮本課長の名前があります。この資料の最初の部分に、定期化された日米軍備管理・軍縮協議を行いたいということが書かれています。ただ、今回は実現できなかったから、今後続けていくということになったようですね、この背景についてご記憶ですか。

宮本 おそらく、これは日本側が提起したアイデアだと思いますよ。

吉田 いつ頃ですかね。

宮本 それは私になってからでしょう。

吉田 やはり大使の時代ですね。

宮本 その前は、やる必要がそれほどなかったでしょうから。特にアメリカ側から見てということですが。

吉田 きっかけは今回のレーガン書簡ですかね。二月のレーガン

書簡があつて、やはりもっと連絡を密にしたほうが良いと。

宮本 そうした方が良いとアメリカが思うようになったのは、それがきっかけになったはずですよ。

吉田 実は、この協議の詳細を知りたいなと思っただけ、前回少し伺い次回格的に伺うことになるであろう、アリュンシャン列島へのINF配備の話が、この場で出ていたようなのですね。ですので、ここでご記憶のことを伺えればと思っただけですよ。

宮本 ちょっとその記憶ははっきりしませんけれども、アリュンシャン列島の件は、私が直接ACDAのノセンゾに伝えた記憶はあります。恐らくこの協議が初めてではないのではないですか。協議の定期化というのは外務省で働いていれればすぐ思いつくアイデアですよ。

吉田 協議の定期化というのはよくあることですか。

宮本 協議を定期化するということは、関係を緊密化し一歩格上げするということになりますので、よく使う手です。不定期だと非常に不安定であり、定期協議化することによって着実に話し合う、相談し合う関係になるということです。

吉田 こちらは、宮本大使がメインで出席されていたのですか。

宮本 いや、そうじゃなくて、向こうは局長クラスですから。

吉田 じゃあ、中平（立）局長ですかね。

宮本 当然、中平さんがエーデルマンのカウンターパートとして出ていたはずですよ。話を聞きながら、エーデルマンと中平局長の協議の場面を思い出してきましたよ。

岩間 この時期ですけれども、チェルノブイリ原発の事故で西ドイツの中の空気が変わるのですよね。「牛乳に放射能は」などの話も出てきて、国中が大パニックになったという感じでした。あれでさらに西ドイツの方向性が他の国とずれてきたと思うのですけれども、何か記憶されていることはありますか。

宮本 ヨーロッパ、とりわけ西ドイツでは、チェルノブイリのインパクトが非常に大きかったなというふうに思います。我々にとってチェルノブイリはある意味では対岸の火事で、ちよつとのほほんとしていましたね。ヨーロッパは本当に強く反応しましたから、当然反核感情というものが強まる。だから、世論的には軍備管理がますます平和論的な核軍縮、平和主義、そういうことに引っ張られていくというのは、当然我々も心配しました。

私は西ドイツ外務省に、「軍備管理の問題は、グローバルなセキュリティが危殆に瀕するような大きなイシューであり、西ドイツの国内のことで判断しないで欲しい。日本は、自国ひいては西ドイツを含むグローバルな安全保障のために何をやらなければならぬのかを必死で考え取り組んでいる。日本の立場は日本の狭い利益を超えたヨーロッパの利益にも配慮したものにしていく」という趣旨のことを、あらゆるロジックとファクトを使って説明しました。このことを分かせないと、「脅威の度合いが違う日本が、せつかくヨーロッパで核軍縮が進もうとしているのを、また自分の都合で邪魔している」というふうに思われかねないのです。そう思われては困るということで、それは一生懸命やりま

したし、ボンにも結構な頻度で行きました。イギリスは共通項が多く、心を慰められる旅でしたが、私の説得の重点はやはりボンでしたね。西ドイツ外務省の人たちとは、口角泡を飛ばして机をたたいて議論し合うということではなく、彼らも西ドイツの立場のことを淡々と言うし、私も日本のことを淡々と説明する。「お互いに大変だな」と理解し合いながら、最後は、やっぱり西側の一体性を保ちながらやっついていこうということが終わるということだったと思いますね。

岩間 八七年一月に連邦議会選挙があるのですけれども、ここで緑の党が大躍進して八・三%を得票しています。逆にCDU/C SUは前回の得票率から四・五%も下げているので、コールさんはつらかったと思いますね。

宮本 だから私たちはコール首相を評価したわけです。コールさんがいてくれるので西ドイツはまだしっかりと我々の陣営に残ってやってくれているということで、コールさんに対する評価は高かったですね。

岩間 だと思えます。西ドイツは、本当にコールがいなかったら厳しかったと思いますね。コールは、ブッシュ（George H. W. Bush）がいてくれたことがドイツにとって非常によかったと言っていましたけど。

宮本 そうですか。

岩間 でも逆に、アメリカにとっても、コールが八〇年代にいなかったらもつとぶれていたかなと思いますよね。

■ 戦略核戦力の諸問題

吉田 本日最後の項目、戦略兵器の軍備管理と、既にSDIは大分伺ってはいるのですが、防衛・宇宙兵器の軍備管理について伺えればと思います。4の(1)は、アメリカのSALT (Strategic Arms Limitation Talks: 戦略兵器制限交渉) IIの遵守問題になります。八四年から八六年までの比較的長い間、問題が出たり消えたりするのですが、これに関して外務省の立場がどういうものだったのか、ご記憶の範囲でお話をいただければと思います。

宮本 安保課とも共有していた見方ですが、今日まで続いてきた戦略的安定性を損ないかねないことをアメリカがいろいろやっていることに対して、我々は大きな危機感を持っていましたし、その危機感を、遠慮なくアメリカに伝えていました。現在あるストラテジック・スタビリティを代替する、アナザー・ストラテジック・スタビリティをもたらすものをアメリカが提案しなければならぬし、それが提案できないまま崩していくということについて日本は反対である、と明確に伝えました。しかし同時に、日米関係がありますから、何が何でも反対というわけにはいかない。アメリカがそれでも行くと言ったときには、少なくとも日本のパブリック・ステートメントで反対を表明するかどうかは別問題です。現に、パブリック・ステートメントでは最低限反対はしなかった。しかし実際問題としては、その次が見えないままこういう

ふうに戦略的に漂う状況、あるいは次のステージに入るといふことについて、少なくともあの当時の我々は、心構えが十分にできていませんでした。何も先が見えないのですから。それでもアメリカが先に進もうとした背景には、相互確証破壊戦略が破綻しかかっているという危機感と、科学技術も含めてアメリカが圧倒的に優位にあり、その次にくるものは今よりもソ連に対して有利なストラテジック・スタビリティとなるだろうという前提があったからでしょう。

吉田 しかし、それ自体はどういうものになるかは分からない。

宮本 分かりませんでした。我々は、そういう世界に放り込まれることについて、基本はノーでした。

地下核実験をアメリカが始めるかもしれないし、戦術核が開発されて高破壊力・小周辺損害が可能となってきた状況でした。どんどん核の使用のスレッシユホールドが下がるわけです。この状況をアメリカはずっと続けている。これは、安保課長はいざしらず、少なくとも軍縮課長にとっては、日本の軍縮政策上、日本政府を困った立場に置くわけです。軍縮政策の観点から核実験の再開には同意できない、とアメリカにはつきりと伝え続けました。

吉田 核実験の問題については、日米で若干摩擦があったように見受けられます。

宮本 摩擦はありました。それでも、アメリカは軍事安全保障の判断から必要なゴー・アヘッドしますから、こっちも言うこと

は言っておかなきゃならない。

吉田 日本にとつて、アメリカを止める梃子はない？

宮本 ありませんね。アメリカは本気でやらなきゃいかんと思つたときはやります。それは百も承知の上で、しかし我々の懸念は伝えておく必要があると考えました。少なくとも、私が軍縮課長の時代は、そしてその後の軍備管理・科学担当審議官のときも、アメリカに伝えてきました。

吉田 こういった懸念を伝える先は、ACDAがメインですか。

宮本 そうですね。

吉田 ACDAが政府内で押さえる方向に動くということですね。国防総省が逆の方向に動くことになりそうです。

宮本 ACDAもそんなに強い役所じゃないから、国防総省が決めればアメリカはそういうふうになってしまふ。しかしこの問題の担当と窓口はACDAでした。ただ、あの当時のアメリカは強かったから、既存の約束事を踏みにじつても、その後出てくる世界をアメリカに有利なものにできるという自信を持っていたと思います。しかし、これからはそうは行きません。アメリカにとつても、軍備管理は大事になってきたと思いますよ。

合六 一点目の「既存の戦略的安定性を損なうことがあつては困る」ということで意見したということですが、その前提には七〇年代から続く米ソ間の戦略的安定は日本の目から見ても安定しているという認識があつたということですか。

宮本 それはありました。

合六 しかし、アメリカが軍拡を進めることで、彼らとしては優位な形になるということになるけれども、それが果たして本当の意味での米ソ間の安定なのかという点については、疑問を持っていたということですね。

宮本 そうです。我々が教科書的に読んだ本は全部、米ソの戦略的安定と、その前提となる相互確証破壊戦略を前提に書かれています。抑止というのは、極めて心理的なものなのです。要するに、我々がミサイルを一〇〇〇発持てば抑止ができるという、数や数式の世界じゃない。一〇〇〇発を持てた結果、相手側がそれを脅威と判断し、手を出せば自分たちは大変な被害に遭うと確信することによつて、抑止が成り立つわけです。米ソは、その確信を持ってないから地球を何回も破壊できるような大量の核を製造したわけです。この心理ゲームは、相手の心理を理解することによつて成り立ちます。現在、中国の核が問題にされますが、最も問題なのは我々が中国の心理を正確に理解できていない点です。

相互確証破壊戦略の前提は防衛を放棄するということであり、それを定めているのがABM条約です。アメリカがそれを放棄すると、この抑止の公式が崩れます。ソ連からすると、アメリカのミサイル防衛システムが出来上がった後だと、ソ連の核は無力化されますから、その前にチャンスを見つけて先に撃ち込んでおかないといけないということになり、今度は逆に、ソ連から撃たれる前にアメリカが撃つておかないと、ソ連の攻撃で無力化された後では間に合わないということになる。こうなると抑止力が効か

なくなる。この抑止力というのは、お互いに相手を確実に破壊できるといふ前提で成り立っていて、相互確証破壊、MAD (Mutual Assured Destruction) なんです。このMADが壊れることになる。

それを私たちは心配しているわけです。MADが壊れたときに、何が我々の抑止を確実にするか。それはいずれ圧倒的に強いアメリカが出現すれば、そのときは相手方に壊滅的打撃を与える新たな手段を獲得したということですから、これは抑止になるでしょう。しかし、その移行期間をどうするのか。移行期間の抑止をどうすれば安全を確実なものにできるのか。だから、アメリカは「段階的に移行し、同盟国ともしつかり相談していきます」というようなことを我々に説明すべきだったにもかかわらず、それもやらない、あるいはできない。だから、私たちは不安を覚えたわけです。これは、ヨーロッパもそうだと思います。

吉田 アメリカの圧倒的な優位があれば抑止が成立するという考え方には、アメリカは現状維持国家だというのがあるという前提がありますか。圧倒的優位があっても、アメリカは攻撃的な行動には出ないという前提でしょうか。

宮本 出ないという前提ですね。それは民主主義国家ですから。

吉田 そこに対する信頼がある。

宮本 アメリカの民主制度に対する信頼ですよ。アメリカ大統領が例えば一億人を先制核攻撃で殺すようなことを、アメリカ国民は許しますか。

吉田 許しませんね。

宮本 許さない。立ちどころに政権崩壊でしょう。だから、アメリカはそういう形で民主主義がアメリカを暴走させないように担保をしているわけです。ソ連にはそれが無い。だから、米ソの間にはMADを成立させるしかなかったわけです。

吉田 レーガン政権は原子力潜水艦を新しく建造したり、あるいはB-52を増加させたりして、戦略核戦力の増強も行っていたのですが、こちらはどちらかというと日本にとって悪いものではなかったということですか。

宮本 それはそうですね。核バランスはソ連に有利に傾いているというのが、我々の判断だったわけですから。それに加えヨーロッパでも通常兵器でソ連が優位に立っている。核戦力でもソ連のほうが明々白々優位になったときに何が起こるか。アメリカの全面核攻撃はないと踏んで、通常兵器でヨーロッパ攻撃を始めかねない。しかし、これらは先ほど言ったように全部心理戦です。そういうシミュレーション・ゲームで相手を制圧できると思うか、制圧できないと思わせるかの問題なのです。米ソの核戦略ゲームをする人たちの心理ゲームです。科学のようで科学でもない。心理学も科学のようですが、それは相手をしつかり診断できて初めて役に立つ結論が出る。核戦略ゲームの場合は、そのような診断はできない。不確定要素が大きいということでもあります。したがって、アメリカ側がその心理的なコンプレックスを持たないようにするために軍事力を増やしていくということについては、

私たちも納得しました。

吉田 4の(1)(3)(4)については大体伺いましたので、4(2)が今日の最後の質問になります。ソ連が新提案を出してきて、先ほども少し出てきたFBS (Forward-Based System: 前方基地システム)を交渉から除外するとする一方、SLCM (Sea-Launched Cruise Missile: 海上・海中発射巡航ミサイル)は交渉対象に含めるという提案をします。このソ連提案について、宮本大使はどのようにご覧になっていましたでしょうか。

宮本 資料⑨もまだ読めてないんですね。

吉田 すみません、たくさん送ってしまいました。この文書も一級の史料だなんて読んでいたのですが。

宮本 これはおそらく私が上田さんと一緒に書いたと思いますよ。

吉田 「未定稿」とはなっているのですけれども、すごい内容の文書です。

宮本 外務省として最終結論を出せない、あるいは出すのが不適当な場合に、関係者の判断の参考とするために「未定稿」という便利なやり方があります。「未定稿」というのは、いろいろなところと正式に協議せずに、軍縮課の現時点での見方として出したということですね。

吉田 この文書の作成には、安保課も入っていないということですね。

宮本 安保課には当然配っています。

吉田 それをたたき上げていくということですか。

宮本 「協議していないが、軍縮課の現時点の見方です。もし意見があれば伝え下さい。最終稿を出す場合には参照します」という意味です。急ぐときとか相談しても意味がないときは、未定稿で出し、軍縮課の判断を各課、あるいは上層部と共有する。その後の政策決定をしていくときに、我々の判断が前提にあるかないかで結論は全然違ってくるわけです。ソ連提案がどういうことを意味するかというのは、軍備管理をやっている人しか分かりませんからね。

吉田 分からないですね、ぱっと見ても。

宮本 外務省の中でも軍縮課、安保課、安保政策室など以外の部署の人は、多くがよく分かっていないけれども決裁権を持っている。だから、決裁権を持っている人に事情をちゃんと説明しておかないといけないので、こういうペーパーを配ることは意識的にやりましたよ。軍備管理というのが外務省の中でも、いかに特殊な分野であったかということですね。本当に関心のある、数少ない人しか、このことの本当の意味は分かってくれないということですね。私はこのペーパーを読んでいませんが、ここに書いてある以上の知恵は私にはないはずですね。

吉田 分かりました。この文書が面白かったのは、SLCMに関する記述が充実していたことでした。西太平洋におけるアメリカのSLCMの軍事的意味と、これが米ソの交渉で対象となった場合の日本への影響というのが、非常に興味深い。

宮本 さきほど私も書いたと言いましたが、これは上田さんのもの

のですね。そういう軍事的な兵器のインプリケーションに関する部分は全部上田さんの知見です。具体的な兵器が実際上どういふふうなインプリケーションを持つかというのは、航空自衛官である上田さんですね。ソ連課には海上自衛隊から、安保課には航空自衛隊と陸上自衛隊から、西欧一課には航空自衛隊から、それ以外の課にも自衛隊の優秀な人たちが来ていましたから、自衛官仲間の相談はあつたはずですよ。

吉田 そういつながりはあつたのですね。

宮本 自衛官仲間が相談して、我々の質問に対して彼らが答えられるような体制になっているとも言える。私は、軍事的なものは基本的に彼らに考えてもらいました。

岩間 森本敏さんが安保課に。

宮本 森本さんも安全保障政策室長でいたはずですよ。森本さんも大変な専門家ですから、当然、相談しますね。

岩間 森本さんは七七年から七九年まで安保課に出向されていますね。七九年に外務省に入省します。その後タフツ大学に行つて、在米大使館一等書記官などを経て、情報調査局安保政策室長。

宮本 私は八七年一月に大臣秘書官なるわけですが、途中で安保政策室長に森本さんが来て、一緒に仕事した記憶があります。知恵がある人には相談するというのが私のやり方ですから、当然そうしたはずですよ。

武田 森本さんは八七年から室長になられていますね。

宮本 そうでしょう。だから、重なっている時期がある。

吉田 ちなみにご記憶の範囲で結構ですけども、アメリカのSLCM、西太平洋にあるSLCMが、ソ連のどこを攻撃するとかいう話は出ていましたか。

宮本 私は記憶にありませんが、当然のことながら自衛官の人たちは考えていたと思いますよ。

吉田 まさに軍事マターですね。これと関連して、この頃戦艦「ニュージャージー」が日本に寄港すると思うのですが、何か覚えていたことはありませんか。

宮本 あまりないですね。これは安保課の最大の問題ですので、軍縮課は休憩させて下さい。

吉田 これで今日の質問事項は全部お答えいただきました。今日も長い時間、本当にありがとうございます。最終回となりますが、また来週よろしくお願ひします。

—了—

宮本雄二

オーラル・ヒストリー

第4回

開催日： 2021年3月8日

開催場所： オンライン

〔出席者〕 (肩書きはインタビューの時点)

宮本 雄二 (元駐中国大使、宮本アジア研究所代表)

岩間 陽子 (政策研究大学院大学教授)

合六 強 (二松学舎大学国際政治経済学部専任講師)

高橋 和宏 (法政大学法学部教授)

武田 悠 (広島市立大学国際学部講師)

吉田 真吾 (近畿大学法学部准教授)

質 問 票

1. 本日は、主に 1986 年 10 月のレイキャビク会談前夜から 87 年 11 月の軍縮課長離任までの軍備管理・軍縮問題についてお尋ねします。まずは、レイキャビクでの米ソ首脳会談に向けた動きについて伺わせていただきます。

(1) 9 月、米ソの LRINF の弾頭を「欧州部 100、アジア部 100」に制限する米国の新提案に関し、米国政府から検討要請が入ります。この検討過程について、ご記憶に残っていることをお聞かせください。【参考資料①】

(2) 10 月、松永駐米大使から本省に、INF 交渉に関する日本の立場を確定するべきという見解が提示されました【参考資料②】。このきっかけは、何だったのでしょうか。また、レイキャビク会談を前に、日本として妥協できる数値や方法などに関する検討は、行われたのでしょうか。

※参考資料

- ① 外務省「アジア INF 対米回答電案」1986 年 9 月 18 日（外交史料館、2018-0759）
- ② 部内連絡（松永大使発外務大臣宛）1986 年 10 月 2 日（外交史料館、2018-0757）

2. 86 年 10 月、レーガン大統領とゴルバチョフ書記長がレイキャビクで会談を行い、直後にはラウニー顧問が説明のために訪日します。【参考資料③】

(1) 米ソ首脳は、LRINF の弾頭について、「グローバル 100、欧州 0、ソ連アジア部 100、米国内 100」という線で暫定的に合意します。この合意に対する外務省の見解およびその前提にあった考慮は、どのようなものだったのでしょうか。【参考資料④】

(2) 戦略核兵器については、米ソ首脳は、2000 年までに弾道ミサイルの全廃を含む大幅削減に暫定的に合意します。この合意に対する外務省の見解およびその前提にあった考慮についてお聞かせください。【参考資料④】

(3) レイキャビク会談に関する首相官邸とのやりとりについて、お聞かせいただければ幸いです。中曽根首相の捉え方や意向が伝わってくることはございましたでしょうか。

(4) レイキャビク会談後、大使は、軍備管理・軍縮問題への日本の対応に関する問題提起を行われます【参考資料⑤】。これを行った背景、およびその影響についてお聞かせください。あわせて、86 年 12 月の欧州出張に関して印象に残っていることも伺えれば幸いです【参考資料⑥】。

※参考資料

- ③ 国連局軍縮課「ラウニー大使と柳谷次官の協議」1986 年 10 月 16 日（外交史料館、2017-0265 (1)）

- ④ 軍縮課「米ソ首脳会合における軍備管理問題（とりあえずのコメント）」1986年10月23日（外交史料館、2018-0763）
- ⑤ 軍縮課長「軍備管理・軍縮問題の今後の課題——包括的アプローチの必要性」1986年11月21日（外交史料館、2017-0265（1））
- ⑥ 軍縮課長「欧州出張報告」1986年12月20日（外交史料館、2017-0265（1））

3. 次に、レイキャビク後のINF交渉への日本の対応について伺います。

- (1) 87年2月、外務省内で日本の立場に関する検討が行われます。(イ)LRINFの「欧州0、アジア100」からの後退の可能性、(ロ)ソ連SS-20と米国LRINFの配備場所、(ハ)SRINFが重要事項と思われませんが、この検討の過程と内容について、詳しくお聞かせください。【参考資料⑦】
- (2) 87年3月以降、中曽根首相や後藤田官房長官へのINF問題に関するブリーフィングが、毎週ないし隔週のペースで行われました【参考資料⑧】。何かきっかけがあったのでしょうか。また、4月の首相訪米に向け、INFに関する諸資料も策定されます【参考資料⑨】。官邸へのブリーフィングで記憶や印象に残っていることがございましたら、お聞かせください。
- (3) 87年7月には、ゴルバチョフ書記長がいわゆる「グローバル・ダブル・ゼロ」を提示し、9月にはINFに関する基本合意が成立します。これは、基本的に日本にとって歓迎すべきことだったと理解してよろしいでしょうか。外務省は、この展開を予想していましたか。また、それを促した原因およびソ連側の動機は、どのようなものだったとお考えになりますか。
- (4) 7月以降、INF交渉の焦点は検証の問題に絞られますが、日本にとって重要だったのは、どのような点だったのでしょうか。あわせて、9月の基本合意や11月の条約調印に関して、ご記憶やご印象に残っていることがございましたら、ご教示ください。

※参考資料

- ⑦ 軍縮課「米ソ軍備管理交渉に対する我が国の対応に関する省内会議開催について」1987年2月12日（外交史料館、2019-1770）
- ⑧ 軍縮課・ソ連課「ソ連のINF分離提案（その1）」1987年3月4日、軍縮課「米ソ軍備管理交渉（INF協定ドラフト）」87年3月4日（外交史料館、2019-1773）
- ⑨ 中曽根首相訪米関係資料（1987年4月）（外交史料館、2019-1770）

4. 最後に、軍縮課長離任後の米ソ軍備管理・軍縮交渉および総括的なお考えについて伺わせていただきます。

(1) 大使は、87年11月から89年9月まで、宇野・三塚外務大臣秘書官を務められますが、外相レベルで日本がSTARTやD&S交渉に対応することはございましたでしょうか。また、日本にとって重要な点は、どこにあったとご記憶でしょうか。【参考資料⑩『外交青書』1988-89年度版】

(2) 抽象的な質問となりますが、大使は、80年代の米ソ軍備管理・軍縮交渉において、日本はいかなる存在だったとお考えになりますでしょうか。逆に、同交渉の日本への教訓はいかなるものだとお考えになりますか。

■参考：当時の主な出来事

1986年9月	NSTにおける米国の新提案（INF欧州100、アジア100）
1986年9月	宮本軍縮課長の訪米
1986年10月	NST第6ラウンド
1986年10月	レイキャビク首脳会談
1987年1月	中曽根首相の東欧歴訪
1987年1月	NST第7ラウンド
1987年2月	INFの他分野からの切り離しに関するソ連提案
1987年3月	米国によるINF協定草案の提示
1987年4月	NST第8ラウンド
1987年4月	米ソ外相会談
1987年4月	中曽根首相・倉成外相の訪米
1987年6月	ベネチア・サミット
1987年7月	ゴルバチョフによる「グローバル・ダブル・ゼロ」提案
1987年9月	INF基本合意（11月条約調印）
1988年11月	START・D&S交渉の休会
1989年6月	START・D&S交渉再開
1990年6月	START基本合意（91年7月調印）

■参考：外務省・国連局・軍縮関連局課の陣容

外務大臣	1982年11月～1986年7月	安倍晋太郎
	1986年7月～1987年11月	倉成正
外務事務次官	1985年1月～1987年6月	柳谷謙介
	1987年7月～1989年8月	村田良平
外務審議官	1985年8月～1987年3月	梁井新一
	1987年3月～1987年7月	村田良平
	1987年8月～1989年8月	栗山尚一
国連局長	1983年8月～1985年11月	山田中正
	1985年11月～1987年8月	中平立
	1987年8月～1989年11月	遠藤実

軍縮課

首席事務官 高松明 → 高田稔久 → 楠田かおる

課長補佐 高田稔久、棚木元、小畑正比呂、楠田かおる、松本好隆、渡辺正人、上田完二

北米局長	1984年7月～1985年11月	栗山尚一
	1985年11月～1988年1月	藤井宏昭
安保課長	1985年8月～1988年7月	岡本行夫
ソ連課長	1984年1月～1986年6月	野村一成
	1986年7月～1988年7月	茂田宏

在外公館の軍備管理・軍縮問題担当者

駐米大使館 折田正樹、斉藤泰雄、田村鞆利（防衛班）

軍縮代表部 小西正樹 → 沼田貞昭

■参考：米国の軍備管理・軍縮関連の担当者

NSC：ラウニー顧問、リンハード特別補佐官、クレーマー部員

国務省：ホームズ次官補（PM）、ディーン次官補代理（PM）、ホーズ次官補代理（PM）、ハレンベック参事官（PM）、テインビー副長官補佐官

国防総省：パール次官補（ISA）、ウォウカー次官補代理

ACDA：エメリー副長官、ノセンゾ戦略局次長

NST 交渉団：カンペルマン団長（兼防衛・宇宙担当代表）、ジーマン副団長、グリットマン代表（INF 担当）、タワー代表（戦略兵器担当）、ウッドワース次席代表（INF 担当）、レーマン次席代表（戦略兵器担当）、クーパー次席代表（防衛・宇宙担当）

■ レーガンとゴルバチョフ

吉田 本日もよろしく願います。1から4まで質問をつくらせていただきました。1の部分でレイキャビク首脳会談前夜のお話を伺って、2でレイキャビク会談そのもののお話をいただき、3でレイキャビク後の日本の対応について伺った後、4で軍縮課長離任後のお話をいただければと考えております。

まず1ですが、レイキャビク前夜のことについて伺いたいと思います。レイキャビクでの米ソ首脳会談が一九八六年一月一日から一二日に開催されますが、その前月の九月にアメリカ政府から日本政府に対し、「欧州部一〇〇、アジア部一〇〇」という形で米ソのLRINF (Long-Range Intermediate Nuclear Forces: 長射程中距離核戦力) の弾頭を制限する案の検討要請が入ります。この検討過程についてご記憶のことがございましたらお聞かせ下さい。よろしく願います。

宮本 オーラル・ヒストリーというチャンスを与えてもらってありがたかったのは、これまでは記憶の中で自分の過去をずっとたどっていたわけですが、こういう文書(参考資料)を出されて別の形で自分が何をやったのかをたどることができたことです。

これらの文書を見て感じるのは、レーガン (Ronald W. Reagan) 大統領は掛け値なしに核のない世界を信じていたということだと思います。彼は大変なタカ派、対ソ強硬派であり、オバマ (Barak H. Obama) とは全く違う。しかしオバマとは全く違う

観点から、彼も核のない世界が必要だと思っていたわけです。何度も説明してきたように、彼は「国民を盾にして国の安全を守る」ことが一国の指導者として許されるのか」という根本的疑問を持っていたと思います。国民のために尽くす、国民を守るのが合衆国大統領の責務だと信じている人からすると、国民を盾に差し出して国家の安全を担保する確証破壊戦略に対する本能的な嫌悪感があった。そこで「国民を盾にせずに国民を守る道を見つけろ」という指示になるわけです。大統領が決意すれば何ができるか、トランプ (Donald J. Trump) に見せつけられました。アメリカ合衆国大統領というのはそれぐらいの力を持っている。あの当時のアメリカ合衆国政府の人たちがやったのは、レーガンさんの信念、希望を最大限に酌みとりつつ実際の安全保障がリスクに侵されないようにするということです。「MAD (Mutual Assured Destruction: 相互確証破壊) の否定は軍事戦略上できません」という回答は、レーガン大統領の下で働いている人たちは出せないのです。彼らは、大統領がそう願う、そうすべきだと思ったことのための知恵を出したわけです。

ということ、我々はレイキャビクの米ソ首脳会談が心配になるわけです。このときソ連はゴルバチョフ (Mikhail Gorbachev) になっており、より巧妙な平和攻勢をかけてくる可能性がありました。ゴルバチョフは、今になって考えると単なる平和攻勢だけじゃなかったということなのでしょう。確かにあの当時ソ連の実態が大変なことになっていて、ゴルバチョフが出し

てくる提案は、プロパガンダの要素もあるけれども、軍拡競争からソ連を救い出すという意味もあったでしょうし、欧米との関係を改善して一息つきたいということでもあったでしょう。もう一回ソ連全体の立て直しを図ってみたいというのが、今考えると、当時のゴルバチョフにとっての最大の関心だったと思います。しかし、あの当時外から見ていると、そうはつきりとは分かりませんでした。「プロパガンダだな」と思いながら、「かなり思い切った手を打ってくるな」と感じていました。今になって思えば、ゴルバチョフがああいう形で和平提案をしてるのは、かなり本気だったのですね。

吉田 当時の大使は、必ずしも本気だとは見ていらっしやらなかったということですか。

宮本 そこまでは読めませんでした。ソ連の持つ体制的な制約から、ゴルバチョフがやれることには限界があると皆見ていました。他方、アメリカはレーガンの信念を尊重して「本当に核はなくすべきだ。攻撃兵器はなくすべきだ」と言い出し、いろいろな提案を考えてくる。それでレイキャビクのサミットを心配したわけです。

吉田 何が出てくるか分からない。

宮本 レーガンが自分の信念で、その場で「攻撃兵器ゼロ、いいじゃないか」と言い出しかねないわけです。その後、あれだけ中距離弾道ミサイルの撤廃に一生懸命だったヨーロッパが、このカテゴリーのミサイルが全廃されることが分かった途端に、次の心

配をし始めたでしょう。レーガンさんが一つの兵器システムを全廃させたなら、当然安全保障上の問題がたくさん出てくるわけです。「よく準備もせずに勝手なことを言い出さないでくれ!」というのが率直な気持ちでした。あの当時、レーガンさんがやりたがっていたINF (Intermediate Nuclear Forces: 中距離核戦力) での大きなブレークスルーは、彼の核廃絶の願望の流れにも沿っています。タカ派でありながら核廃絶。したがって、防衛兵器であるSDI (Strategic Defense Initiative: 戦略防衛構想) は、国民を守るためだし、非核兵器で対応可能だから良いということになる。その結果、戦略的な安定を損なうことになったとしても、レーガン大統領は「アイ・ドント・ケア。イツ・ユア・ジョブ!」ということですよ。

このことを踏まえて、皆さんの資料(参考資料①〜④)の中にあるように、アメリカの対日協議にどのように対応するかについて、我々の方針を決めました。その後の私のペーパー(参考資料⑤⑦)を見ると、どういうふうなINF問題について対応するか、しなければならぬかという考え方が、私の中で徐々に醸成されていったことが分かります。それが外務省の同僚たちとシェアされたということだと思います。すなわち、一方的に日本の主張ばかりしていれば、「これまではヨーロッパだけを心配していればよかったのに日本も文句を言い始めた」ということになり、レーガンさんが「何を言っているんだ」と思い始める可能性があるということですね。INFに関し、首席代表のグリットマン

(Maynard W. Gitman) 大使が「何が何でもやりたい」と思っているのではなくて、「やりたい」と思っているのはレーガンであり、その気持ちに棹差す印象を与えることについては注意を要するということです。現にアメリカ政府の中で、全部ではありませんが、せんけれども一部、レーガンの意向に沿って本気でやろうとしている人たちもいましたからね。したがって、アメリカ政府への対応については慎重にやる必要があります。

しかし、日本の抱えている問題に関してはきちつと手段を担保しておかなければなりません。INFの問題について、アジアに一〇〇残すというこの程度の変化球は、最終的にグローバル・ゼロを目指すということであれば、受けざるを得ないだろうということにしました。資料③のラウニー (Edward L. Rowny) の日本側への説明にもあるとおり、レイキャビクでゴルバチョフが「双方グローバル一〇〇、ソ連はアジア部に一〇〇、米国は欧州ゼロ、米国内に一〇〇」という提案をし、レーガンがそれを原則として受諾したということです。これに対し、同じ資料の次官の発言にもあるとおり、日本側は大幅な削減である点は評価しながらも、これはあくまでも暫定的合意だと捉え、グローバル・ゼロを追求し続けること、アジア部に残る一〇〇も「ソ連中央部」と呼びうる場所に移すこと、グローバル・ゼロの最終目標までのプロセスを明らかにすることを改めて要求しています。その前提で、対外的には米国の決定をサポートすることにしたわけです。米国が受諾したものを「ノー」と言って突き返すことはできません。

しかし日本の要求は出し続ける。トータルするとアメリカは日本の意見、要望にもよく配慮してくれていると思いますよ。米国に一〇〇置くということはアリユーション列島も含むわけで、ソ連アジア部をたたけるわけです。

■ レイキャビク会談前夜のINF交渉

吉田 最後の「欧州ゼロ」のお話はレイキャビクの結果ですかね。すみません、レイキャビクの話は後ほど改めて伺わせて下さい。

細かくなってしまうって恐縮なのですが、質問1のところはまだ欧州部にも一〇〇残るといふ提案でした。それがレイキャビクでは、欧州がゼロになってアジアだけが一〇〇になってしまいます。

宮本 このときは「欧州部一〇〇、アジア部一〇〇」だったので、日本として何の問題もありません。何度も繰り返して恐縮ですが、最後は日本国民が納得し、米国の拡大抑止の信頼性と日米安保体制への信頼が損なわれなければよいという判断でした。

吉田 一点気になったのは、八三年一月にアメリカが同じような案を出そうとしたときに、駐米大使館の一等書記官だった岡本（行夫）さんが「この案は飲めない」と突っぱねていらつしやることです。「もともとヨーロッパのほうが多くあるにもかかわらず弾頭の数が最終的にアジアと一緒になるというのでは、アジアのほうが削減量が少ないという解釈ができてしまう。これは日本にとって好ましくない」ということをおっしゃっています。この

時期になって受け入れたのは、なぜだったのでしょうか。

宮本 より厳格に考えれば日本の立場は岡本さんの言った立場ということになります。しかし、アメリカ側のINF交渉に対する姿勢の変化を考慮に入れる必要があります。アメリカが本気でまとめる姿勢を示したから、日本はSSI20をソ連中央部に移すのだったら二六五の弾頭までいいということまで了解したということです。

吉田 八六年二月ですね。

宮本 そこで一度、欧州ゼロであってもやむを得ないという判断となっていたわけです。だから、欧州一〇〇、アジア一〇〇だったら、文句言えないでしょう。

吉田 一回出した案が重要になるということですね。

宮本 結局、アメリカが本気でまとめる姿勢を示し、日米の間のすり合わせがやっと本格的にやれるようになってからの意思疎通と、それまでとは違うということでしょう。八三年頃、アメリカはどれほど本気で日本と相談する気があったのかどうかはよく分かりませんが。

吉田 その真剣に考えた結果の一〇〇とは違うということですね。

宮本 そういうことですね。資料①は何でしたかね。

吉田 資料①が、外務省の立場を決定してアメリカに出したものだと思います。

宮本 八六年九月一八日の松永（信雄）・ラウニー会談でアメリカ側から「グローバル二〇〇、アジア一〇〇、欧州一〇〇を提案

する」と言ってきたのに対する回答ですね。

吉田 ここで日本側としては問題ないという回答をしていますね。ただ、この松永・ラウニー会談の後ですが、1の(2)にあるように、松永大使から日本の立場が必ずしもはっきりしていない部分があるという電報が、一〇月三日付部内連絡の形で届いています（参考資料②）。

宮本 これを説明しておきますと、部内連絡は外務省内部の連絡です。このケースで言いますと、冒頭に「中平国連局長へ」とありますから、松永大使から中平（立）局長への連絡です。

吉田 事務方の間の連絡。

宮本 そうです。これは非公式文書です。だから、部内連絡と言ったときには普通は次官以下しか回しません。したがって、これは、日本政府の意思決定までのあくまでも参考のための意思疎通です。

吉田 これは大使からの意見具申とは違うということですね。

宮本 意見具申は「意見具申」と書きます。

吉田 意見具申はより正式度が高いのですね。

宮本 この部内連絡は、本省を困った立場に置くかもしれないので念のために注意喚起しておこうというものです。意見具申、それも駐米大使の意見具申は、大使の正式の見解として当然総理、外務大臣にご覧いただくものです。重みが違います。

吉田 松永大使は、そういうお考えから部内連絡という形でこの電報を送られたわけですね。

宮本 この部内連絡はもつと下のレベルでもやります。しかし、大使がおやりになると当然相手は次官か局長になります。大使の立場からすれば、米国から案が出されて本省にいちいち問い合わせしていたのでは、いざというときに間に合わないし、日頃の対応も不正確になる。だから、自分に腰だめの対応を予め送れということですよ。「一々相談しなくてもその範囲内で自分がやる」ということです。

吉田 松永大使が急がなければならぬと考えられたのは、やはりレイキャビクを前にして何か動くという雰囲気があったということですね。

宮本 そういうことです。

吉田 この松永大使からの部内連絡を受けて、本省で検討はなされたのでしょうか。実は、この部分は文書の空白になっているようで、まだ前後の展開がつかめていません。

宮本 もう一度読み直しても、極めてまともな指摘ですね。政府の最終方針を決めたかどうかは記憶にありませんが、常識的に考えて、既に触れた一〇月一六日に柳谷（謙介）次官がラウニー大使にお述べになった線が、日本政府の、一〇月三日も含めたあの頃の感触だったはずですよ。

吉田 政府としての方針は、まだ決まっていなかったのでしょうか。

宮本 我々の腰だめの感触はあったが、総理まで了解をとった方針はなかったというのが実情に近いでしょう。アメリカの案や

最終的な落ちどころが見えないものの対処方針の策定は不可能に近いですね。多くの不確定要素がある場合、原則的な立場以外のものはつくりにくい。ましてや最後は総理の了解を得ないと決められないものについては、先走りは難しい。だから松永大使も「部内連絡」にして本省の逃げ道をつくってくれたのでしょう。

正式に本省の意見を聞くときは「請訓」します。これが来ると本省は正式に回答しなければなりません。もしアメリカに厳しい訓令になると、ワシントンの大使館も困る。ところが、「部内連絡」ですと何らかの感触を伝えておけばそれで済みます。あの段階での回答はとても難しいですよ。だからしばらくした後、私の文章（一一月二一日付参考資料⑤）の中にそれらに対する回答が整理された形で出てくるでしょう。

吉田 少し後に出てきます。

宮本 しかし、一〇月三日の時点では、出ていないということですよ。しかし、松永さんが宿題を出したわけだから、軍縮課長はそれに答えられなければいけない。

吉田 非常に大きな問題ですね。

宮本 だから私は考えて答えを出したと思います。一〇月三日はそのプロセスにあったということですね。何か出していけば、それは総理決裁を必要としますから文書に残ります。

吉田 私の好奇心で細かくなって本当に恐縮ですけども、実は、一〇月三日に松永大使から部内連絡が来た後、一〇月六日に総理からレーガン大統領に宛てた書簡があるようなのです。でも、こ

これは発見されていません。しかし、この文書（追加資料）に「一〇月六日付レーガン大統領宛書簡にもられた中曽根総理の考え方」という言及があります。

宮本 そうであれば、総理まで決裁をとって、その時点での日本政府の考え方を伝えていたということになります。ただ私は、こういうのを一々記憶するのは苦手です。

吉田 そうですよ。何度も同じようなプロセスで上がっていますからね。

宮本 レーガンさんに直接駄目を押ししておかないと何するか分からないという不安もあり、松永大使の懸念を踏まえて、総理書簡となったのでしょうか。そこ（追加資料五ページ）の上に「点は」と書いてあり、それは「中曽根総理の考え方を反映したもの」と書いてあるでしょう。その「点」の上のところが、中曽根書簡に書いてあることだと思いますよ。

吉田 そうなりますね。

宮本 こういう内容のものを返事しているということです。

吉田 レイキャビクの前に、日本として飲める数字を一定程度提示していた可能性はありますか。

宮本 いや、それはなかったと思いますよ。今の資料（追加資料）に書かれていたようなことを中曽根さんは言っているのですね。検討して、中曽根さんが書簡という形でレーガンさんに駄目押しをしたということでしょう。しかし駄目押しの仕方は慎重を要しますよ。具体的数字で良い悪いというのは下策です。何度も申し

上げたとおり、抑止力は心理ゲームであり数字ではない。全体としてアメリカの日本を守るという意思が明確になれば良いのであって、ましてや合衆国大統領の手足を細かく縛ることなどできませんし、外交的にするべきでもありません。だから中曽根書簡の文言になるわけです。レーガンさんは何するか分からないので、注意喚起は改めてしておこうということでしょう。実際問題として、下でいくら言っても、レーガンさんが「分かりました」と現場で発言したらそれで決まる。現場で発言したものを否定できません。そういうことで、レーガン対策は実はとても大変だったので、中曽根書簡が出ていたとすれば、間違いなく中曽根さんが言ったという形でレーガンさんの頭の中にしみ込ませようとしたのでしょう。

吉田 外務省は、レーガン・マターに相当神経を使っていたということですね。

宮本 それを松永さんも心配されて、一定の範囲内で自分もやろうとされたということでしょう。指示がなくても自分の判断でおやりになる、松永大使はそういう立派な大使でしたよ。

吉田 中曽根書簡の趣旨は、アメリカにそこに収めさせるように、こちらから大まかなラインを示しておくということだった可能性が高いわけですね。

宮本 大きなラインが分かれば、松永さんだったらおやりになれる。しかし、総理の関心事項でもあり、慎重を要することも事実です。そこで一〇月六日の中曽根書簡を出して日本政府のあの時

点で可能な限りの明確なラインを出したのでしよう。

吉田 なるほど。この文書は見つけ次第、今伺った前提で検証してみます。

宮本 是非そうして下さい。たいしたことが書いてなかったら申し訳ないけど。

吉田 いえ、すごく重要なことが書いてある匂いがします。

まとまった文書は出てきていないのですが、ちょうどこの頃、九月に宮本大使が訪米されてNSCの担当官であるリンハード(Robert F. Linhard)とお会いされているようなのですけれども、ご記憶はございますか。

宮本 もう頻繁に訪米していましたので、一々については覚えていません。始終行っておかないと何が起こるか分からないし、日本の意見を注入し続ける必要もありました。

吉田 アメリカの動きを見ておくということですか。

宮本 そうです。外交というものは、今日言ったことが明日は変わり得る。それが政治の実態です。「今日こう言ってもらったから、もう安心だ」などと思っていたら、この世界では生きていきません。政治も外交も、やっているのは人であり、理屈だけではない。突然変わりうるのです。

吉田 ワシントンの空気を直に感じにくということですね。

宮本 感じにいかなきやいけないし、やっぱり直接言っておかないと。大使館もよくやってくれていましたが、直接肌で知りたいし、釘を刺しておきたい。私の言う現場主義であり、私のスタイ

ルかもしれない。

当時軍縮課は国連局にありましたから、局の予算と旅費を握っている右翼課長の天江(喜七郎)国連政策課長には大変世話になりました。よく旅費をつけてくれたと思います。軍縮課長のときには本当によく海外出張させてもらいました。

吉田 期間はどれぐらい行かれるのですか。

宮本 一週間とか、下手すると現地一泊の三日とか。とにかくアメリカに行つて帰ってくる。アメリカに三回行く間に一回ぐらいヨーロッパに行かせてもらいました。

吉田 内容とは関係ないのですが、大使はジェットラグを感じない方ですか。

宮本 感じますよ。

吉田 もろともせず。

宮本 もろともせずというか、若かったですからね。

岩間 当時の在米大使館は、何人ぐらいでINF問題に臨んでいたのでしょうか。

宮本 担当はいました。

吉田 折田さん、斎藤さんという方が、電報にはよく出てきますね。折田正樹大使。

宮本 そうそう、折田さんと斎藤泰雄さん。

岩間 政務班ですか。

宮本 政務班。折田さんが政務班長で、斎藤さんが軍備管理担当ということでしょう。

■ レイキャビク会談

吉田 レイキャビク会談に合わせて、外務省からアイルランドに人を送ったということを聞いたことがあります。

宮本 イギリスにある大使館から飛んでもらい、アメリカ側と随時コンタクトをとってもらいました。アメリカ側の通報を待っているのは対応が遅れ、リカバリーが難しくなるからです。一番近く、しつかりしたスタッフを持っているのが、ロンドンの大使館なので、そこから行ってもらったと思います。

吉田 何かそこで情報が入ってきたというご記憶はありますか。

宮本 いや、難しかったですね。というのは、普通は同じランクの相手としか接触できないし、相手のランクが下になればなるほど知らされていませんからね。

吉田 アメリカの側でも、知っている人が少ないということですね。

宮本 ランクは上でも首脳会談に出ていない人は知らない。アメリカでも、大変な数の人が大統領に同行しますが、首脳会談に同席できるのはごく少数ですよ。そうすると、何が起こったかというのは、アメリカ側も正確に分かっていなくて、レイキャビクのときの情報収集は大変だったという記憶ははっきりと残っています。そのときには我々がアツと驚くような話は届きませんでしたね。しかしその後、ヨーロッパはゼロになることを知る。

吉田 やはりびっくりされたところはあったのですか。

宮本 それは驚きました。「レーガンさん、やってくれたな」という感じですよ。ただ米国内に一〇〇残しますので、大きなところは担保されたという感じでした。

吉田 それでどうにか相殺できる。

宮本 これでどうにか説明がつくということです。

吉田 ヨーロッパ・ゼロというのはびっくりだったのですね。

宮本 ヨーロッパ自身が驚いたくらいですから。

吉田 そうですね、ヨーロッパ自身が驚いて嫌がっていた。

宮本 あなたが送ってくれた資料をもう一回読んでみると、そのことが分かります。ゼロになるのはロング・レンジINFであり、ヨーロッパが日々脅威にさらされているショート・レンジINFは残るわけです。驚いたのは我々だけじゃなかったということですよ。

吉田 世界中が驚いた。

宮本 ヨーロッパの連中は、自分たちで「ゼロ・ゼロ」と言っておきながらね。

吉田 そこが引つかかるのですよね。ヨーロッパはさんざん「ゼロ」と言っていたのに、ゼロが出た途端に態度が変わる。

宮本 まあ世界はこういうものだと思っただけです。一つの問題にこだわって、他が見えない。その問題が自分の思うとおりには解決しても、それが新たな問題を引き起こして、また大騒ぎする。その連続かもしれませんよ。くれぐれも、外交の現場がキッシンジャー (Henry A. Kissinger) みたいに何でも見通してや

られてきたとは思わないで下さい。実際はキツシンジャーが想定しないことが山ほど出てきたと思いますよ。でも全部、自分の計算の中で動いたというような書き方でしょう。

吉田 読んでいるほうは錯覚を起こしてしまいますね。

宮本 私たちも教科書的に真面目に読みましたが、だんだん現場を経験していくとそうではないと気づきます。

吉田 驚きが世界中にあふれたレイキャビク会談の直後にラウニー顧問が訪日しますが、ラウニー顧問は首脳会談には同席されていたのですか。

宮本 スモール・グループの会談に同席したかどうかは知りませんが、ラウニーは代表団の一員として行っています。

吉田 冒頭で少しお話しいただきましたが、ラウニー顧問が日本に來られた際のレイキャビクに関する対日説明でご記憶に残っていることはございますか。

宮本 特に大きく残っているものはありません。この記録（参考資料③）に書いてあるような話ですね。記録を読み直して、あの当時の外務省の幹部も含めて、よく軍備管理のことを勉強していたことが分かります。

吉田 大問題になっていたということですね。

宮本 我々がつくった資料をちゃんと参考にされて、立派に対応されていますね。軍備管理というのは、極めて専門性の高い複雑な、今読み返してもしっぴかり読まないと意味をとりにくいような世界なのに、次官をはじめ幹部はきちっと対応されている。

吉田 軍縮課から上がってきた文書を読んでいたということですね。

宮本 上がってきたものを読み、理解されている。

吉田 この問題では、ちよっとした数字でいろいろなことが変わったりますものね。この次官へのブリーフは軍縮課長が行われるのですか。

宮本 大体、軍縮課長がやります。課長不在で急ぐときは首席事務官や担当官がやることもある。外務省は、こういう所はリベラルですよ。総理、大臣に対しては局長がやり軍縮課長同席というのが基本パターンでしょう。

吉田 総理へのブリーフも同席されているのですね。

宮本 外務省のどの案件でも基本は担当課長同席です。

吉田 専門性が高いからということですか。

宮本 外務省というか、霞が関は「課長行政」と言われるほど、課長が重要な役割を果たすシステムになっています。課長は朝から晩まで自分の問題を考え猛烈に勉強する。スタッフもいる。だから課長の言うことが考え抜かれた案として通るのです。そうしない課長の意見が通るとは限りませんよ。軍備管理の場合、あの時代、日本に本当の専門家はいませんでした。そこで外国の専門家と議論して知識を充実させていく。兵器システムなどの問題については、前回も言ったように、全部上田（完二）さんのはじめ自衛隊から外務省に外向している人たちに助けてもらう。これを我々は寸暇を惜しんでやっているわけですから、局長が課長と同

じレベルで細部を理解するというのは不可能です。しかし幅広い知見は年次の高い局長のほうがお持ちなので、大きな方向性とか外交政策としての整合性とか、そういうことについては局長の判断が非常に大切になります。

■ INFに関する米ソ暫定合意

吉田 レイキャビク会談の後、ラウニー顧問が日本に来る前に、リンハード特別補佐官から電話が入ったということ、『読売新聞』が報じています（『読売新聞』一九八六年一月二日。実際には、同記事には、電話はレイキャビク会談後にリンハードがかけたものではなく、会談の最中に米国代表団の誰かがかけたものだったことが記されている）。

宮本 リンハードから誰に？

吉田 誰にというのは書いてないのですが、リンハードが外務省に電話をかけて、「欧州ゼロ、アジア一〇〇」という案でどうだ」ということを聞いたと。大使が受けたのかなと思ったのですが、大使はこの電話を覚えていらっしゃいますか。

宮本 覚えていません。

吉田 ラウニー顧問が日本に来た後に、冒頭で少しお話しただいた「欧州ゼロ、ソ連アジア部一〇〇、アメリカ国内一〇〇」という合意の検討が始まりますが、外務省としては、これは受けられないざるを得ないということだったという解釈でよろしいでしょうか。

か。

宮本 そうです。これは何度も申し上げますけど、今回の資料を見て私を感じたのは、やはりレーガン大統領の意向が強いということ、単にアメリカ政府に反対じゃなくて、レーガン大統領に反対ということになる。そのことの持っている重みというのは、くれぐれも理解していただきたいと思えますね。

国と国との外交というのは、形式的、抽象的な国と国との交渉やお付き合いではなくて、政府を構成する人と人との関係なのです。これらの人たちの思考様式、考え方に、国の利益という抽象的なものがぶら下がっています。国益を踏まえた国家の意思や意向というのは、具体的にはその個人を通じて発信されていくわけです。それで両国の関係というものがつくり上げられていく。それが実際の生きた外交で、生きた国と国との関係になる。

そうすると、レーガンさんが大統領で、中曽根さんが首相にいたということは、この二人の関係が両国関係に当然大きな影響を及ぼすわけです。アメリカは常に大統領の意向が強い影響を及ぼします。

吉田 しかも、今回は米ソ首脳会談の結果ですしね。

宮本 ええ。ですから、これは受けざるを得ない。受けざるを得ないというか、アメリカ一〇〇が残っているから、まだ生きる道もあるということ、です。

吉田 やはりこのアメリカ一〇〇が大きいのですね。

宮本 そうです。

吉田 このアメリカ一〇〇というのは日本側が提案したのかなと推量していたのですが、そんなことはないでしょうか。これはアメリカ側のアイデアですか。

宮本 例のアリューシアン列島の米軍基地に置くという案は、日本も言いましたが、アメリカも考えていました。

吉田 実は、先ほどご覧いただいた文書にあったレイキャビク前の中曽根書簡に、アメリカ一〇〇という内容が含まれていたのかなと考えておりました。

宮本 本人の記憶というのはいかに不正確かというのはいくらも同じ場を経験した別の人の語る状況と私の覚えているのと、えらく違ったりしたことがありますね。自分の記憶がいかに信用できないかというのが私の経験則ですが、私の直感では総理書簡で細かな提案はしないと思います。普通、やるとしても補足説明で書簡を届けた者がやる。ただ具体的な数字の交渉をした記憶はありません。前にも触れたとおり、アリューシアン列島の先のほうに空軍基地があつて、そこから打てば極東のソ連基地に届くとアメリカに言ったことはあります。

吉田 シエミヤという基地のようですね。

宮本 そこにパーシングIIを配備すれば届きますよと。我々が八六年からやってきたのは、後で出てくる私のペーパー（参考資料⑦）の中にもそのことが書いてありますけれども、軍事安全保障の観点からは、ソ連の日本に対する核攻撃は米ソ核戦争にならない限りはないという前提で考えていました。したがって、日本

側としては、どういうふうにして国内世論が日米安保体制への信頼を失わないようにするか、そこに焦点を当てて議論してました。アメリカに一〇〇置くことは、アリューシアンに置けば極東のソ連軍をたたくので、それを使ってソ連アジア部の一〇〇を撤去させることができる。今回の暫定合意は、アメリカが日本のことも十分考えて対応したのですよ、という説明を日本国民にできるということです。こういう説明が可能になるメリットは、著しく大きい。だからアメリカ一〇〇というのを我々は飲めたわけですよ。

吉田 やはりこのアメリカ一〇〇を重視されていたのですね。

宮本 アメリカ一〇〇、それでアリューシアン列島です。

吉田 文書にはアラスカというのがよく出てきますが、実際にはアリューシアン列島が念頭に置かれていたということですね。

宮本 そこからでないかとソ連に届きませんから。それで、そういう説明を国民にできるということです。だから、軍事安全保障上の問題ではない。このアイデアは私がアメリカに伝えた可能性があると思います。資料を丹念に調べてみて下さい。

吉田 後で出てくると思いますが、話し合われた形跡は見つかったのですが、そのものは見つからないのですよ。

宮本 出てきたら、これに上田完二の名前を付け加えてあげて下さい。彼の案ですから。

ただ他方、「それまでアメリカは一〇〇ずつとか言っていたのに、何でヨーロッパ・ゼロになったのか」という気持ちはあり

ましたね。

吉田 レイキャビク会談の中で急に変わりましたからね。

宮本 この点について、我々も最後まできちっとした説明をしてもらっていないと思います。おそらくレーガンさんがゼロにこだわったからでしょう。だからきちっとした説明をアメリカの当局もできない。その場にいた人が、「アジア一〇〇」なんて話が出てきたから「アメリカ一〇〇」とか何とか言っただけでまとめたのでしよう。

合六 レイキャビク首脳会談の会談録が公開されているのですが（Svetlana Savranskaya and Thomas Blanton, *The Last Superpower Summits: Conversations that Ended the Cold War* (Budapest: Central European University Press, 2016), Docs. 28-33）、確かにレーガン自身がゴルバチョフに対して「一〇〇・一〇〇」で受け入れ可能としているのですよね。

宮本 そうでしょう。

合六 ゴルバチョフは、「ソ連はイギリスとフランスの核兵器をこの交渉から排除するという大きな妥協をしているのだから、レーガンも同じように妥協の精神を見せろ」ということを迫った。でもレーガンは、「アジアでの現状凍結は認められない」とこたわった。そこでゴルバチョフは「そこは飲むが、アジアを削減する代わりにヨーロッパから完全撤去するのはどうだ」と提起して、レーガンが「よし」と言うことになったようなのです。ただし、大使がおっしゃるとおり、事前にアメリカの政権内でヨーロッ

パ・ゼロというのを詰めていたのか、それともそのときの思いつきで言ったのか分からないのです。ちなみに、このときの会談の出席者というのは、一日目の会談は首脳同士の対一対一です、通訳はいますけれども。二日目の妥協したところの会談には両外相が出ています。

宮本 シュルツも同席していたんですね。

合六 シュルツとシュワルナゼが出ています。ただそこに彼らは介入してなくて、完全にレーガン、ゴルバチョフの二人の世界で議論している。いろいろ話をして、最終的にゴルバチョフが、“I just summarize our position.”と、会談の最後に最終的なまとめみたいなものをレーガンに確認していて、そこでヨーロッパでは完全にすかかわりに、一〇〇発ずつアメリカ本土、ソ連のアジア部に置くという話になります。

宮本 アメリカ本土というのは、どういうふうに出てきたのですか？

合六 英語の表現としては、“the formula of 100 warheads on Soviet missiles in the Asian part of the USSR and 100 warheads on U.S. missiles in America”ですね。

吉田 それを、誰がどのように提案したのかはわかりませんか。

合六 今調べているのですけれども、ゴルバチョフが「アジアに一〇〇発」ということを言い続けて、最後の最後で、“in America”という表現が出ていますので、記録に残されていないところで何かあったのかなと推測されます。

宮本 それは二回目の会談でしょう。

合六 そうです。

宮本 シュルツがいたときですね。

合六 そうです。

宮本 会談記録に残らなくてもメモで渡すことができるのですよ。

合六 そうですよ。

吉田 口頭では話していないということですか。

宮本 おそらくこれは、シュルツの知恵だったかもしれませんがね。レーガンさんをあんまり過小評価してはいけなけれど。いずれにしても、アジアじゃなくてアメリカ国内に持って行ってくれたことで、日本は助かりましたよ。

合六 その点について、事前にどこまでアメリカの政権内で協議がなされていたのか。ソ連との間で数発残すと合意することになったら、アメリカに置こうというところまで決まっていたのかどうか。もう少し調べてみます。

■ INF交渉と東アジア諸国

岩間 この文書（参考資料③）の冒頭に、ラウニーさんが日本の後、韓国、中国に行き、別途エーデルマン（Kenneth J. Adelman）ACDA長官がオーストラリアに行くというのが出てきますけれども、リージョンの中の横のつながりというのはどの程度意識されていましたか。例えば韓国とかオーストラリアと、

こういうことを協議した記憶はございますか。

宮本 ほとんど意識していませんでした。それはG7の問題だと思っていましたから。それ以外と連携してやろうという意識はありませんでした。アメリカは何ととってもグローバル・パワーでありアジアのリーダーですから、重要な同盟国であるオーストラリアと韓国、それからソ連INFのアジアにおける最大のターゲットである中国と話をしておく必要があると思っただけでしょうね。**岩間** 朝鮮半島にはこの時代まだ戦術核が置いてあると思うので、その話も交渉の行方次第によっては出てきかねない感じがあつたのではないかと思います。この時期、そういうことは特に検討されていませんか。

宮本 その頃、韓国とどれくらい防衛問題について意見交換をしていたのか記憶にありません。日本自体の防衛力の整備というのが著しく遅れていて、それに邁進するのが当時の日本でしたし、ましてや核問題で韓国と話をする状況にはなかったのではないのでしょうか。私が軍縮課にいた間は、韓国との協議の必要性は感じませんでした。

岩間 当時アメリカは、どのくらいの距離感で中国にこういう問題についてインフォームしていたのでしょうか。

宮本 一九七二年に衝撃的なニクソン訪中があり、上海コミュニケも発出されたのですが、台湾問題もあり正式に国交を結んだのは一九七九年です。それ以後、良い関係が続いていました。そもそも米中は対ソ共同戦線を張るために一八〇度方向転換をしたわ

けです。アジア部に残るソ連の一〇〇のINFは、主として中国が対象です。常識的に考えて、中国がターゲットにされているわけですから、アメリカとしては中国と話をしておく必要があると判断したのでしょうか。

岩間 中国としては、この交渉はこういう形で決着して欲しいという考えはあったのでしょうか。

宮本 あまりなかったと思いますよ。つまり核も含めてソ連との戦力差があまりにありすぎて、INFが一〇〇残っても、大きな戦略環境の変化ではない。その頃、核戦略について真面目に考えていないとか、毛沢東の人民戦争論から次の戦略に移る段階ですから、まだまだ勉強不足の面もあったでしょう。人民戦争論は、人民の海の中に敵を引き込んでせん滅するということですから、核攻撃されても構わない。生き残った人民で戦うということですから、欧米とは話の次元が違うわけです。ソ連が核攻撃してくることを想定して重要施設を移したり、北京にもやたらと地下壕を掘ってソ連の核攻撃に備えていたりした跡がありました。核戦争についての覚悟はしていたようです。きちっとした核戦略が整ってきたのは、九〇年代、二〇〇〇年代ではないですか。私は、ドゴールの最低抑止戦略を中国も使っているなと思っていました。すなわち相手に対するミニマムな報復能力さえ持っていれば核の抑止は効くということと頭を整理して、それ以外のことにお金を使ってきたということですから、我々のように神経質に対応はしなかったと思います。最後は核戦争でやられても、ソ連の人口以

上の動員はできると思っているから、「負けないぞ」ということでしょう。

吉田 人民戦争論はすごい発想ですよ。

宮本 発想が全然違うのですね。国土は広いし、中国人はどこかで生き残る。

吉田 世界中にいますしね。

宮本 生き残ったら必ず仕返ししてやると考えているから、ヨーロッパとは違って、神経質に核の問題をフォローしていた気配はないですね。国内建設の問題で大忙しだったということもあります。ある意味であの当時、ソ連の核を恐れていなかった気もします。報復能力さえ持っていれば、「ソ連にその度胸があるか」という感じはありますよね。今の中国の軍人は我々の世界に引き寄せられて、精緻に考えるようになってきていますよ。それでこれまで心配もなかったことを心配し始める。抑止力は一人一人の感じ方の問題だと申し上げたでしょう。

吉田 心理の問題ですね。

宮本 中国はその世界に入ってきているわけです。

高橋 この問題をめぐって中国課と協議することなどはありましたか。

宮本 協議するというか、必要に応じ資料を回していましたね。当時前軍縮課長の榎田（邦彦）氏が中国課長をしていたということもあるでしょう。

吉田 中国つながりで質問が逸れてしまうのですけれども、米ソ

で軍備管理が進んで、今度は中国の核が日本をはじめ西側に与える脅威がどうなってくるかという検討は、当時はされていませんよね？

宮本 していません。

吉田 今の感覚と違いますよね。

宮本 中国は、軍事的にも経済的にも圧倒的に小さな存在でしたよ。しかも中国は国内第一、国内のことしか考えていない。米ソ交渉がどういふふう中国に跳ね返ってくるかということが分かって、初めて真剣に軍備管理について考えるということでしょう。それから、アジア部のINFに関しては、ソ連は抑止のために配備しているのであり攻撃のためではない、と中国は見越していたと思います。というのは、ソ連は逆に中国を含む極東戦線では常に通常兵器のインバランスを心配していましたからね。そのため戦略的安心材料がショート・レンジも含めたINFという側面は確かにありました。

■ 弾道ミサイル全廃の米ソ暫定合意

吉田 それでは質問票に戻らせていただき、2(2)について伺いたいと思います。戦略兵器に関して、レイキャビク会談でレーガン大統領とゴルバチョフ書記長は二〇〇〇年までに弾道ミサイルを全廃すると合意しました。既にお話しいただいている内容と重なってくると思うのですが、これに対して大使はどのようなお

考えになったか、伺えれば幸いです。

宮本 安全保障の専門家だったら、一つのカテゴリーの兵器を全廃するということの戦略的環境や安全保障に対する影響を当然考えます。それに対する担保がない段階でそうすることの意味合いを考えます。なぜなら欧州正面での通常兵器のソ連の優位性は変わらないわけですから。通常兵器におけるソ連の優位性を押さえ込んでソ連による先制攻撃を抑止するのがいわゆるエスカレーション・ラダー、柔軟反応戦略と言われているNATO戦略の根本ですからね。そのラダーの一つを全廃してしまうと、何をもってそれが担っていた役割を担保するかという問題が出てきます。安全保障の現場では、おそらくアメリカでも、核を廃絶したいというレーガンさんの気持ちは分かるけれども弾道ミサイルの全廃は実現しないだろうと考えていた人が圧倒的多数だったと思います。「いくら大統領が言ったって、安全保障の専門家がここまでギブアップするか。それはないだろう」というのはありましたよね。

吉田 国防総省などが抵抗している雰囲気というのはあったのでしょうか。

宮本 そうだと思いますし、その後のヨーロッパに行った私の所感(参考資料⑥)でも、やっぱりNATOが「冗談じゃない」という反応ですよ。MADという概念、それからエスカレーション・ラダーに代表される柔軟反応戦略、こういうものが戦後の米ソの戦略的な安定を生み、核戦争を抑止してきたわけです。これは間違いのない事実です。それをSDIは壊し始めるわけです。だ

から私たちはとても警戒した。レーガンさんが出すいろいろな案というものは、そういうものを壊していくのです。だから、それに代わるものがない限り、現実の安全保障に責任を持てる人間が「イエス」と言えますか。それをやめるといつても、それでは何で安全を担保するかということなのですよね。

吉田 M A D に代わるコンセプトについて、アメリカ側から何かアイデアが出てくるようなことはありませんでしたか。

宮本 ないです。S D I が完璧なものになって、防衛兵器が攻撃兵器を上回ることができれば安全になるということでしょうが、しかし、それはもう夢物語でしたね。まさに「スターウォーズ」をやり、宇宙を制圧しなければならぬわけです。これからは、米中がそういうような世界に入りかかっていますけどね。幾つかの問題について「それはないでしょう」と言うことはあっても、アメリカに対して全部「ノー」と言うのは、レーガン対策を考えると選択肢にはなりません。言い方には気をつけながら「結論を出すのはちょっと待ってください」というところですね。

吉田 外務省をはじめ日本政府内でも、M A D 崩壊への不安感とこのはあつたのでしょうか。

宮本 不安感がなかったといえれば嘘になりますが、そもそもアメリカのプロフェッショナルたちがそれに納得するはずはないという気持ちがありましたね。それにジョージ・シユルツがいましたし、この人がいざとなれば「大統領、ちょっとこれは」と言ってくれるだろうという安心感がありました。それから、果たしてソ

連が本当にやるのかという強い疑念がありました。ソ連が本気でやるうとしているのか、どこまでがプロパガンダなのかという話です。実現しないことを分かって揺さぶりかけている作戦かもしれない。皆「おおっ」と驚きましたけれども、あの当時、それが実現するとはおそらく誰も思わなかったのではないのでしょうか。それが実現することはないという感覚だったと思います。

■ レイキャビク会談と中曽根首相

吉田 では2の(3)、首脳レベルの関与ですね。先ほど一〇月六日の書簡を挙げさせていただきましたが、このレイキャビク会談に関して中曽根総理も何かしらの形で関与していた様子が窺えます。このレイキャビク会談に関して、首相官邸とのやりとりの中で印象に残っていることはありますか。首相の捉え方や意向が伝わってきたりすることはあつたのでしょうか。

宮本 定期的に次官が官邸に行っているいろいろな話をされます。それは単に外交案件だけではなく、人事とかも含まれます。そういうところではいろいろなやりとりがあつたかもしれませんが、私は必ずしも正確に覚えていません。

私の記憶では、中曽根総理は真面目に勉強されたという感じですね。我々は日本の安全保障を中核に据えて、日本としてこうするべきだということをいろいろ考えていましたから、中曽根総理のお考えは基本的に我々と同じだったということだと思います。日

本の安全を中心にいろいろ考えてアメリカに発信していくということは、まさに中曽根総理のお考えでもあります。我々はその方針を踏まえてやっていますから、我々が打ち出した結論についておかしいと言われた記憶はありません。

吉田 中曽根総理のオーラル・ヒストリー（『中曽根康弘が語る戦後日本外交』（新潮社、二〇一二年））を拜見すると、レイキヤビク会談に関する憤りのようなものが感じられるのですが、そういうものが伝わってくることはありませんか。中曽根総理は、ヨーロッパが優先されたという不公平感、日本が差別された思いがあったということをおっしゃっているのですが、当時こういうことが伝わってくるということはないか？

宮本 次官に対してどういう感触を漏らされたかは知りませんが、我々課長レベルのところには、その感触は伝わってきていません。おそらく中曽根総理の個人的な体験がそういう反応となったのでしょうか。中曽根さんの世代は、兵士としてアメリカと実際に戦い、アメリカ軍による占領という日本の国家始まって以来の外国人による国土の蹂躪というものを経験している。そしてああいうタイプの人ですから、そういう意味での屈辱感とかアメリカに対する思いは、間違いなく我々よりはるかに強いものをお持ちだと思います。だから、中曽根総理はそうお感じになったのでしょうか、僕らはそこまでは思いませんでした。ヨーロッパにはヨーロッパの厳しい事情もありましたし。

吉田 その点については、大使と総理の間に違いがあったという

ことですね。

宮本 違いがありましたね。ただ他方、先ほども言いましたが、なぜヨーロッパ・ゼロになったかについては、疑問を持っていましたね。

吉田 中曽根総理はINFのアラスカ配備によってアジアの〇〇を相殺するという考えも容認できなかったと回顧されているのですが、当時この点についてのやりとりがあったのでしょうか。

宮本 軍事的には完全に相殺はできないし、実際の配備にいろいろなテクニカルな困難が生じるということはありません。けれども、レーガンさんの進める方向で日本の立場を守る唯一の方法でもありました。中曽根さんはその当時も含めてそういうお気持ちだったかもしれません。私たちにはそういうふうには伝わってきていませんね。

吉田 やはり伝わってはいないのでね。

宮本 「それはやめる」という話はなかったし、私たちはこれで十分国内に説明がつくと思いましたが。

吉田 この辺の中曽根総理の証言が、若干ぶれているような感じもあります。

宮本 ぶれているというか、彼はやっぱりナショナリストですかね。ナショナリストとしては思い出すと腹が立つということでしょう。

吉田 そういうことかもしれませんね。

宮本 中曽根さんは国土だから、アメリカに差別されているとい

う感情があったのでしよう。

吉田 やはりその感覚があったのですね。

宮本 私たちの世代になると、アメリカに対するコンプレックスは少なくなるし、世代が若くなるほどそうでしょう。中曽根さんは肩を張ってアメリカに向き合う姿勢をとつても、やっぱりコンプレックスは強い気がします。あの世代はアメリカに徹底的に負かされた世代ですから。

吉田 それが感覚として残っている。

宮本 そう思いますよ。それでそういう反応になるのでしようが、少なくとも総理大臣の意向として、私たちに下りてきたことはありません。

吉田 直接的に政策につながっている可能性は必ずしも高くないということですか。

宮本 あのとときは自制しておられたのではないですか。

■ 軍縮課長の問題提起

吉田 レイキャビクについて、もう少しお話をいただきます。2（4）にある参考資料⑤、この文書も一級の史料だと感じていたのですが、宮本大使はレイキャビク後に軍備管理・軍縮問題への日本の対応に関する文書を作成されています。「包括的アプローチの必要性」という副題ですが、これを書かれた背景、そしてこの文書がもたらした影響についてご記憶のことをお聞かせいただ

ければ助かります。

宮本 これは、私の生まれつきの性格というか、ものの考え方がこうなのですね。全体が分からずに一つ一つがばらばらでやっていると不安でしょうがない。全体の中に位置づけてやることによってやつと落ち着く。ずっとこういう感じで仕事をしてきましたから。このとき、もうどれくらい経っていますかね、軍縮課長になつてから。

吉田 一年ちよつとですね、一年三カ月。

宮本 脂が乗り始めたころですよ。内容の濃い一年だったと思います。そこで考えてみたら、我々のINFに特化した、INFだけにのめり込んだ、そういう対応でいいのだろうかというふうに考え始めたということです。軍縮というのは、このインタビュースタートのときに申し上げましたけれども、日本の安全保障を支える重要な柱の一つに位置づけるべきだと考えていました。究極のところは日本の安全保障をどうするかということを考え続けて、そして軍縮をどうするかということではいけないという事なのです。

そうすると、このINF交渉をずっと見ていたときに、そことの関連がないことが心配になってきたわけです。要するに、INF交渉を切り離された形で議論をしていて、そこでINF交渉に関する一つの基本ポジションというのが出来上がって、その応用問題をやっているようにしか見えなかった。しかし、考えてみればINFというのはそういうものではない。アメリカの大きな

核戦略、大きな国防戦略の中にあるものですね。ところが、レーガンのああいうレイキャビクのドタバタがあつて、アメリカの大きな戦略が揺るがされ始めたのです。これまできちっとした安全保障戦略があつて、それに基づいて米ソの相互抑止が効いているという戦略的な、ある意味では安定した世界が壊され始めた。そして、ゴルバチョフとレーガンという二人のスタープレーヤーを眺めてみると、何が起るかわからない。ゴルバチョフも大胆にいろいろなことをやり始める。レーガンはこういう人でしょう。そうなっていくと、いろいろなことがこれから変わっていくという想定で考えなければいけないだろうということ、あえてこういうのを書いて省内に配布しました。私の意見として総理秘書官まで送ったはずですが。

ただ官僚機構ですから、すつとは進まない。ましてや一課長が言ったぐらいでそうはならない。人生をこれだけやってきてはつきりしたのですが、大体私は常に早過ぎる。私が気づいたときには、他の人はまだその気になつてくれないのです。でも、ごく少数ですが、支持してくれた人はいました。

吉田 省としては動かなかった？

宮本 動きませんね。しかし少しずつは動く。今は防衛省がこれだけ軍備管理・軍縮に関心を持つようになりましたし、彼らは彼らの意見を言うようになりました。それはもう大きな変化です。

吉田 この文書にも、「防衛庁の関与は、最早、時間の問題」だとありますね。

宮本 あの当時の防衛庁には、それを専門にやっている人、部課がないわけです。組織としてどこかの課に聞けばコメントがちゃんと返つて来るといふ体制じゃない。防衛庁も我々がやっていることを当然知っていて、敢えてクレームをつけてこなかった。だから、こういういろいろな問題を政府全体で総合的に考えて、我々の安全保障政策をやるべきだと思つたわけです。

長い目で見れば――あの当時は室でしたが――安全保障政策室ができた。それ以前は日本の安全保障全体を安保課が考えていたのです。補佐的に軍備管理の面を軍縮課がやっていただけだった。そうすると、安全保障条約を云々するのが安保課ですから、それが全体の安全保障を担当するというのは建てつけとしておかしいということ、安全保障政策室ができて、それがそのうち総合外交政策局をつくらなければいけないという形に収斂した。

今は内閣に国家安全保障局ができて前よりは体制は強化されてきています。こういう問題はおそらく今は内閣の安全保障局がもっと関与してくると思えますから、そういう意味ではまさに総合的に通常兵器戦略と密接不可分のものとして核戦略の問題を考へることができるようになったということになります。これから中国の軍事的拡大を抑止するのは、最後は核戦略になってきます。通常兵力で中国が優位になってくると、昔のヨーロッパ戦域と似たような状況がアジアに出現するわけです。そうすると、アメリカの考えることは核抑止ですし、中国に対する前方配備としてパーシングIIのようなものを日本に配備しろと言ってくる。そう

いうふうな全ての問題が安全保障と密接不可分の関係にあるので、そういうものをトータルに掘り下げて真剣に考えるべしというのがあの当時の私の意見でしたし、今もそうです。

吉田 この文書の中では、トータルに考える部署を外務省内に設置したほうが良いということも書かれています。ひとまず梁井（新一）外務審議官のところで全体を調整すべきというように書かれています。これは何か意図があったのですか。

宮本 新たな組織をつくるには膨大な時間とエネルギーがかかります。しかし現実には待つてくれません。そこでまずアドホックに意見調整をする場をつくったかどうかという提案です。これが実現した記憶はありません。すぐに、どこが事務局を引き受けるかといった権限争いが始まる。

吉田 事務局としての能力は梁井外審のところにはなかったのですか。

宮本 梁井外審には秘書が二人いるだけだから、どこかの課が事務局を務めなければいけません。事務局は権限を持ちます。そこで、その事務局をどこに置くかでまたもめる。しかし実際、そこまで行った記憶はありません。

吉田 梁井外審のところだと大使がお考えになったのは、何か特別な意図があったのですか。

宮本 これは政務担当外務審議官だからです。局長はそれぞれの課の利益を反映しますから、全体を俯瞰するのは外務審議官以上でないといけません。政務担当の外務審議官が梁井さんですから、

我々の問題は梁井さんのところに行くのが良いだろうという判断です。

吉田 この大使の文書の中で私が非常に興味をそそられたのは、ソ連の行動の原理はプロパガンダにあるという点でした。これがおそらく文書全体を包む一つのパスpekティブなのだろうなと拝見したのですが、やはり当時大使はそういう感覚をお持ちだったということでしょうか。

宮本 ソ連課を三年近く経験させてもらって、私なりのソ連に対する見方というのが形づくられているわけです。私自身、現実のソ連に直面したわけです。大韓航空機撃墜事件もありましたし、外務省員がKGBの魔の手にかかるというようなことも現実起こっているわけです。ですから、ソ連が言っていることとやっていることがいかに違うかということも、よく知っています。そういうのを踏まえて私のソ連認識があつて、同時にゴルバチョフを取り巻く国内の状況についても理解するようにしていたということです。ソ連課をやらせてもらったおかげで、こういう対ソ分析ができたということです。

吉田 完全な「もし」論ですが、もし大使がソ連課に行かれない形で軍縮課長に就かれていたら、対応が変わっていた可能性はあります。

宮本 対応が変わっているかどうかは分かりませんが、分析の深みがここまでいかなかったと思います。一点付け加えておくべきは、こういう対ソ認識は特殊なものではなく、欧米の主流の見方

でもあったということです。そういうことも加味すると、おそらく、そんなに大きな結論の違いにはならなかったと思います。

後先になって申し訳ないのですが、あなたが準備してくれた質問票にある資料⑨の終わりのほうに発電案があって、そこに佐藤雄さんのコメントがあるでしょう。これで発電がストップしました。

吉田 とりやめたのですね。

宮本 やめました。私がアメリカの経験が浅いから、佐藤さんのこの考え方にたどり着かなかった。

吉田 アメリカの発言を規定してしまうようなことは望ましくないとこの考え方ですね。

宮本 私がアメリカを徹底的に勉強してアメリカをよく知っていたら、初めから佐藤さんみたいに考えたでしょう。

吉田 もう一点、大使が書かれた文書に関して伺いたいと思ったのが、このままいくと弾道ミサイルも全廃されるという箇所です。そのままの引用ですが、「我が国の安全保障に対するインプリケーションについての検討が迫られている」と記されています。次の質問に出てくる欧州出張の際には、ヨーロッパ諸国はアメリカが弾道ミサイル・ゼロということを言い出した時点で信頼性は下がっていると考えている、と書き残されています。日本では、こういうった考え方は出てきませんでしたか。

宮本 信頼性が下がっているというか、信頼性を判断する専門家集団がグループとして日本に存在しなかったというのが実態でし

よう。やはりアメリカにお任せの部分があった。ヨーロッパは、圧倒的に優勢なワルシャワ条約機構軍がいる中でソ連と対峙してきた。その中で彼らは必死になって核問題を含む安全保障のことを考え続けた。当然それはヨーロッパにとって極めて重要な課題であり、優秀な研究者もたくさん参入して、ヨーロッパの戦略研究を非常に高い水準に押し上げていました。アメリカも高かったですけど、ヨーロッパも高かったですよ。こういう専門家集団からすると、これはあり得ないことです。日本には外務省を含め、それほどの専門家集団はいなかったということです。基本戦略の信頼性云々の問題になかなかなくてこない。

■ レイキャビク会談後の欧州出張

吉田 長くなってしまっているのですが、2（4）の最後のところをお願いします。レイキャビク後に欧州出張があって、大使は長い報告を書かれています（参考資料⑥）。この出張の内容も非常に面白いところだと拝見していたのですが、ご記憶の範囲で伺えば幸いです。

宮本 アメリカに行ったときもそうですし、ヨーロッパもそうですが、私にとっては勉強の旅ですよ。世界の一流の有識者と出会えたときの充実感はたまりませんでしたね。

吉田 現地での議論はどのようなものでしたか。

宮本 具体的な議論はよく覚えていません。覚えているのは、例

えば最後のページをご覧くださいと、イギリスでクインラン (Michael Quinlan) 労働省次官と会っているでしょう。彼は佐藤行雄さんの友人で、NATOのダブル・トラック・ディシジョンのときの国防副次官で、そのコンセプトから実施までNATOで非常に影響を及ぼした戦略家です。佐藤さんに「今度イギリスに行きます」と言うと、「クインランに会え」とおっしゃる。

「次官が私に会ってくださいませんか」と言ったら「佐藤に言われたと言つて会つてこい」ということで面談が実現しました。あの当時、サッチャー (Margaret Thatcher) 首相官邸が各省の次官人事を全部牛耳つていて、クインランさんはこのとき労働次官をやつていました。イギリスでは次官は組織のマナージャーであり、政策はやらないということ、どこにでも行かされるのですね。ドイツだけは課長にしか会えませんでした。本当にドイツは日本的なところでね。メモを準備してそのとおりに言わないと気が済まないというところもある。ヨーロッパでこういう人たちに会うとホッとしますけどね。

いずれにしても、これはもう途中から私のやり方になりましたけれども、覚えていることだけをこういう形で書き残すことにしました。一対一でやるとき以外は、誰かが公式の記録をとつてくれたりしますしね。自分のメモ的な記録としては、一晩寝て頭に残っていないことは重要なことではないという風に割り切りました。重要だと自分が思うことだけを書けばいいということ、それからこういう出張報告のパターンにしました。私の頭の中で

濾過されますから、整理されている。何がポイントかということとその報告の中に浮き出てきます。課長以上の報告はそういうことでいいだろうということ、こういう形にしました。あのときヨーロッパではアメリカとは別の次元の議論がされていて、ヨーロッパの軍備管理、安全保障に関するものはやっぱり違うと思われました。日本と桁違いによく勉強してよく考え抜いているというのを、身につまされて感じましたね。

吉田 この訪欧中のやりとりの中で面白い点は何個もあったのですが、そのうちの一つにキャリントン (Lord Carrington) NATO事務総長から、「今回のレイキャビクの潜在合意は日本にとって面白くないものだっただろう」と言われたということがあります。

宮本 それはそうでしょう。やっぱりアジア部の一〇〇が残りましたから。

吉田 本音のところ、面白くないのですか。

宮本 それはそうですよ。既に述べましたとおり、アジア部の一〇〇を相殺する手段も担保されているので、アメリカとの関係で抑制された姿勢を表明することにしましたが、はしやぐような結果でないのは一目瞭然でしょう。

吉田 ちなみに、西ドイツは国防省の中にも軍縮課というのがあ

るのですね。
宮本 あります。ちゃんと正面から国防省も軍備管理問題をやるのです。NATOでも、軍事委員会議長のアルテンブルク

(Wolfgang Altenburg) ちゃんをよく会ってくれたと思いますね。

合六 八〇年代初頭は、日本がNATOに非公式に接近し、安全保障問題についても話し始めようとした時期ですよね。

宮本 まさにINFを中心とした戦略問題が外務省の中でも非常に重要なテーマになってきて、関係する課の人たちはこの問題を勉強しなければいけないようになったわけです。そういうプロセスの中で、いかにNATOが重要な役割を果たしているかを——日独、日仏、日英のバイラテラルな協議も必要ですが、NATOの持っている圧倒的な重要性、個別国家を超えた重要性というもの——我々が理解し始めたということです。それで八六年一二月の倉成（正）外相のNATO本部訪問につながっていくということになると思います。それまでは、ごく一部の人たちはNATOの重要性を分かっていたと思いますが、組織としてそういうことになり、外務大臣も訪問すべきだという雰囲気になるのは、一連の軍備管理問題に巻き込まれたというか、この問題を我々が考えさせられたということが影響していると思います。

合六 ありがとうございます。ちなみに大使、この本 (Tanya Ogilvie-White, *On Nuclear Deterrence: The Correspondence of Sir Michael Quinlan* (London: Routledge, 2011)) はクインラン氏の書簡やインタビューをまとめたものなのですよ。核について彼がいろいろしたためたものとかが含まれている。

宮本 そうですね。

岩間 イギリスでも、クインランはすごく尊敬されていたみたい

ですね。

宮本 大変な戦略家なのに気さくな方でしたね。

合六 気さくな方だったんですね。

宮本 ええ、非常に気さくな人で、場所は労働省ですから、労働省と関係ない話をするので秘書官も同席しておらず、おかげで私とイギリス大使館の人と三人で話ができました。

■ レイキャビク後のINF交渉に関する外務省の検討

吉田 では、3番ですね。レイキャビク後の日本のINF交渉への対応について伺っていきたいと思います。今回、INF交渉はレイキャビク後も極めて重要だということに気がついたのですが、ひとまず大使はじめ外務省内での検討について伺いたいと思います。(1)の部分になりますがお送りした資料(参考資料⑦)によると、八七年二月に四〇五名の課長による会議が開催されたようです。私が勝手に読み解いてみたのですが、(イ)(ロ)(ハ)の三点が重要なのかなと思いました。それぞれLRINFとSS-20、アメリカのINFの配備場所、SRINF (Short-Range Intermediate Nuclear Forces: 短射程中距離核戦力)かと思えます。この検討についてご記憶のことをお聞かせ下さい。**宮本** 細かなことは覚えていません。読み返しても、書いてある以上のことは思い出せませんね。こういう感じで、まず課長レベルで議論するわけです。漫然と議論しても意味がないので、いわ

ゆるたたき台というものをつくるのです。ここにあるのが軍縮課作成のたたき台で、一回省内できちんと議論しておく必要があるということ、各課長に来てもらったということでしょう。

吉田 これは討論のための会議ということですね。

宮本 形式的ではなく中身を議論する会議ですから、総務課長が入るわけです。決裁書の場合は総務課長は入らない（宮本注…資料⑧の文書から「決裁書」のひな形が分かる。主管は国連局であり、決裁のラインはすぐに官房長以上となる。その他はすべて「協議先」であり、意見を言うことができるが、最後は主管局の意見で決まる。資料⑧の場合は、おそらく軍縮課長の判断で、官房長以上の決裁も省いている。北米一課長や安保課長も協議の欄から消して外しているのは、この件について両課長と既に明確な意思の一致があり、急いでいるので省いたということであろう）。

吉田 この会議の内容なんて、覚えてらっしゃいますか。

宮本 覚えていませんね。

吉田 この軍縮課のペーパーに異論が生じた可能性はありますか

宮本 その記憶ありません。恐らく大体こういうところだろう、ということ、会議は終わったと思いますよ

吉田 大筋で問題なし。

宮本 新しい問題を議論しなければいけなくなったということ、す。レイキャビク後の新しい局面に入り、先ほどの私のペーパー（参考資料⑤）に書いたようにINF以外のものも含めていろいろな問題を勉強しなければいけないということなので、一回皆で

議論し直す必要があると判断したのだと思います。

吉田 この文書の中に、大使がご記憶にあるとおっしゃっていたアラスカ配備、アリューシャン配備の話が少しだけ載っています。ページ数が書いてないのですが、「その1—LRINF」の三ページから四ページにかけてですね。四ページ目三行目で「今次日米軍備管理・軍縮協議において、米側より米INFをアリューシャン列島の先端シエミヤ基地に配備した場合にはソ連の四〇〇の目標を叩くことが可能、との説明がなされた」と。

宮本 これまでの日米のやりとりを踏まえて、アメリカ側がそういう説明をしたということでしょう。

吉田 これが十分役に立つことが示されたということですよ。

宮本 何度も言ったように、我々のオペレーションの最大の関心事項は、日米安保体制の信頼性の護持にありました。ヨーロッパで起こったようなアメリカの拡大抑止に対する不信感が生じないようしなければならぬというのが、そもその出発点です。

「アメリカは日本を軽視してはいない。だから日米安保体制は日本の安全をしっかりと保障しているのですよ」と国民を納得させるというのが、我々にとつて一番大事なポイントでした。「四〇〇であろうと一〇〇であろうと、アリューシャン列島も含めたから米本土からソ連をたたける。だから最後はヨーロッパと同じようにゼロにできますよ」という説明ができれば、当座の問題はクリアするわけです。もちろん、ソ連のアジア部に配備されたINF一〇〇基がかなりの部分が中国向けであるとしても、それがどの

ような安全保障上の役割を果たし、日本の安全保障にどのような関係してくるのかという、その次の検討課題もありました。しかし、対世論、日米安全保障体制のクレディビリティをいかにして保持していくかが、我々の当面の最大の関心事であったことは間違ありません。

吉田 この提案をいつ頃されたか、覚えていらっしゃいますか。

宮本 何度もアメリカに行っているし、いつかは覚えていません。

岩間 これは、将来の交渉の梃子にするために置くというような文脈ですから、いわば「アジア版ダブル・トラック・デイシジョン」という感じですよ。その割にはすらすらと出てきていますね。

吉田 これはすごく重要ですね。

宮本 これが僕らにとっても精神的な安心感を与えていたことは間違いないですね。これは上田さんがコンパスを使って探し出したと思いますよ。

吉田 半径何キロと。

宮本 「届きますよ」と彼が言ったことを覚えていますからね。

合六 吉田さん、「今次軍備管理・軍縮協議」というのは特定されていのですか。

吉田 いや、この協議に関する文書が見つかってなくて、まだ全然分かってないですよ。

合六 レイキャビクの後かどうかも分からない？

吉田 分からないです。

宮本 このペーパーは二月？

吉田 八七年二月です。

宮本 こういう動いている案件のときに大昔の話に触れたりはしませんから、レイキャビクの後だと想定して良いでしょう。僕らが心配したのは、ヨーロッパがゼロになってアジアが残ったときに、そのアジアをゼロにするために何が梃子になるかですね。それに三沢の空軍戦力が使われると大変なことになる。日本の国防に直接結びつき得る。だからアメリカ本土のINFは特に重要になるし、そういうことは折に触れて向こうに言っていたと思いますよ。この日米軍縮協議の開催時期は軍縮課で調べてもらえば分かるのではないですか。

吉田 これから公開されるファイルも若干あるので、そこに含まれている可能性はありますね（この日米軍備管理・軍縮協議は八七年一月にワシントンで開催された。同協議については、本プロジェクトの『沼田貞昭オーラル・ヒストリー』（政策研究大学院大学、二〇二二年）二八一〜二八三ページに記述がある）。

宮本 そういう場に出した可能性もあるし、その前に非公式に伝えている可能性もあります。日本政府の正式の提案というのではなく、担当者同士の非公式のすり合わせや意見交換というのは、相当頻繁かつ率直にやっていました。ポジション・ペーパーがあつて訓令を執行するだけが外交じゃないわけです。それ以外に、担当者同士でいろいろな意見交換をしている。意見交換することによってお互いにプラスになるわけです。相手がこう考えている、こういうふうにするとして。そういうことを予め知り、そ

れを踏まえた対応を日本の中で考えておくことができるわけです。アメリカのほうも日本の考え方を知っておけば、日本のことを踏まえたものを担当の、起案する人が初めから入れておくことができます。ですから、担当者同士の日頃の接触というのは実は非常に大事です。その報告電は必ずワシントンから打ち込んでいますので、全て詳細に開示されれば、そういうところが分かると思います。

吉田 これは見たいな。

宮本 そういうときに日本案をぶつけている可能性が出てきますね。何度も言いますが、著作権は上田さんにありますからね。

岩間 検索すると、大韓航空機事件との関係でシエミヤのリーダーが引つかかってきますね。もしかすると、その頃のことを上田さんの脳裏にあったのかもしれないですね。

宮本 よく分かりません。ただ、寒風吹きすさぶ気候的には大変厳しい場所らしくて、リンハードなどは「あんなところ、置いてもいいけど俺は行かないぞ」と言っていました。嵐が吹きすさび大波が打ち寄せるアリューシャン列島のえらい島らしいですよ。

吉田 寒い上に何も無い。

宮本 何もないし、娯楽ゼロ。

吉田 耐えられないような環境ですね。

宮本 しかし、彼らはいざとなれば、いつ発射のボタンを押すかを考え、ちゃんと押すでしょう。

岩間 上田完二さんは空将までなられているのですね。

宮本 そう。空将までなりました。

岩間 自衛隊幹部学校長が最後ですかね。

宮本 本当に頭の良い人でしたね。

吉田 この会議では、もうひとつ重要なペーパーが提出されています。ショート・レンジのINF、SRINFに関するペーパーですが、この問題に関して気をつけるべきだというふうにお考えになった点は、どんなものだったのでしょうか。

宮本 これはヨーロッパに非常に大きな影響を及ぼしますからね。したがって、全体にも波及するということで、我々も考慮しておかないといけないということです。

吉田 日本の北半分が引つかかるといふ記述がありますね。

宮本 何度も言いましたように、基本は日本国民のパーセプションの問題なのです。だから、ヨーロッパとの対比が重要になる。アジアに残ってもヨーロッパに残っていれば比較の問題、パーセプションの問題は出てきません。戦略的には、ソ連の核はアメリカの核で抑止するということであり、長短は問いません。SRINFであろうとアメリカの核が抑止するという前提に立っています。またアジア戦域では通常兵器において我々が優位でしたから、ヨーロッパのような問題は起こりません。だからアメリカの拡大抑止の信頼性の問題さえ担保されればいいということで、あそこまでこだわったということです。ヨーロッパは、ロング・レンジのINFだけではなく、SRINFに本当に危機感を持っていました。それに触発されて、日本としても、これをどうするか

ということについてちゃんと考えておかなければいけないという意識はありましたね。パーセプションの問題としてLRINFと同じ問題が起こりうるということです。

吉田 欧州での懸念の高まりがきっかけだったということですか。
宮本 これがきっかけでした。それで「スリンフ」という呼び方をするというのをそのときやつと学んで、記録の中にも書いていたでしょう。

吉田 そうですね。ちなみに、LRINFのほうは「ルリンフ」と呼ぶのですか。

宮本 いや、これは呼んでなかったですよ。

吉田 そのまま「LRINF」と読むのですね。

宮本 「ルリンフ」とは言っていなかったですね。何でああいうふうに書いたかというところ、これから意見交換する人がいるでしょう。そのときに知っておいたほうが良いと思っただけからです。

■ 官邸へのブリーフィングと中曽根訪米

吉田 さて、軍縮課の仕事はペーパーの起草だけではないというのがよく分かるのですが、この時期から毎週に近いペースで総理大臣や官房長官にブリーフが入っています（参考資料⑧）。これは、何かきっかけがあったのでしょうか。一九八七年三月四日が最初の日付となっていて、その後毎週のように総理ブリーフ、官房長官ブリーフが入っているようです。

宮本 動きが早まったということですよ。

吉田 INF交渉の動きに合わせて、こちらもペースを上げたということですか。

宮本 正確には覚えていませんが、相手がゴルバチョフでしょう。ゴルバチョフが動き始めた可能性はあります（宮本注・資料⑨の中の「八七年四月二四日付総理訪米用資料」の「最近の主要な動き」に、ゴルバチョフの頻繁な動きが記載されている）。また八七年の四月末から五月初めにかけて中曽根総理の訪米が行われていますし、八七年六月にはG7ベニス・サミットも行われていますね。この問題が必ず出たはずですよ。

吉田 だからこそ、総理にも上げておいたほうが良いと。

宮本 上げておかなきゃいけないということですよ。

吉田 こういふときは、総理のほうから「上げてこい」と言うこともあるのですか。

宮本 言う場合もありますし、我々のほうから上げる場合もあります。それはそのときの状況で違ってきますけれども、これは総理のお耳に入れておいた方が良くということになれば、それはそうしますし、総理のほうから「あれはどうなっているんだ」ということがあったときにもやります。

吉田 官房長官は当時、後藤田（正晴）官房長官でしたね。

宮本 見事に霞が関を押さえておられましたよ。

吉田 大使は、総理へのブリーフはどれも担当されたのですか。

宮本 普通は総理には局長がやります。局長がいて担当課長が同

席というのがパターンでしたね。

吉田 首相とか官房長官とのやりとりで、何か問題が生じることはありませんか。

宮本 特にありませんでした。少なくとも記憶していません。

吉田 この首相ブリーフと関連して、八七年四月に中曽根総理が訪米されますが、その際に軍縮課がかなり詳細な発言要領をついています（参考資料⑨）。先ほど触れられた佐藤総務課長からのコメントつきのもも含まれていますけれども、この訪米について何か印象に残っていることはございますか。

宮本 これももしかしたら、例のINFに関するサミットじゃない？

吉田 いえ、武田さんが教えてくれたのですが、あれは八五年のようですね。八五年一〇月にニューヨークで特別サミットがありました。

宮本 八五年ですか。八七年の場合は、中曽根さんにはこういう形で言ってもらおうということ準備したのだと思いますが、特に記憶には残っていません。

吉田 先ほどの佐藤課長からのコメントがついていた文書ですが、あれはどういう経緯で作成されたのでしょうか。やはりレーガン大統領の発言に対する一種の不安感があったから、一定程度こちらに配慮したことを言ってもらおうようにしておいたほうが良いというご判断だったのでしょうか。

宮本 ここで冒頭に書いているように、グローバル・ゼロを目標

としており、これは何が何でも担保したいし、少なくとも新聞応答要領にだけは入れるという手を考えたけれども、佐藤さんは不適切だと判断されたわけです。

吉田 新聞応答要領に入れる許可をアメリカ側から得ておきたいということですね。

宮本 レーガンさんの対応に確信がもてないので、こういう手を考えたということですね。日中では、こういうやりとりの事前すり合わせというのは当たり前で、両国首脳も準備された発言原稿をそのまま読んでいく。そこで首脳の発言にないものでも双方の国内対策上必要なものはプレス・ブリーフで付け加えることをお互いに了解し合うわけです。私は、そういう意味でちょっと早とちりしたのでしょうか。日米関係のやり方と違ったということかもしれません。

グローバル・ゼロにレーガンさんが言及しない、それが確約されない。そうすると、やはりアジアにはINFが置きっ放しということになります。いろいろな人が勉強し始め、アメリカの一〇〇だけではアジアの一〇〇は削減できない可能性があることが分かってくる。そうすると「日本は置いていかれた」という日本の国民意識となり、日米安保体制に響いていきます。そういう認識に立って、最終的にはグローバル・ゼロだということだけはおききたいということだったのです。

吉田 これは極めて詳細な発言要領ですね。この時期にINF交渉の動きが早まったから、首相の口からも大統領に日本の立場を

伝えておいてほしいということですね。

宮本 そうです。中曽根総理は、この軍縮課のペーパー、米ソ軍備管理交渉の現状に関する最後の長いペーパーまでお読みになるのです。

吉田 しっかり読み込まれるのですね。

宮本 しっかり読んで勉強し、分からなかったら「これはどういうことだ」とお聞きになる。大変な勉強家ですよ。

吉田 その上であのパフォーマンスが出てくるのですね。これ大体お話を伺えたので、この後はもう総理が関わってくることは減ってくるかと思いますが、もし何かございましたらお聞かせ下さい。

宮本 私が軍縮課長の時代は、幸いなことに我々の走っている路線と総理のお考えになっているフレームワークが一致していたので、その範囲内で我々が知恵を出してやっていき基本的に了承していただいたということです。「アメリカは何だ」という気持ちには根底にはおありだったかもしれませんが、それを我々に示すことなく、現下の日米関係をマネージしていく上で、なおかつ日本の利益を確保する上で、「それでいいだろう」との判断で我々の上げたものを支持していただいたというのが、大体のところではないでしょうか。

■「グローバル・ダブル・ゼロ」と検証問題

吉田 ありがとうございます。では、3の(3)に移りたいと思います。急転直下の話になりますが、七月にゴルバチョフ書記長が「グローバル・ダブル・ゼロ」という形でLRINFもSRINFも全部ゼロだということを公表して、九月には米ソ間で基本合意が成立するということになりました。これは日本にとっては歓迎すべきことだったと解釈してよろしいですか。

宮本 大歓迎ですね。軍備管理交渉において初めて一つのカテゴリーの兵器が全廃されるという、軍備管理の歴史上画期的な第一歩がこのINF条約だったと私は思っていますから、何の問題もないし、むしろ大歓迎でしたね。それはINFが全体としてグローバル・ゼロになるからです。そうであればエスカレーション・リーダーやMAD戦略の問題も起こらない。ましてや東アジアは通常兵器においてソ連に負けていないし、戦略ミサイルにおいて米ソは均衡している。日本が心配したのは日米安保体制への信頼性の問題でしたから、INFが全廃されればその問題も吹っ飛びます。ソ連の動きの背景は、一にかかってソ連の国内情勢だと思いますよ。ゴルバチョフが欧米との協調路線にかじを切ったのも、これと一致するのではないですか。ゴルバチョフの対欧米外交路線の整合性をチェックされてみたらいいと思いますよ。動きは、基本的にはソ連から来たと思います。

吉田 ソ連国内ということですか。

宮本 ソ連国内というか、ゴルバチョフがそういう格好で、欧米との関係を修復して、そういう環境の中でソ連国内の大改革をやっている限り、ソ連という国はやっていけないということを確認したということでしょう。そのためには、欧米と対立している余裕はないわけです。そこで欧米との協調関係をいかにしてつくり上げていくかというアジェンダ設定となったのでしょうか。かなり早い段階で出てきたのがINFの撤廃条約ではないですか。これから米ソの軍備管理が進んでいくのは、ゴルバチョフの対内外基本方針が出来上がったからだと思います。

吉田 これもプロパガンダの可能性があるという警戒心はありませんでしたか。

宮本 警戒心は常にあります。

吉田 それは消えてはいない。

宮本 あの当時は、「もうやめた」ということになり得るのです。ゴルバチョフがこれだけ真剣だったというのは、今になったからよく分かりますが、あの当時、一〇〇%ゴルバチョフを信用する人なんかいませんよ。外交の世界に身を置いた人間で相手を一〇〇%信用することはありません。常にどこかでだましに来ているかもしれないと思いつき合うのが我々の世界ですから。国と国との関係とはそういうものです。

吉田 (4)番に移りますが、七月にゴルバチョフが「グローバル・ダブル・ゼロ」を言った以降は、INF交渉の焦点が検証の問題に絞られていくように見えます。この検証の問題はテクニカ

ルで、正直私も理解できていないところがたくさんあるのですけれども、日本にとって重要だった点というのはどこだったのでしょうか。

宮本 検証は日本のみならず世界にとって著しく重要で、「ゼロにした」と言われても本当にゼロになったかどうかを確認しなければ自国の安全は担保されません。ここで相手をだますことができれば、相手がゼロになった段階でこちらは圧倒的に有利になるわけです。したがって、確実にそれが削減されるといふ確認の段取りを専門家同士で決めていかなければいけない。これは、著しくテクニカルな、膨大な数の専門家集団を巻きこむプロセスですね。ここに入ると一つ一つの細部が死命を制しかねない。一つの細部が抜け穴になると、相手が秘密裏に持つということを許すことになる。軍事バランスからすると非常に大きい問題なのです。検証は専門家集団が納得するものでなければならぬので、ものすごい時間がかかりますよ。

上田さんは途中で彌田(清)さんと代わりましたが――彌田さんも懸命に勉強してよく助けてくれました――上田さんが軍縮課を去る前に、数か月間アメリカに長期出張してもらい検証問題について勉強してもらいました。彼の検証問題に関する分厚い報告書がありますよ。検証に関して日本はノウハウがゼロです。「核兵器反対」はいいですが、どうやって核兵器を廃棄するのか、廃棄のプロセスをどうやって確実なものにするのかという現実問題と結びつけなければなりません。それを確実にするのが検証です。

吉田 それで日本では抜け落ちてしまっているのですね。

宮本 核兵器に関する知識もない上、検証の知識もゼロですよ。これじゃやっていけないということで、彼にベリフィケーションというものについて勉強してもらおうことにした。そこでアメリカに行ってもらい、検証に関する厚い報告書を書いてもらいました。

吉田 そんなに分厚かったですか。数百ページレベルですね。日本はそれによって、一挙にこの検証に関する知識を得た。

宮本 検証についての基礎認識を我々はそれで得ることができたわけです。だから、その後の検証の議論にどうにかこうにかついていくことができたわけです。あの当時、日本にはどこにもこの分野の専門家はいませんでした。

吉田 軍縮課長時代は、その専門家をつくり出した時期でもあったということですね。

宮本 つくり出しながら、まだ自転車操業の日々だったということです。レイキャビク以来どんだん合意の方向に動き始めており、確実に検証が重要になることはみんな分かっている。そこで検証が注目され始めるわけです。

吉田 そのときに、日本にそのノウハウがない。

宮本 日本は全くない。いずれにしても、検証というのは極めて技術的です。例えば、戦略核兵器に関する合意が履行されていることを確保するために、衛星から見えるようにする検証措置を決めるわけです。だから核弾頭もお互いに見えるようにして廃棄するのでですね。専門家から見ると確実に廃棄されたことを確信できる措置

の集積、それが検証措置と言われるものです。MAD戦略の抑止を確保しながらの削減が提案され、それを担保するのが検証であり、大変技術的なもので、合意書は分厚いものになるはずですよ。

吉田 私はそのテクニカルなものが全然分からず、検証に関しては読み飛ばしてしまいました。

宮本 私も分かりませんが、大変な世界だということですよ。

吉田 それを上田さんがご担当されたんですね。

宮本 軍備管理交渉に関してはそうです。それ以外にも化学兵器などもありますので、そういう分野の専門家と外務省の軍縮をやってきた人たちが検証を担当してきました。

■ 軍縮課長離任と日本の安全保障に関する所感

吉田 これで軍縮課長の時代を聞き終えましたが、よろしいでしょうか。では、最後になります。4番に移りたいと思います。

軍縮課長離任後のお話と、軍縮課長時代のことを含めて総括的なお話を伺えればと思います。

宮本 軍縮課長の後に大臣秘書官になりましたが、物理的には本当に大変なポストでした。例えば軍縮課だと、忙しい時期が終われば比較的暇になります。大臣秘書官は、大臣がそうなので、そのとき外務省で一番忙しい課と付き合われますので、暇になるときはありませんでした。大臣秘書官に連絡しておけば大臣に連絡したことになるし、連絡漏れが永田町、霞が関では最

もやっつてはならないことなので、時間と関係なくとにかく沢山連絡が来しました。そういうのを整理して、翌日の朝大臣に車の中でご説明しました。

国会があるときは大臣用の国会答弁が出来上がるのが大体明け方の三時とか四時で、それが秘書官の自宅に届けられる。答弁書には一応目を通さなければならぬし、六大紙の朝刊を読んで、大臣が質問されそうなものには担当課長と話して準備しておかなければならない。ほとんど寝る時間もないほどでした。それが続いたのが大臣秘書官の一年八か月だったので、軍備管理・軍縮の話は丹念にフォローする時間的、精神的余裕は全くありませんでした。

吉田 一々案件の内容まで把握する余裕はないですね、これは。

宮本 それに、私が一回もやったことなかった経済の問題も、外交上はとても重要です。時間があれば経済局の人に来てもらって教えてもらっていました。

吉田 宇野大臣が軍備管理に関心があるということはなかったですか。

宮本 あまりなかったと記憶しています。

吉田 竹下（登）総理は？

宮本 竹下総理もあまり関心なかったと思います。

吉田 誰も関心がない。

宮本 それがあつた時代だったので。INF交渉の時代は、例外的な指導者と一部の官僚が強い関心を持ち、考え悩んだ時代だった

たと言うことです。

吉田 最後に、軍縮課長時代を振り返る形で所感を伺えればと思うのですが、八〇年代の米ソ軍備管理・軍縮交渉において、日本はどういう位置づけにあったのかあるいはどういう位置づけを求めたのか、総括的なお話をいただければ幸いです。

宮本 ソ連課時代から一応は眺めていたということになりますけれども、主たる関心は対ソ関係でした。したがって、私は八〇年代という期間を通して軍備管理というものをちゃんと見ていなかったもので、皆さんのほうがずっと勉強されており、その結論のほうがおそらく正しいのだらうと思います。私が軍縮課長をしていたときには、世界の軍備管理の問題に日本は明確に関与しているという意識はありませんでした。軍備管理に代表される世界の安全保障の問題を米国のみならず欧州とも恒常的に意見交換をするというプラクティス——その後いつまで続いたか知りませんが——は、始めることができたのではないかと思います。

軍備管理・軍縮で日本が発言する、すなわち安全保障の問題で日本が発言するということは、それはそのまま日本のG7における存在感の高まりになるのです。それまで日本は経済が中心で安全保障では浮いていました。皆さんに申し上げますが、一九七二年に日中が国交正常化したときに『ボストン・グローブ』が経済欄で田中角栄首相の訪中を数行書いた。これが戦後の日本の位置づけだったので。「日本は経済について相談しておけばいい」ということだったので、一九八三年のウィリアムズバ

ーグ・サミットでグローバルな安全保障は不可分であるというプロ
ジションをG7で打ち出したあの頃から、日本は明確にこのプロ
セスに参画したということであって、私がいたときに、ある意味
でそのハイライトを迎えたということではないでしょうか。

そしてその流れの中で、その後のいろいろな問題に日本は関
与しています。例えばソ連が崩壊してロシアになったときに、ソ
連の核廃棄の問題が起こったでしょう。そのときに、それを経済
的に倒産したロシアだけにやらせるのは不可能だということ、
G7の国々はお金を出してロシアの核廃棄を手伝いました。国際
社会としては核が存在していること自体が脅威なので、ロシアに
残存する核のグローバルな脅威を軽減するためにそれをやったわ
けです。ロシアのハバロフスクでの原潜解体に、日本は関与して
います。日本は軍備管理に明確にコミットし、G7の中での存在
感を持つことができたと思います。

しかし同時に、日本は安全保障というものを正面から考えてこ
なかつた。これは戦後日本の根本的な欠陥であり、それは今日ま
でも続いています。だから、総合安全保障という概念が示された
ときも、経済の安全保障、地球の安全という方向に関心が向いて
しまつて、肝腎要の自国の軍事面での安全保障をどうするかとい
うことについての議論が著しく足りませんでした。中国が軍拡を
して中国の軍事的な脅威に直面する今となつても、まだその状況
が続いているわけです。中国に対して腰が定まらないのは、そこ
に原因があるわけです。米ソ冷戦時代にもう少し我々がこの議論

をしておけば、中国に対してはその応用問題でよかつたわけです。
これは、八〇年代も含めてこれまでの日本が抱えている問題です。
何度も言うように軍備管理・軍縮というのは安全保障という盾の
一面ですから、もう一つの面である本来の国防面での安全保障が
しつかりしていないと軍備管理・軍縮を語れないのですね。

私のペーパー（参考資料⑤）の中でいろいろ総合的に考えな
ければいけないという問題提起がなされていますが、今も全く同
じ考えです。トータルに日本の安全保障をどういうふうにするの
か。その中でアメリカの核兵器をどういうふうに位置づけるのか。
そういう核兵器の位置づけの中で具体的な日米協力というものを
どういうふうにしていくのか。そういうトータルな包括的な議論
もなく、イージスの陸上配備とか敵基地攻撃能力とか、そういう
部分的なものばかりやっているでしょう。日本人はすぐに個々の
問題、部分にはまり込んでしまう。個々の問題の狭い範囲で「良
い、悪い」ということをさんざん議論して結論を出す。しかし全
体を眺めた大局から見れば間違つた方向に行っていることも少な
くないのです。これが戦前の日本が犯した本質的な間違いだつた
わけです。同じようにやれば、同じことになりかねない。北朝鮮
の核、それから中国の核（宮本注…二〇二二年二月二四日以降、
ロシアの核も考慮）、そういうものを踏まえたときに、将来的
にどういう形の防衛体制をつくらなければいけないのか。その中
に陸上配備のイージスはどういう位置づけになるのか。しかし、
日本ではこうしたトータルな議論にはならない。陸上配備のマイ

ナスをできるだけ小さくするために海上配備する、そうすると費用がかかるのでどうするのか、そのあたりの議論になっている。日本の安全保障をどうするかという大きな発想が見えてきませんか。

私は、国民の前に今の日本の安全保障の抱えている問題を全部さらけ出して、国民にも一緒に考えてもらわなければならない。海上自衛隊は勤務が厳しくて定員を埋めるのに苦労していると聞きます。装備を準備しても、それを動かす人がいなくてどうするのか。これも重大な日本の安全保障に対する脅威ですよ。そういう問題も含めて全部さらけ出して、「こういうところをちゃんと押さえていかなければ日本の国を守れません。国民の皆さん、ご協力下さい」ということをやらなければ駄目だと思います。ミサイルを配備するにしても、どこに配備するのですか。沖縄ですか。私は沖縄担当大使として一年何か月か沖縄に住んでいましたが、過剰な基地負担にあえぐ沖縄の人をどう説得するのですか。昔、西ドイツが直面したような問題になってしまいますよ。そういうことも含め、トータルに考え、それでもこれしかないということをも国民とともに考え、国民の理解を得なければならぬのです。八〇年代の軍備管理の位置づけではないですけれども、さらに広くフォーカスすれば、そういう努力がなされていないというのが、戦後日本が抱える根本的な問題だと思います。

ついでに、日頃の不満をさらにぶつけると、日本は危機管理体制ができていないということです。安全保障は、ほぼ危機管理体制

同義語なのです。安全保障をちゃんとやれない国は危機管理もできません。

岩間 お話しいただける範囲で構わないのですが、安全保障、特に核が関わる安全保障や軍縮問題を議論する上で、日本が今の形で非核三原則を運用してきたことが、政策担当者にとってどういう意味を持っていたのかということをお話いただけますでしょうか。

宮本 この問題は安保課長と条約課長の専管事項であり、軍縮課長としてこの問題にタッチしたことはありません。核の問題についてはアメリカの核に依拠して日本の安全を保つことをNPT条約に入ったときに最終的な国家意思として確定したわけです。日本の安全は米ソ冷戦時代、アメリカの核に全面的に依存していたわけです。この現実と、国内の政治的要請から出てきた非核三原則は、場合によっては矛盾する。それでも日本は生きていかなければならないので、アメリカの核の運用にできるだけ障害にならないように協力してきたということではないでしょうか。そこに政治指導者や担当責任者の壮絶な葛藤があったことは想像に難くありません。したがって、日本の非核三原則は安全保障の現場ではそういう緊張というか痛みというか傷というか、それをつくり出してきたということですね。日本は基本的に、アメリカの核に依存して他国の核を抑止するという戦略に立っているわけですから。

北朝鮮の核が現実のものとなって、日本の国内世論がどうな

るか。中国の核の脅威を日本が直接感じ始めたらどうなるか（宮本注…ロシアも極東で核の恫喝をする可能性が出てきた）。アメリカに対する信頼性がどうなるか。最終的に最も信頼性の高い抑止力というのは、結局は自分で核を持つことではないか、と国民が考え始める可能性はゼロではありません。そうになると、非核三原則は真正面から挑戦を受けることになります。核不拡散体制の崩壊にもつながりかねません。それは人類の悲劇です。そうならないように英知を絞る必要がありますが、その前に非核三原則をどうするかという問題について答えを出さなければいけないということになると思います。いいですか、岩間さん、こんなところ

岩間 ありがとうございます。これは政権が吹っ飛びかねない政治問題ですから、どうやったら突破できるかというのは、我々にとっても悩ましいところですが、でも、そこを議論しないといけませんね。最近、中国の中距離のミサイルに対してどうするかという話がすぐ出てきますけれども、その部分も含めて議論しないと、議論の質は上がらないですよ。

宮本 日本人も急に変わりますからね。

岩間 北朝鮮のミサイルが飛んだ途端にミサイル防衛が一気に実現したときには、私も啞然としました。

宮本 そのように、日本の雰囲気も変わります。念のために言うておきますと、私は日本が核保有しないことが正しい答えであると思っております。しかし、ロケットにしるブルトニウムし

ろ、核兵器を製造できる能力は保有しておくべきだと考えています。これが日本の最大の抑止力だと思っておりますから。アメリカの将来も、中国の将来も、不確実性が増しています。その中で日本は生きていかなければならない。そして核がゼロになる日は、来たとしても遠い将来ということでしょう。自分で核を保有する能力を持つというのは、日本にとっての最大の保険ではないかなという気がします。

それでも私は、前回の講義（二〇二〇年九月一九日のGRI PSでの第一三回公開研究会）のときに話した『論座』に載せた軍科審時代の論文（「米国の「一国主義」と日本の核軍縮政策…安全保障のもう一つの柱を考える時がきた」『論座』第八三号（二〇〇二年四月））に書きましたけれども、やはり日本は核軍縮、つまり核を地球からなくすことを国家目標として進んでいくべきだと考えています。その道は厳しいという現実的な視点を持って、それでも長期目標として追求するということを日本の根本的核戦略として定めるべきです。核の増強の動きに負けないぐらいい核軍縮の動きは強めたい。そうする価値は十分あるし、世界の大多数の国はそれを支持してくれるはずですが、その議論を核兵器国が耳を傾けるものにできるかどうか、我々の力量が試されています。工程表をつくり、一歩ずつ目標に向かって進んでいく姿勢を示すことを、国民も願っていると思います。

岩間 私は、日本も核禁条約にオプザーバーで参加すればいいと時々言っているのですが、なかなか賛成してくれる人はいません。

宮本 私は賛成ですよ。『論座』の論文にも書きましたけれども、核兵器ゼロというのは日本の究極的な安全保障なのです。日本はつくる意思というのを国家として放棄していますから、世界中で核がゼロになるというのは絶対的に正しいのです。その最終的な目標を、核兵器禁止条約と共有しているわけです。日本は「手段について異議あり。だから反対」ということを言う必要はないですよ。ここはアメリカと違ってもいいと思います。日本は国連に核兵器廃絶決議案を毎年出していますが、アメリカが反対したこともあります。この決議案は、日本の国民世論、国民の意思の表れなのです。政府としてはそのために努力していることを国民に示しているわけです。要は、アメリカの核抑止力を実質的に損なうようなものになっていなければ許容範囲だと思えます。

だから、核禁条約にオブザーバーを派遣して、明確に「このこういうところが問題であり、それらが改善されない限りこの条約に日本政府が入ることはない。しかし核軍縮、核の最終的な廃絶という最終目標については日本政府としては支持する」という立場を明らかにすることに問題があるとは思いません。

岩間 私もどこかに書いてみますかね。

宮本 是非そうして下さい。以前お話ししましたが、CTBT (Comprehensive Nuclear-Test-Ban Treaty: 包括的核実験禁止条約) のための地震計を使った核実験探知システムを構築するために日本は大変な努力をしました。それは国民の核の廃絶に向けた願いを込めて日本政府がとった具体的行動なのです。それとア

メリカの核抑止の下に成り立つ日本の安全保障を両立させているのですよ。したがって核兵器禁止条約に関して言えば、オブザーバー派遣ぐらいはいいのではないかとという理屈は成り立つのではないのでしょうか。

吉田 本日もありがとうございます。全四回、本当に濃密な時間を過ごさせていただきました。ありがとうございます。

宮本 そうですか。そう言っていただけではありません。

吉田 極めて内容の濃いお話だったのでないかと思えます。

宮本 皆さん方に刺激されて記憶も少し蘇り、あの時代のことが雰囲氣的にも戻ってきた感じがしますね。

吉田 よかったです。八〇年代の軍備管理・軍縮問題で日本が経験したことというのは、おそらく今も今後も役立つことが多いと思うので、研究者としてしっかり記録や論文に残していく必要があると再認識しています。

宮本 かつ政策的にも発信して下さい。

吉田 頑張ります。

宮本 では、失礼します。

—了—

*本冊子は文部科学省科学研究費助成事業・基盤研究(A)「核不拡散体制の成立と安全保障政策の再定義」プロジェクト〔課題番号 17H00972〕および政策研究センター リサーチ・プロジェクト (G221RP205)「軍備管理・軍縮のヨーロッパにおける歴史的意義とアジアにおける可能性」により作成した。

*許可なく公開、複製、転載を禁ず。

2023年2月28日

政策研究大学院大学（政策研究院）

〒106 - 0032 東京都港区六本木 7-22-1
TEL: 03-6439-6000 FAX: 03-6439-6010

